

ヨハネの黙示録

すぐに起こるはずのこと

第4巻

ゴットホルド・ベック著

ゴットホルド・ベック著

すぐに起こるはずのこと

第4巻

ヨハネの黙示録

見よ。わたしはすぐに来る。(黙示録 22・12)

黙示録 16章～22章



すぐに起こるはずのこと

ヨハネの黙示録

第4巻

ゴットホルド・ベック著

イエス・キリストの黙示。これは、
すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに
示すため、神がキリストにお与えになった
ものである。そしてキリストは、その御使いを
遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。

(ヨハネの黙示録 1:1)

目次

すぐに起こるはずのこと ヨハネの黙示録 (第4巻)

まえがき ゴットホルド・ベック 6

第3部

(黙示録対応章・節)

28	七つの鉢のさばき	16	1	21	9
29	小羊のバビロンに対する勝利	17	1	18	33
30	最後の審判とバビロンの破滅	18	1	24	73
31	三つの「ハレルヤ」と小羊の婚姻	19	1	10	107
32	開かれた天	19	11	16	139
33	ハルマゲドンにおける戦いとさばき	19	17	21	166
34	サタンの影響の排除	20	1	3	179
35	キリストによる支配の始まり	20	4	6	201

目次

36	本物かどうかの吟味	20	7	10	220
37	人間に対する最後の審判	20	11	15	245
38	新しい神の世界	21	1	8	266
39	小羊の妻である花嫁、新しいエルサレム	21	9	22	292
40	高く引き上げられた方のあとがき	22	6	21	315
	あとがき				354
	キリスト集会のご案内				
	キリスト集会出版物のご案内				
	ゴットホルド・ベック				

28 七つの鉢のさばき

黙示録16章1節から21節まで

- 1 第一の鉢のさばき
- 2 第二の鉢のさばき
- 3 第三の鉢のさばき
- 4 第四の鉢のさばき
- 5 第五の鉢のさばき
- 6 第六の鉢のさばき
- 7 第七の鉢のさばきとイエス・キリストの国の実現

また、私は、大きな声が聖所から出て、七人の御使いに言うのを聞いた。「行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、地に向けてぶちまけよ。」そこで、第一の御使いが出て行き、鉢を地に向けてぶちまけた。すると、獣の刻印を受けている人々と、獣の像を拜む人々に、ひどい悪性のはれものができた。第二の御使いが鉢を海にぶちまけた。すると、海は死者の血のような血になった。海の中のいのちのあるものは、みな死んだ。第三の御使いが鉢を川と水の源とにぶちまけた。すると、それらは血になった。また私は、水をつかさどる御使いがこう言うのを聞いた。「常にいまし、昔います聖なる方。あなたは正しい方です。なぜならあなたは、このようなさばきをなされたからです。彼らは聖徒たちや預言者たちの血を流しましたが、あなたは、その血を彼らに飲ませました。彼らは、そうされるにふさわしい者たちです。」また私は、祭壇がこう言うのを聞いた。「しかり。主よ。万物の支配者である神よ。あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。」第四の御使いが鉢を太陽に向けてぶちまけた。すると、太陽は火で人々を焼くことを許された。こうして、人々は激しい炎熱によって焼かれた。しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかった。第五の御使いが、鉢を獣の座にぶちまけた。すると、獣の国は暗くなり、人々は苦しみのあまり舌をかんだ。そして、その苦しみと、はれものとのゆえに、天の神に対してけがしごとを言い、自分の行ないを悔い改めようとしなかった。第六の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけた。すると、水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かれてしまっ

た。¹³ また、私は竜の口と、獸の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた靈どもが三つ出て来るのを見た。彼らはしるしを行なう悪靈どもの靈である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神の大きいなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。¹⁵ 見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである。——¹⁶ こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。第七の御使いが鉢を空中におちまけた。すると、大きな声が御座を出て、聖所の中から出て来て、「事は成就した。」と言った。¹⁸すると、いならずまと声と雷鳴があり、大きな地震があった。この地震は人間が地上に住んで以来、かつてなかったほどのもので、それほど大きな、強い地震であった。¹⁹また、あの大きな都は三つに裂かれ、諸国の民の町は倒れた。そして、大バビロンは、神の前に覚えられて、神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。²⁰鳥はすべて逃げ去り、山々は見えなくなった。²¹また、一タラントほどの大きな雹が、人々の上に天から降って来た。人々は、この雹の災害のため、神にけがしごとを言った。その災害が非常に激しかったからである。

(黙示 16・1—21)

黙示録16章の主題は、「世界史における最後の舞台」、「最後の苦難における神の完成」、「七つの鉢のさばき」です。全編を通して、この章ほど神の怒りが明らかに示されている箇所はほかにありません。

「神の怒り」という言葉は、聖書においては、神が怒りによって人を悔い改めへと導くということではなく、「最後のさばきを行なう」ことを意味しています。

神の怒りは、神が不正に対して下される、もつとも激しいさばきとなって現われます。不正は、「正しい状態」が回復されるために、きびしくさばかれなければなりません。聖書は、神の怒りによって神の計画が実現すると、はっきりと述べています。神の目的は、義と平和が支配する、ご自身の完全な支配にあります。もし神が、悪魔や人間の反抗に対して怒りをもって答えられなければ、義や平和の支配はありません。神は抵抗する者に対して、さばきを行なわれる前に、あらかじめさばきに対する警告を与えておられます。

「わたしは、わたしの名のために、怒りを遅らせ、わたしの榮譽のために、これを押さえて、あなたを絶ち滅ぼさなかつた。」
(イザヤ 48・9)

「主は怒るのにおそく、恵み豊かである。咎とそむきを赦すが、罰すべき者は必ず罰して、父の咎を子に報い、三代、四代に及ぼす。」
(民数記 14・18)

神の怒りは、最後のさばきの時に一瞬のうちに来るのではなく、徐々に力を増しながらやってきます。その間に、悔い改めの機会を残しながらやってきます。しかし神の寛容が軽んじられるときに、神の最後の怒りが起こるのです。

神の愛の招きを、幾度も体験しながらなお心をかたくなにした者は、神の最後の怒りに出会います。旧約聖書においても、新約聖書においても、神はなにもものにも増して恐るべきお方であることが記されています。

神のみが、すべてを滅ぼす力を持っておられます。主なる神は、唯一の恐ろしいお方です。しかし、イエス様の血に対して感謝がささげられる場合には、神の怒りは遠ざけられ、罪が聖められるのです。

私たちは、黙示録16章の「七つの鉢のさばき」を、出エジプト記のわざわいの個所や、黙示録8章から10章の「ラツパのさばき」と比較することができます。黙示録16章を学ぶにあたって、まず出エジプト記の7章、9章、12章の後半、黙示録の8章7節から12節、9章1節から11節、13節から21節、11章15節から18節に目を通し、これから学ぶ黙示録16章と読み比べてごらんになることをおすすめします。

さて、まず、黙示録の「ラツパのさばき」と、「七つの鉢のさばき」を比較してみましよう。

- 1 第一のラツパのさばきと第一の鉢のさばきは、ともに地に対するさばきです。
- 2 第二のラツパのさばきと第二の鉢のさばきは、ともに海に対するさばきです。
- 3 第三のラツパのさばきと第三の鉢のさばきは、ともに川と川の源に対するさばきです。

4 第四のラツパのさばきと第四の鉢のさばきは、ともに太陽にたいするさばきです。

5 第五のラツパのさばきと第五の鉢のさばきは、ともに暗闇と死を見つけることができない苦しみのさばきです。

6 第六のラツパのさばきと第六の鉢のさばきは、ともにユーフラテス河からの軍勢のさばきです。

7 第七のラツパのさばきと第七の鉢のさばきは、ともにキリストの国によるさばきです。

「七つのラツパのさばき」は、「七つの封印のさばき」に続いて行なわれています。しかし、「七つの鉢のさばき」は、「七つのラツパのさばき」の続きとして行なわれているではありません。そのさばきは、イエス様がふたたびこの世に来られるまでに行なわれません。

第七の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」それから、神の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神を礼拝して、言った。「万物の支配者、常にいます、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、王となられたことを感謝します。諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りの日が来しました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。」

(黙示 11・15—18)

黙示録11章では、来るべき主の御国についてはくわしく述べられていません。なぜなら、それまでに起こるべき多くのことが、まだ残されているからです。

「七つの鉢のさばき」は、千年王国が来る時まで続けられる、最後のさばきであり、わざわいです。時期的には「七つの鉢のさばき」は「ラツパのさばき」とほとんど同時に行なわれるのですが、「七つの鉢のさばき」は「ラツパのさばき」よりも遅れて行なわれます。

「七つの鉢のさばき」は、最終のさばきです。「七つの鉢のさばき」は、前のさばきよりもより重く、全面的なさばきです。「ラツパのさばき」においては、三分の一のものがさばきに会うのですが（8章7-12節参照）、「七つの鉢のさばき」においては、すべての敵が滅ぼし尽くされます。黙示録16章の中では、「大きい」という言葉が十一回出てきます。これは最後のさばきが驚くほど「大きい」ことを示しています。このさばきは、短い期間に次々に行なわれます。この時、人々は「神は死んだ」と言うようになり、「人間が全能である」ように思われます。しかし私たちが、悪魔が七人の御使いによって滅ぼされるのを見ます。さばきは「神の」さばきであり、神の命令の下で行なわれるのです。

では、「七つの鉢のさばき」について、学んでいきましょう。

1 第一の鉢のさばき

第一の鉢のさばきは、第1、2節にあるように、地に対するさばきです。1節にある聖所から大きな声は神の声です。神が命令を与えられた後で、はじめて御使いがさばきを行なうことが

できます。御使いは、今現在は人々の救いを助けるために遣わされていますが、終わりの時には、御使いはさばきのために遣わされます。第一の「鉢のさばき」は、その昔のエジプトの第六のわざわいに似ています。

「それがエジプト全土にわたって、細かいほこりとなると、エジプト全土の人と獣につき、うみの出る腫物となる。」
(出エジプト 9・9)

このように、エジプト人にはうみの出る腫物ができたのですが、第一の「鉢のさばき」では、獣を拝む人々に「ひどい悪性のはれもの」ができます。このはれものは、はげしい苦痛をもたらし、生きる喜びを奪います。

かつてパロは、神の声を聞こうとはしませんでした。この罪に対して神が下された罰は、パロの心をかたくなにすることでした。終わりの時代には、神の声を聞こうとしない者には、神の声が永遠に失われてしまいます。9節にあるように、人は神の声を聞こうとせず、悔い改めて神をあがめることをせず、けがしごとを言い、罪をおかし続けます。この罪に対するさばきは、容赦のないものです。

かつてヤコブは、若いときにその父を裏切り(創世記27・24)、歳を取ってから子供たちにあざむかれました。神への不従順は、必ずその結果をともえません。

神はあなどられたり、けがされたりされるお方ではありません。獣の刻印を受けている人々、反キリストと偶像崇拜者たちは、恐ろしいはれものを与えられるのです。エジプトのわざわいが

歴史的な現実だったのと同じように、終わりの時における苦しみもまた、歴史的な現実となるのです。

これらのはれものは治療することが不可能であり、わざわざは世界中に広まっていきます。それでももちろん精神的な苦痛も激しくなります。人々は平静さを失い、外面的にも内面的にも激しい苦痛にさいなまれます。これらの人々は、獣に喜んで従った人々であり、獣によって守られるはずの人々ですが、実際には安心も守りも与えられません。これもまた恐るべきさばきです。神に対する礼拝を拒む人々は、きびしいさばきを受けるのです。

2 第二の鉢のさばき

第二の「鉢のさばき」は、海に対するさばきです。16章3節には海に対するさばきが告げられています。神の寛容は終わるのです。さばきはもはや、先に延ばされることはありません。神の御名によってさばきが行なわれるのです。それまで汚されてきた神の御名が、このときに聖められるのです。

黙示録8章の8、9節に出てくる第二のラツパのさばきも、恐るべきものでした。なぜなら海の三分の一が血に変えられたからです。しかし黙示録16章3節においては、すべての海とその生き物とは、血に変えられます。この海はおそらく地中海のことでしょう。核爆発や生物化学兵器によって、海とその中の生物がすべて血に変えられる可能性は否定できません。

また、海という言葉は、すべての国民を指すために用いられる言葉です。反キリストは地上の

国民に楽園への錯覚を約束します。しかしそれは、神なき平和の約束です。その結果は混乱と腐敗です。人間の利己主義が、すべてのものを破壊するのです。終わりの時には、真の意味での生活はもはや存在しなくなります。ここで言う「真の意味での生活」とは、生ける神との交わりをもった生活のことです。神と分離している状態は破局的です。

「わたしを見失う者は自分自身をそこない、わたしを憎む者はみな、死を愛する。」

(箴言 8・36)

主イエス様を拒む者は、意識すると意識しないにかかわらず、死を選ぶ者です。

3 第二の鉢のさばき

第三の鉢のさばきは、川と水の源に対するさばきです。このさばきは、4節から7節に記されています。この部分は私たちに、出エジプト記7章20節のエジプトに対するわざわいと、黙示録8章10節にある第三のラツパのさばきを思い起こさせます。水は苦くなり、血に変えられるのです。水はいのちと生命力の象徴です。

黙示録14章7節によると、人々は水を欲していながら、水を創造した主を認めようとしないことが記されています。こういう人々に対する忍耐が終わるとともに、罪とかたくなさに対する神のさばきが行なわれるのです。罪のさばきに対する真の恐ろしさを、私たちは想像することができません。水が血に変わる時には、人間は水を飲むことができなくなります。それは生命の維持

ができなくなることであり、水に依存した日常生活のすべてが不可能になることです。自然界もまたその生命を維持できなくなり、枯れ果ててしまうのです。海や川、水の源が汚染されれば、地球の自然環境は破壊され、すべての動物、植物はその生命を失うことでしょう。

神は、さばきにおいても、恵みにおいても、ともに絶対的に正しいお方です。この神の正しさがここに現わされているのです。私たちは二つの賛美を天から聞くのです。二人の証し人が神の正しさを証ししています。

まず、5節以降で「水をつかさどる御使い」が語っています。それは、7章1節にある風をつかさどる御使い、14章18節にある火をつかさどる御使いと対応しています。水、風、火などは、ここでは御使いに委ねられています。そして、16章5節では、水をつかさどる御使いは、神に対して、「あなたは正しい方です」と叫んでいます。

私たちはさばきの時に、そのさばきだけを見るなら、あまりのきびしさにたじろぐでしょう。きびしすぎる、と思われるかもしれません。しかし、さばきに至る長い歴史の中で見るなら、その正しさが理解できます。さばきに至る前には、長い神の忍耐の歴史があり、人間のかたくなさの長い歴史があります。そのことを考えれば、私たちはこの御使いと同じように、「神よ。あなたは正しい」と言わざるをえません。

神のさばきには、理由があります。それまで、たくさんの預言者と聖者の血が流されてきました。これに対する神の答が、「血となった水」です。預言者、聖者の血を流させた人々は、蒔いたものを刈り取らなければならぬのです。これらの人々は、神の言葉と神の霊と、神のしもべ

たちを拒みました。これらの罪に対する当然の報いが、「川と水の源に対するさばき」なのです。次に、7節の「祭壇」もまた、神の義をたたえています。この「祭壇」は、6章9節にある殉教者たちの声を表わしています。殉教者たちの求めに対する答がここに記されているのです。神の正しさは、さばきによって明らかにされます。

川の流れは源から流れ出ています。私たちの周囲にある、教育、文化、宣伝、映画、テレビ、インターネットなどは、川の水と見ることもできます。人が神の言葉を聞こうとしない時には、これらのものは神の言葉以外の源から流れ出て、社会を汚染します。その一例として、神聖であるべき結婚を解消して、自由な行動に走り、真理を破壊する者は、それによって自らを毒することになります。神の言葉のみが清めの力を持っています。私たちは何に従って生き、何によって自らを養っているのでしょうか。

4 第四の鉢のさばき

第四のさばきは、人々を焼く太陽の火のさばきです。8節から9節を見てみましょう。かつて学んだラッパのさばきにおいては、太陽の三分の一は光を失って暗くされました。しかし、いまや鉢のさばきによって、人々は太陽の激しい炎熱によって焼かれることになりました。

今地球は、人間の限度を超えた自然破壊によって、気候の温暖化が進んでいます。かつて緑に覆われていた地域には雨が降らなくなり、砂漠化しています。太陽は地球よりも、直径で約百倍、体積で約三万倍大きく、その熱は五千七百度あります。地球の気温が炎熱のように上がることは、

決してありえないことはありません。その時には太陽は、恵みの光の源ではなく、激しい苦しみ之源に変えられるのです。

この部分について、ある人は、「太陽は権力者の最高の権威の象徴にされてきたので、人々は終わりの時代に独裁者によって奴隷にされて苦しむ」という意味にとっています。またある人は、「太陽はイエス様を象徴し、残りの者たちの中に、ご自身のいのちと栄光を現わされるのだ」と見えています。主が、残りの者たちの中に栄光を現わされる時には、それは悔い改めたくない者たちに対する一つの証しとなります。しかしそれは、人々を悔い改めに導くのではなくして、反抗を呼び起こすこととなります。神の存在はすべての者にとって明らかにされますが、しかし彼らは、悔い改めようとはしないのです。

5節から7節において、私たちは神をたたえる声を聞くことができましたが、今度は下からのろい声を聞くこととなります。それは獣に従う者たちの声です。

そこで、彼（獣）はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。 （黙示 13・6）

人々は、この雹の災害のため、神にけがしごとを言った。 （黙示 16・21）

悩みの中で、彼らは神が生きておられることを知りましたが、悔い改めようとはしないのです。彼らは神に帰されるべき栄光を神に帰そうとはしなかったのです。エジプトのパロは苦しみの後

で、悔い改めることをしないばかりか、かえって心をかたくなにしたのです。

同じように、終わりの時代において、「人々は心を神に向けようとしなければならず、苦しみの中で、神をのろう」のです。人は神の前に降伏して恵みを求めるときに救いを得るのです。

私たちはここで、「さばき」が自動的に聖めや回心を行なうのではないことを見ることができず。この「さばき」は、悔い改めの用意のある人のためのものではありません。悔い改めのあるところには、希望もまたあるのです。悔い改めがなされるときには、なにごとく、望みがなくなることはありません。

多くの人々は、後になつたら悔い改めよう、と言っているのです。しかし私たちは、悔い改めは、罪人が聖霊に導かれるときにおいてのみ可能であることを知らなければなりません。聖霊は意識的に悔い改めをしようとしないう人を導くことはできません。苦難ではなく、聖霊が、悔い改めへと人を導くのです。

終わりの時代の苦しみは、「かまど」のようなものだ、マラキは言っています。(マラキ 4・1)しかし神に従う者は、火に焼かれることはなく、主があなたの永遠の光となるのです。(イザヤ 60・20)

私たちが「鉢のさばき」について学ぶとき、多くの象徴が暗示されていることを知ります。しかし私たちはこの「鉢のさばき」において、出エジプト記に記されている四つのわざわいがここに繰り返されていることを知ります。エジプトの四つのわざわいは、実際に起こったことでした。ですから、「鉢のさばき」も、必ず実際に起こることでしょう。

5 第五の鉢のさばき

第五の鉢のさばきは、10節から11節にある通り、暗やみと死のない苦しみがもたらされます。さばきの御使いは順番に登場しますが、さばきは一つだけではなく、いくつかが同時進行で行なわれることもありえます。多くの御使いたちが、同時に神からの命令を受けて、それぞれのさばきを行なうことも十分にありえるのです。

第五の御使いは、獣の国を攻撃します。13章の2節にあるとおり、この獣がサタンであることは言うまでもありません。その攻撃の結果は、19章20節、20章1から3節までに記されています。このさばきは出エジプト記にある第九のわざわいを思い起こさせます。

主はモーセに仰せられた。「あなたの手を天に向けて差し伸べ、やみがエジプトの地の上来て、やみにさわれるほどにせよ。」モーセが天に向けて手を差し伸ばしたとき、エジプト全土は三日間真暗やみとなった。三日間、だれも互いに見ることも、自分の場所から立つこともできなかつた。しかしイスラエル人の住む所には光があつた。

(出エジプト 10・21—23)

それは同時に、ヨエル書に告げられていることの成就でもあります。

この地に住むすべての者は、わななけ。主の日が来るからだ。その日は近い。やみと、暗黒の日。雲と、暗やみの日。

(ヨエル 2・1、2)

黙示録16章10節に書かれているとおり、反キリストの国は闇に包まれます。すべての者は、囚人のようにその場を動くことができなくなるのです。もちろん政府も、行政機関も、産業も、経済も、交通も、麻痺状態におちいることでしょう。

光よりも闇を愛する者たちは、闇の中に座ることになります。「悔い改めがない」ということは恐ろしい結果をもたらします。彼らはどんなことがあっても罪を認めようとはしないのですが、神のさばきは容赦なく下されます。つまり、人は神に対して「降伏」するか、あるいは「打ち砕かれる」かのいずれかです。

人の頑なさ、終わりの時代に、さらにひどくなります。地上のすべてのものが虚しいことを知りながらも、彼らは自分の力に拠って立とうとします。彼らは、へりくだること、悔い改めをすることを拒みます。人は自分のまちがいと認めてイエス様のもとに来ることをしないで、「意識して自分から」滅びへと向かうのです。終わりの世の特徴は、混乱と暗闇です。

6 第六の鉢のさばき

第六番目の御使いは、鉢をユーフラテス川にぶちまけます。その結果、神の大いなる日の戦いに備えて、王たちが集められます。この部分、12節から16節までに、七つのことが示されています。

最初に、ユーフラテス川が涸れます。かつてイスラエルの民を通すために紅海が二つに分かれ

ましたが、ユーフラテス川は日の出るほう、東からの王を導くために涸れるのです。ユーフラテス川は、ローマ帝国とほかの諸国との境界線でした。水が涸れてしまうとその境界線はなくなります。そして、それに続いて、世界的な大きなできごとが起こります。つまり、「神なき世界の崩壊」です。

二番目に、この奇蹟の目的が記されています。すべての国民と国々が、パレスチナに集められるのがその目的です。五番目の鉢のさばきは、反キリストに向かつて行なわれますが、六番目の鉢のさばきは、すべての国々に向かつて行なわれます。人類の大部分は東洋に住んでいます。これらの国々がパレスチナへ入るためには、ユーフラテス川は涸れなければなりません。

三番目に、悪魔の竜と、反キリストと、にせ預言者が一つになるのを見ることが出来ます。彼らの口から、汚れた霊が出てきます。彼らは悪魔の国について語るために出てくるのです。これらの蛙のような三つの汚れた霊とは、諸国の政府を欺く外交官、その背後にある政治家たちと見ることもできます。悪魔が政治を行ない、蛙はその政治家であり外交官です。政治家は、汚れた霊によって導かれるのです。

四番目に、その結果が記されています。14節にあるように、大きな群れ、軍勢がそこに集ってきます。イスラエルに対する戦いは、いまや神に対する戦いになります。あらゆる国家が世界を自分のものにして争います。しかしこの世は厳然として主イエスのものです。これらの軍勢はすべての犠牲をはらって、そのことを否定しようとかかります。

五番目に、これらの政治家には、「しるしを行なう」、つまり奇跡を行なう力が与えられています。

す。エジプトの魔術師や反キリストが奇跡を行なったように、これらの政治家たちも奇跡を行なう力を持つのです。

六番目に、キリストの聲が記されています。悪霊たちは、最後の戦いに備えて、あらゆる軍備を増強し、最後の戦いに備えようとしています。しかし、黙示録の著者ヨハネは、この時、「わたしは間もなく来る」というイエス様の声を聞きました。主を信じる者は、悪霊である蛙の惑わしに誘惑されてはなりません。断固としてイエス様を待ち望まなければなりません。この最後の戦いにおいて、悪魔である竜は勝利者として自らを誇示しようと全力をあげます。しかしこの最後の戦いにおいて、悪魔の無力さが明らかにされ、主なる神が勝利者となります。悪魔は千年王国の間、地の底に捕らえられるのです。

七番目に、16節において初めてハルマゲドンという地名が出てきます。これはカルメル山麓のメギド地方ではないかとも考えられています。というのは、ここで旧約の時代に大きな戦いが行なわれたことがあるからです。

王たちはやって来て、戦った。そのとき、カナンの王たちは、メギドの流れのそばのタ
ナクで戦って……
(士師記 5・19)

それでも彼(アハズヤ)はメギドに逃げたが、そこで死んだ。
(Ⅱ列王記 9・27)

ハルマゲドンの戦いにおいて、王たちの軍勢は集合しますが、戦いは実際には起こりません。

主イエスがご自身で現われ、口の剣をもってすべての軍勢を滅ぼし尽くされるからです。

この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。(黙示 19・15)

残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、……(黙示 19・21)

ハルマゲドンにおいては、王たちは戦端を開く前に、自分が全世界の支配者である神になるのだということをしてんでに要求し、神の栄光を、さも自分のものであるかのように、主張しあうのです。

12節にあるユーフラテス河が乾く、ということは、人類が、政治的、経済的、文化的、宗教的に一つにされることをも意味しています。各人は心の拠り所を失って、自分がよいと思うことを行なうようになるのです。人は良心を失って、悪魔の霊に支配されるようになります。人類ははじめ、神と神の民に対して反抗しようとして思想統一がなされるのです。このことは、少数の真の信者にとつては恐るべき状態です。

7 第七の鉢のさばきとイエス・キリストの国の実現

さて、16章の17節から21節において、主イエスご自身が圧倒的な姿を現わされて、勝利を明らかに示されます。

まず最初に、第七の御使いが鉢を空中にぶちまけます。つまり、怒りはすべてのものの上に注

がれます。もつとも恐るべきことがいよいよ始まるのです。

これらのものは滅びるでしょう。しかし、あなたはながらえられます。(詩篇 102・26)

「目を天に上げよ。また下の地を見よ。天は煙のように散りうせ、地も衣のように古びて、その上に住む者は、ぶよのように死ぬ。しかし、わたしの救いはとこしえに続き、わたしの義はくじけないからだ。」

(イザヤ 51・6)

「これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。」

(マタイ 24・29)

(主は)約束をもつて、こう言われます。「わたしはもう一度、地だけではなく、天も揺り動かす。」……私たちは揺り動かされない御国を受けているのですから、感謝しようではありませんか。

(ヘブル 12・26、28)

神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。

(Ⅱペテロ 3・12、13)

悪魔は空中の権を持つ暗やみの世界の支配者である、と聖書は告げています。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。
(エペソ 6・12)

この悪魔に対して、神の激しい怒りが注がれるのです。それは悪魔の国と、悪魔の根源に向かつて注がれます。

二番目に、ヨハネは大きな声が天から聞こえてくるのを聞きました。それは「成就した。」という声でした。「成就した」という言葉は、十字架の上でイエス様の「救いが成就した」ときにでてきました。しかし黙示録のこの箇所での「成就」は、「さばきが成就した」ことを意味しています。

イエス様は私たちの罪のために十字架についでくださいました。そして私たちに代わって罪のさばきを受けてくださいました。そのとき、神のさばきがイエス様に下されたのです。イエス様はすべてが「成就した。」と叫ばれました。このことによつて、私たちは罪の赦しと永遠のいのちを主からいただいたのです。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。
(Iヨハネ 1・9)

「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのとこ

ろに来る者を、わたしは決して捨てません。」

(ヨハネ 6・37)

しかし、イエス様を拒む者は、その時にさばきを受けます。イエス様を拒むことについては、出エジプト記9章13節から35節の、かたくななパロに主が雷と雹を降らせられた箇所が思い出されます。このようなわざわいをもってしても、エジプトの人々は決して悔い改めようとはしませんでした。現代では、どうでしょうか。

第三番目に、19節で「大きな都が三つに裂かれる」ことが書かれています。11章8節で見たように、この大きな都とはエルサレムのことです。これは、イザヤ書2章19節から21節、ハガイ書2章6、7節にある預言の成就を意味しているのです。ゼカリヤ書14章4節の預言のとおり、オリブ山は二つに分かれ、都は三つに分かれるのです。

四番目に、19節で、大バビロンは神の激しいさばきを受けます。このことは、黙示録の17章と18章においてくわしく述べられています。バビロンは宗教的な誘惑者を意味します。

五番目に、18節で、大きな地震が起こり、すべてのものが地震に襲われます。20節には島や山々のことが記されていますが、「島や山々」は逃れの場所を意味します。しかし地震が襲うときには、これらのものは何の役にも立たず、安全な場所はどこにも存在しません。

第六番目に、21節で、大きな雹が天から降ってきます。この雹の重さはほぼ五十キロだと考えられます。ハルマゲドンに集る者たちは、この大きな雹で滅ぼされるのかもしれないかもしれません。つまり、人間の栄光は失われてしまうのです。

第七番目に、21節で、人の心の中にある思いが明るみに出されます。この恐るべきさばきは、神の怒りの現われです。神は聖にして正しいお方ですから、さばきを行なわなければならないのです。

このさばきに対して、天は何と言っているのでしょうか。また、人間は何と言っているのでしょうか。それを3項目に分けて対比してみましよう。

まず、天からの声です。

・ 7節「あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。」

・ 15節「わたしは……来る。」これはイエス様のお言葉です。さばきは再臨の前触れです。

・ 17節「事は成就した。」これはさばきの完了を意味しています。

これに対して、人間はさばきについて次のように言っています。

・ 9節「神の御名に対してけがしごとを言い……」

・ 11節「苦しみと、はれもののゆえに、天の神に対してけがしごとを言い……」

・ 21節「雹の災害のため、神にけがしごとを言った。」

人々はさばきが神からのものであることを知り、神をのろうのです。神に対する拒絶はますますひどくなり、人々はさばきに向かって成熟していくのです。人は神の恐るべきさばきを知っても、悔い改めようとはしません。つまりそこには、恵みと赦しを求める悔い改めは見出されず、罪の中にとどまり続ける状態が続きます。さばきがひどくなればなるほど、彼らの心はますます頑なになっていくのです。

人はさばきを通して天国に行くのではありません。天国に行くただ一つの道は、主イエス様を通してのみ開かれているのです。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」(ヨハネ 14・6)

29 小羊のバビロンに対する勝利

黙示録17章1節から18節まで

- 1 淫婦バビロン
 - 1 世界的な都市
 - 2 富と宝の蓄積
 - 3 外見の美しさ
 - 4 額に記される名前
 - 5 殉教者への迫害
 - 6 ローマの別名
- 2 反キリストの獣
 - 1 世界帝国
 - 2 七つの頭
 - 3 十の角
 - 3 獣が淫婦を滅ぼす
 - 1 世界的な偶像礼拝の広がり
 - 2 淫婦に対する世界中の憎しみ
 - 3 神のご計画の成就

また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここ
に來なさい。大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましよう。地の王たちは、
この女と不品行を行ない、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」
それから、御使いは、御靈に感じた私を荒野に連れて行つた。すると私は、ひとりの女
が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本
の角を持っていた。この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎む
べきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手持っていた。その額には、
意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、
大バビロン。」という名であった。そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人
たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見たとき、非常に驚いた。

すると、御使いは私にこう言った。「なぜ驚くのですか。私は、あなたに、この女の秘
義と、この女を乗せた、七つの頭と十本の角を持つ獣の秘義とを話してあげましよう。
あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上つて來ま
す。そして彼は、ついには滅びます。地上に住む者たちで、世の初めからのちの書に名
を書きしるされていぬ者は、その獣が、昔いたが、今はおらず、やがて現われるのを
見て驚きます。ここに知恵の心があります。七つの頭とは、この女がすわっている七つの
山で、七人の王たちのことです。五人はすでに倒れたが、ひとりは今おり、ほかのひとり
は、まだ来ていません。しかし彼が來れば、しばらくの間とどまるはずです。また、昔い

だが今はない獣について言えば、彼は八番目でもありますが、先の七人のうちのひとりです。そして彼はついには滅びます。

¹²あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獣とともに、一時だけ王の権威を受けます。¹³この者どもは心一つにしており、自分たちの力と権威とをその獣に与えます。¹⁴この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」

¹⁵御使いはまた私に言った。「あなたが見た水、すなわち淫婦がすわっている所は、もろもろの民族、群集、国民、国語です。¹⁶あなたが見た十本の角と、あの獣とは、その淫婦を憎み、彼女を荒廃させ、裸にし、その肉を食い、彼女を火で焼き尽くすようになります。¹⁷それは、神が、みことばの成就するときまで、神のみところを行なう思いを彼らの心に起こさせ、彼らが心一つにして、その支配権を獣に与えるようにされたからです。¹⁸あなたが見たあの女は、地上の王たちを支配する大きな都のことです。」（黙示 17・1-18）

黙示録17章の主題は、「小羊のバビロンに対する勝利」です。また「終わりの時代の世界」、あるいは「墮落した教会に対する神のさばき」ともいうことができます。

バビロンとは何でしょう。この答えが、これから学ぶ黙示録17章1節から19章5節までに詳しく記されています。黙示録を振り返ると、バビロンについては今までに二度述べられています。

また、第二の、別の御使いが続いてやって来て、言った。「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」

(黙示 14・8)

また、あの大きな都は三つに裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。そして、大バビロンは、神の前に覚えられて、神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。
(黙示 16・19)

この前の16章で、私たちは千年王国の前の終わりの時代について学びました。時間の流れとしては、16章の直後に19章に書かれていることが起こります。しかしヨハネは、19章に書かれている小羊の婚姻の前に、教会の墮落について詳しく述べなければなりませんでした。なぜなら小羊の婚姻の前に、墮落した教会が取り除かれる必要があるからです。ヨハネはこのことを16章19節に短く書きましたが、17章1節から19章5節でさらに詳しく記したのです。

反キリストが支配する時代について、簡単に振り返ってみましょう。また、反キリストとにせ預言者について詳しく振り返りたい方は、13章の学びをご覧ください。

反キリストの時代は、神なき時代です。反キリストは世界の支配者となるばかりでなく、人間の精神をも支配しようとします。その目的のために、反キリストはにせ預言者を道具として使います。そしてにせ預言者が終わりの時代における世界支配の原点、すなわち世界中の宗教を統一する指導者となります。

13章では反キリストの権力と支配が示されていましたが、これから学ぶ17章から18章では、この権力と支配に対するさばきについて書かれています。真のさばき主である神は、そのさばきを世の終わりまで延ばしておられます。しかしそのさばきが来る時には、主を否む人はもはや救われることがなく、神の手に陥ることを恐怖をもって知るしかありません。

さて、17章を三つに分けて学んでいきましょう。最初の1節から6節には「淫婦バビロン」について、次の7節から14節は「反キリストの獣」について、そして15節から18節には「獣が淫婦を滅ぼす」ことが書かれています。

1 淫婦バビロン

バビロンという言葉は混乱を意味しています。混乱は、すでにカインの時代から始まっていますが、17章1節から6節に書かれているように、全世界が反キリストの支配の下におかれるという、この世で最大の混乱の時代がやってきます。

昔のバベルの町は、ニムロデによってつくられました。創世記10章に書かれているように、ニムロデは獵師から出て最初の権力者となりました。神は国民が地の全面に広がるようにと言われましたが、ニムロデは神に逆らい、多くの人間を自分の近くに集めようとして、バベルの町とバベルの塔を建てようとしたのです。

ニムロデはその町を建てた時に、神の門という意味の「バブ・エル」と名づけました。しかし神のさばきを受けた時に、混乱を意味する「バベル」という名前に変えられました。

バベルの町の建設には、石の代わりにれんがを、粘土の代わりに瀝青を用いました。れんがや瀝青には本物の模倣という意味があります。つまり「バビロン」という言葉は、今日に至るまで、「神が作られた本物の模倣」を意味しています。

ニムロデは、ノアの子ハムの孫にあたります。ノアは生ける神の証し人でした。しかしハムは、神の啓示に対して反抗しました。ハムとは「暗くされた」とか「盲目にされた」ということを意味します。ハムは神の光によって精神的に盲目な者とされたのです。神の光に反抗し、心を閉ざす者は、盲目で暗い者にさせられます。

ハムは神なき生活を始め、偶像を礼拝した最初の人でした。それ以降、人々は創造主よりも人間が作った物を重んじるようになったのです。ハムの息子のひとりがクシュです。クシュは黒人を意味する言葉ですが、このクシュがバベルを建てたニムロデの父です。

ニムロデの妻セミラミス一世が、偶像礼拝の祭司としてバビロンの魔術を始めた女です。そのためバビロンは偶像礼拝の中心地になりました。この魔術を行なう宗教が、バビロンから全世界へと広められました。

セミラミスは自分の息子タムズが生まれた時、息子の誕生は普通の子供とは違い超自然的な誕生をした、と主張しました。これをもとにタムズは約束された救い主と呼ばれて祝われ、タムズに対する礼拝が始まりました。エゼキエルは、バビロン捕囚の時代に、この偶像礼拝が行なわれることを預言しています。

セミラミスとタムズの母子を偶像として礼拝する行為が、人類の知りうる最初の偶像礼拝です。

悪魔は人々をこの偶像礼拝へと誘惑し、偶像礼拝は世界中へと広まりました。この二人の偶像は、フェキニアではアストレスとタムズ、エジプトではイシスとホルス、ギリシヤではアフロディーテとエロス、イタリヤではヴィーナスとキューピッドと呼ばれるものです。ローマ・カトリック教会の中では、千年の間、このような偶像礼拝が行なわれてきました。

このようなバビロンの偶像礼拝には次のようなものがあります。死後の救いの可能性、祭司による罪の赦し、聖なる水によって清められること、天の女王にささげものを行なうこと、若い女性を神々にささげること（つまり不品行を行うこと）などです。

「子どもたちはたきぎを集め、父たちは火をたき、女たちは麦粉をこねて「天の女王」のための供えのパン菓子を作り、わたしの怒りを引き起こすために、ほかの神々に注ぎのぶどう酒を注いでいる。」
(エレミヤ 7・18)

タムズは熊によって引き裂かれ、そのあとで復活したと言われました。タムズの象徴は十字でした。したがってごく稀に、私たちは古い偶像の寺院の中に十字架らしきものを見出すことがあります。この十字は、主イエス様よりはるか以前に偶像の礼拝に用いられていたものであることがわかっています。

アブラハムは神から選ばれた時に、偶像礼拝を離れました。しかしフェキニアの王女であったイゼベルによって、再びイスラエルの民に持ちこまれてしまいました。イスラエルは、偶像礼拝のためにアッシリアに捕らわれ、そのあとでバビロンへと捕らえ移されることになりました。

イスラエルは捕らえ移されることにより、偶像礼拝とは呪いとわざわいであることを身をもって知ったのです。

主イエス様の時代には、バビロンの魔術と宗教は、世界の至るところに広まっていた。バビロンの町はすでに消え去っていましたが、偶像礼拝は残り、世界中で続けられていました。そして、偶像礼拝の中心地はペルガモからローマに移っていきます。

ローマの皇帝ポンティフェクス・マキシマスは偶像礼拝の大祭司と呼ばれました。また次の皇帝ジュリアス・シーザーも同じように呼ばれました。それ以降のすべてのローマ皇帝は、自らを大祭司と呼んでいます。そして、コンスタンチヌス大帝は、異邦人の偶像礼拝の大祭司であると同時に、キリスト教会の大祭司ともなりました。その後、ローマ法王も大祭司と呼ばれました。今の法王もまた、そう呼ばれています。ですからローマ教会の法王は、歴史的にバビロンの魔術宗教の承継者でもあるのです。魔術宗教によるローマ教会の支配は、宗教改革の時代まで続きました。

ヨハネは幻の中でこのさまを見て、キリストの教会がこのようにまで墮落していく姿に驚きました。ローマのカトリック教会は偶像礼拝を行ない、淫婦の母となり、神に敵対する者となりました。主イエス様を証しする人々を迫害し、血を流したのは、ローマ・カトリック教会です。

バビロンは、常に神に敵対しています。私たちはバビロンの影響のひとつとして、人間が自らを強くしようと努力する態度を見ることができません。

バビロンの始まり、発展、終わりの三段階について、次のように言うことができます。始まり

は、バベルの塔にみられる神からの独立です。発展段階では、バビロンは常に神のまことの民を迫害し続けました。まことのキリスト者に対して、最も激しく迫害したのはローマ・カトリック教会です。そして終わりの時代には、バビロンは生ける神に対して呪いをかけます。これは今学んでいる黙示録17章から18章に示されています。

現在、バビロンはすでに荒れ果てて獣の住み家となっています。

そこには荒野の獣が伏し、その家々にはみみずくが満ち、そこにはだちようが住み、野やぎがそこにとびはねる。
(イザヤ 13・21)

しかしバビロンの邪悪な精神は今なお生き続けています。それは生ける神に対する憎しみ、そしてまことの信者に対する憎しみです。バビロンの邪悪な精神は常に存在し、政治的あるいは宗教的に権力を握ろうとする行為となって現われます。

バビロンによる政治的支配は、ネブカデネザル王の世界支配から始まりました。この時代から諸国民、異邦人の時代が始まり、イスラエル以外の国が世界史の中心に登場しました。そして近い将来には、ローマ帝国が「海から上る獣」として復活するでしょう。この帝国は猛獣の性格を持っており、さばきへ向かって成熟していきます。

一方、宗教的な視点から見ると、終わりの時代に復活するローマ帝国は、さばきに向かうバビロンであると記されています。黙示録17、18章には、バビロンは獣の上に乗る淫婦として描かれています。終わりの時代の宗教は、獣であるローマ帝国に乗る淫婦としてふるまい、全世界を導

き、悩まします。ヨーロッパの大部分はすでにローマ法王の支配を受けています。

バビロンには、次のような六つの特徴があります。

1 世界的な都市

バビロンは世界的な都市です。バビロンは、人間を「神なしで何でもできる」という幻想に取りつかせる場所です。人間的にみれば、このバビロンは大きくて立派な都市です。文化的にもこのバビロンは大きな業績をあげています。しかしこの都市は「神の名をけがす」という名を持つ獣に乗っています(3節)。獣は悪魔が作ったもので、バビロンと密接な関係があります。

また、第二の、別の御使いが続いてやって来て、言った。「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」

(黙示 14・8)

こうして、人々は激しい炎熱によって焼かれた。しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあげめることをしなかつた。

(黙示 16・9)

その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」という名であった。

(黙示 17・5)

彼は力強い声で叫んで言った。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつとなった。」

……彼らは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っついていて、こう言います。「わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。力強い都、バビロンよ。あなたのさばきは、一瞬のうちに来た。」

……また、ひとりの強い御使いが、大きい、ひき臼のような石を取り上げ、海に投げ入れて言った。「大きな都バビロンは、このように激しく打ち倒されて、もはやなくなつて消えうせてしまう。」

(黙示 18・2、10、21)

バビロンは、黙示録17章では「淫婦」、18章では「大きな都」と呼ばれています。バビロンについて、17章では宗教的な視点から、「淫婦」と呼び、間違つた宗教を伝える教会を指しています。18章では都市を指して「大きな都」(18章10節)とか「大バビロン」(18章2節)と呼んでいます。「バビロン」は一方において現実の町であり、他方においては間違つた宗教を象徴しています。同じように「新しいエルサレム」は現実の町であると同時に小羊の花嫁としてのまことの教会を象徴するものです。

ここに私たちは、主イエス様の真の体である教会と、墮落した教会との大きな違いを見ることができます。新しいエルサレムは天から下つてきますが、これに対してバビロンは地上にある現

実の都です。それは、大きく、外見的には豊かで、力があり、悪魔の座のある都です。

彼は力強い声で叫んで言った。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつとなった。」

……彼らは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、こう言います。「わざわざわいが来た。わざわざわいが来た。大きな都よ。力強い都、バビロンよ。あなたのさばきは、一瞬のうちに来た。」

(黙示 18・2、10)

2 富と宝の蓄積

バビロンは諸国民から略奪を行ない、富と宝を蓄えていきます。蓄財のために、淫婦バビロンは清さを犠牲にしました。カトリック教会は真理を犠牲にして富を蓄えました。具体的に言えば、カトリック教会は「良い行ないをすることにより救われる」と宣べ伝えて、多くの富を蓄えました。黙示録17章4節と18章13節には、紫と緋の衣、金と宝石と真珠、肉桂、香料、香、香油、乳香などさまざまな財宝があげられています。これらはすべてカトリック教会が持っている宝に当てはまります。

この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手持っていた。

(黙示 17・4)

また、肉桂、香料、香、香油、乳香、ぶどう酒、オリーブ油、麦粉、麦、牛、羊、それ

に馬、車、奴隸、また人のいのちです。

(黙示 18・13)

しかし聖書には、この富と宝を持つバビロンが崩れ去ることが、はっきりと示されています。

3 外見の美しさ

バビロンは「不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手にとって」(4節)います。

バビロンは主の御手にある金の杯。すべての国々はこれに酔い、国々はそのぶどう酒を飲んで、酔いしれた。
(エレミヤ 51・7)

金の杯は外見は大変美しく見えます。教育、文化、富などは外から見ると魅力的で、美しく見えます。淫婦はそれと同じように外側を飾っています。なぜなら、淫婦は外見によつてしか良い印象を与えることができないからです。カトリック教会も同様に、内側の虚しさを外側の美しさで飾っています。また、ほかの教会も教義や儀式で外側を飾り、多くの人々を惑わしています。

淫婦の着物も金の杯も、淫婦の豊かさを表わしています。金は神聖な物を象徴しています。終わりの時代の墮落した教会は、自らをキリストに仕える神聖な真の教会であると主張します。カトリック教会は何世紀もの間このように主張し続けています。

淫婦が荒野にいる姿は、外見は豊かに見えて、その実は内面の貧しい者の姿を象徴しています。荒野とは渇きの場所であり、だれもその渇きを癒すことはできません。

4 額に記される名前

ヨハネの時代の淫婦は、額に名前を記していました。5節には、淫婦の額には名前が記されているが、その意味が隠されていると書かれています。

まことの教会と偽りの教会との間には、どのような違いがあるのでしょうか。まことの教会は復活されたイエス様とひとつになります。偽りの教会は意識してイエス様を遠ざけます。淫婦は、大バビロンに属すること意識して隠れているのです。

バビロンは非常に大きな存在です。バビロンは神に反抗することによって大きくなりました。神に対する反抗こそが、淫婦の母と呼ばれるバビロンの力と影響の源でした。バビロンは、神に反する態勢を表わしています。昔のバビロンの町も神に反する態度をとっていました。

大水のほとりに住む財宝豊かな物よ。あなたの最期、あなたの断ち滅ばされる時が来た。

(エレミヤ 51・13)

また、ヨハネの時代のローマも、ルイ14世の時代のパリも、昔のバビロンと同じように神に反し、偶像礼拝と不品行と自己実現に満ちた都市でした。終わりの時代のローマも、きつと同じようになるでしょう。

私たちはこのバビロンの影響を、イスラエルの信仰者の中に、イスラム教の中に、カトリック教会の中に、墮落したプロテスタント教会の中に見いだします。すべてのいわゆる「宗教」と

哲学は、近い将来カトリック教会の指導の下にひとつにまとめられかねないのです。

私たちは自己を偶像とすること、淫行、拝金主義などの中に、バビロンによって世界観の混乱した宗教を見ることができません。宗教を排斥した共産主義の中においてさえ、バビロンの影響を強く見ることができます。

5 殉教者への迫害

淫婦バビロンは、「聖徒たちの血とイエスの証人たちの血」(6節)、すなわち殉教者の血を飲みます。

カトリック教会は、自分たちだけが勝利者で、正しい者であると思いがります。カトリック教会の間違いを指摘する人々は、カトリック教会から迫害を受けて殺されます。またまことの神を第一とする人々も、カトリック教会によって迫害を受けます。カトリック教会ほどに殉教者の血を流したものはありません。

7節に、淫婦は獣に乗って歩くと書かれています。つまり淫婦は、獣すなわち反キリストの世界を支配しているのです。カトリック教会は、終わりの時代にしばらくの間、反キリストをも支配します。終わりの時代には、さらに多くの殉教者の血が流されるでしょう。

6 ローマの別名

淫婦は「七つの頭」(9節)に乗っています。

バビロンという名前は、ローマの七つの丘の上にある、隠された町の名前を意味しています。ヨハネの時代には、「ローマ」と呼ぶことができなかつたために、バビロンという呼び名を用いました。

初代教会の信者たちは、聖書に預言されているバビロンはすべてローマのことを指していると考えていました。ローマはダニエル書における第四の獣にあたります。またペテロがバビロンという言葉を用いる時には、いつもローマを意味しています。なぜならペテロはバビロンへ行つたことがなかつたからです。

バビロンにいる、あなたがたとともに選ばれた婦人がよろしくと言っています。

(Iペテロ 5・13)

当時ローマでは、すべての宮で偶像礼拝が行なわれていました。また不品行とあらゆる罪が横行していました。そしてローマほどに、たくさん殉教者の血が流されたところはほかにはありませんでした。

ここまでの、バビロンについての学びを振り返り、もう一度簡単に整理しておきましょう。バビロンは、小羊の花嫁である教会に反対するものを指す言葉として用いられています。

また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりに来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上ですわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。」

(黙示 17・1)

また、最後の七つの災害の満ちているあの七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりが来た。彼は私に話して、こう言った。「ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。」

(黙示 21・9)

バビロンは悪魔の道具であり、まことの教会は主なる神の道具です。

バビロンは獣によって運ばれ、まことの教会は主によって高く運ばれます。

バビロンは額に不品行の名前を記し、まことの教会は額に主とキリストの名を記しています。バビロンは自らの力によって自分のためにだけ生き、まことの教会は主イエス様の恵みに頼って主イエス様のためにだけ生きたいと望みます。言いかえれば、バビロンは終わりの時代における宗教や哲学を表わしています。彼らは十字架の福音を伝えようとするのではなく、自分の力と考えを伝えることに力を注ぎます。

バビロンは主イエス様に頼らず、反キリストに頼ります。そして反キリストの国家とひとつになります。

バビロンの中にいる人は、キリストの名を高めようとせず、自分の名を高めようとします。

終わりの時代のバビロンは、キリストの霊に導かれるのではなく、悪霊によって導かれます。

この終わりの時代の宗教は、小羊イエス様が示してくださる道を行くのではなく、自分の力を武

器として進みます。ですから、このような教会は人の魂を救わず、魂を束縛し、主イエス様ではなく「自分の教会」を救い主だと宣べ伝えるのです。

淫婦は終わりの時代の宗教であり、その頂点に立つのがにせ預言者です。

まことの教会は引き上げられ、残されたすべての教会はカトリック教会の下に統一されます。神の靈に導かれていない教会も、宗教も、淫婦バビロンに吸収されるのです。

今、私たちにとって最も重要な問題は、自分がまことの教会、主イエス様のみからである教会に属する者であるかどうかをよく考えることです。

私たちは、自分のすべての罪が赦されているという確信を持っているでしょうか。

私たちは、本当に主イエス様のために、また主イエス様の愛のために生きているでしょうか。私たちは、心から主イエス様の再臨を待ち望んでいるでしょうか。

2 反キリストの獣

黙示録17章7節から14節の主題は「反キリストの獣」です。

私たちは6節までで、淫婦バビロンについて考えてきました。淫婦は不忠実の象徴です。黙示録においてはとくに不品行や偽りの象徴として用いられています。

主イエス様を中心としない信仰は、間違った信仰です。淫婦とは、イエス・キリストの花嫁に反抗する者です。忠実な妻ほど良いものではなく、不忠実な妻ほど悪いものはないように、キリストの花嫁に属することほど良いことはなく、間違った宗教に惑わされることほど悪いことはあり

ません。

この淫婦は1節にあるように、大水の上に座っています。黙示録17章15節によると、その水はいろいろな民族、国民、国語を表わしています。ですから水の上に座るこの淫婦は、全世界に影響を及ぼし、全世界を惑わすのです。淫婦はすべての宗教を一つにまとめることに成功します。

淫婦バビロンの富や魔術によって、多くの無知な人々が惑わされます。私たちは黙示録17章1節から6節と、ゼカリヤ書5章5節から11節において、同じようなことが示されているのを見ることができません。

また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。地の王たちは、この女と不品行を行ない、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行つた。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を持っていた。その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」という名であった。そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見たとき、非常に驚いた。

(黙示 17・1〜6)

私と話していた御使いが出て来て、私に言った。「目を上げて、この出て行く物が何かを見よ。」私が、「それは何ですか。」と尋ねると、彼は言った。「これは、出て行くエバ枡だ。」そして言った。「これは、全地にある彼らの罪だ。」見よ。鉛のふたが持ち上げられ、エバ枡の中にひとりの女がすわっていた。彼は、「これは罪悪だ。」と言って、その女をエバ枡の中に閉じ込め、その口の上に鉛の重しをかぶせた。それから、私が目を上げて見ると、なんと、ふたりの女が出て来た。その翼は風をはらんでいた。彼女たちには、こうのとりの翼のような翼があり、彼女たちは、あのエバ枡を地と天との間に持ち上げた。そこで私は、私と話していた御使いに尋ねた。「あの者たちは、エバ枡をどこへ持って行くのですか。」彼は私に言った。「シヌアルの地で、あの女のために神殿を建てる。それが整うと、そのこの台の上に安置するためだ。」

(ゼカリヤ 5・5―11)

どちらの箇所にも御使いと女のこと記されています。黙示録の淫婦も、ゼカリヤ書のエバ枡の女も、ともに不道德な女性を意味しています。

黙示録17章の3節と7節で、淫婦と獣は同じものとなっています。これは教会と国家が結びつくという関係を示しています。これはどちらにとっても有益なことです。なぜなら教会は国家と結びつくことによって確かな保護を得ることができ、国家は教会と結びつくことによって人の心を支配することができるからです。

よく知られていることですが、世界中の政治は、宗教や思想を利用して行なわれています。国が利用する宗教は、国家に損害を与えず、国家の犯した罪を指摘することもなく、ただ安穩な秩序の中に国家組織を守ろうとするだけです。しかしイエス様のみからである真の教会は、罪を示し、悔い改めを求め、神の権威に従おうとするものです。このような真の教会は、世界の中にあって異質な人々の集団と見なされます。

イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ピテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、すなわち、父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上にもますます豊かにされますように。

(Iペテロ 1・1、2)

淫婦バビロンの思想は、ニムロデの時代に始まり、それからますます大きくなってきています。神のみこころと神のいましめに反抗することが、この淫婦の目的です。生ける神に対する反抗と自分の名前を高めようとする努力が、今日のすべての指導者の特徴です。

そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」(創世記 11・4)

黙示録17章の1節から6節までは淫婦について記されていましたが、これから学ぶ7節から15節までには反キリストの獣について記されています。反キリストの獣とは、終わりの時代の先頭

に立つ反キリスト的國家のことです。

この部分を、獸が持つ三つの特徴に分けて考えてみたいと思います。

1 世界帝国

獸が「世界中を支配する帝国」を意味することは、ダニエル書7章1節から7節にすでに預言されています。それはつまり、ローマ帝国の復興です。聖書は、「それはかつてあり、今はなく、将来起こる」国であると言っています。

バビロンの王ベルシャツアルの元年に、ダニエルは寢床で、一つの夢、頭に浮かんだ幻を見て、その夢を書きしるし、そのあらましを語った。ダニエルは言った。「私が夜、幻を見てみると、突然、天の四方の風が大海をかき立て、四頭の大きな獸が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。第一のものは獅子のようで、鷲の翼をつけていた。見ていると、その翼は抜き取られ、地から起こされ、人間のようになり二本の足で立たされて、人間の心が与えられた。また突然、熊に似たほかの第二の獸が現われた。その獸は横ざまに寝ていて、その口のきばの間には三本の肋骨があった。するとそれに、『起き上がって、多くの肉を食らえ。』との声がかかった。この後、見ていると、また突然、ひょうのようなほかの獸が現われた。その背には四つの鳥の翼があり、その獸には四つの頭があった。そしてそれに主権が与えられた。その後また、私が夜の幻を見ていると、突然、第四の獸が現われた。それは恐ろしく、ものすごく、非常に強くて、大きな鉄のきばを持って

おり、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは前に現われたすべての獣と異なり、十本の角を持っていた。」
 (ダニエル 7・1-7)

ローマ帝国は、ヨハネの時代には存在していましたが、今日はありません。しかし、将来再び起こります。この国について「底知れぬ所から上って来ます。」(8節)とあるのは、悪魔によって起こされる国であることを意味しています。しかしこの国は再び滅亡させられます。

主イエス様の道はそれとは逆です。主イエス様は上って来るのではなく、栄光の天から下って来られます。主イエス様は失われたこの世を救うために下って来られ、再び天へ帰られました。主イエス様とイエス様に従う者にとっては、「自分が低められて、人々が高められる」ことが重要であり、反キリストとそれに従う者たちは「自分が高められて、人々が低められる」ことが重要です。

多くの研究者は、8節の獣が反キリストを意味すると解釈しています。反キリストは、黙示録6章で第一の封印が解かれた時に、白い馬に乗って現われ、そのあとで殺されていったんは消滅しました。ここで再び反キリストが現われるということは、反キリストが復活して世界の支配権を手に入れることを示しています。

主イエス様はかつて存在し、今も存在しておられ、永遠の主であります。しかし反キリストは、墮落して滅び去ります。そして反キリストに従う者にも同じ運命が定められています。主イエス様の特徴は忠実であり、反キリストの特徴は偽りです。

2 七つの頭

獸には七つの頭があります。

ここに知恵の心があります。七つの頭とは、この女がすわっている七つの山で、七人の王たちのことです。……あなたが見たあの女は、地上の王たちを支配する大きな都のことです。

(黙示 17・9、18)

この七つの頭とは、何を意味するのでしょうか。「女のすわっている七つの山」とは、終わりの時代に宗教的にも政治的にも力を持つ、七つの丘のある都市、つまりローマを指しています。そしてそこに都が建てられます。つまりローマが反キリストとにせ預言者の中心地となることを示しています。

七つの頭は、七人の王を意味しています。七人の王とは、ローマの七つのそれぞれ異なった政治形態を指すと解釈されています。第一は王制、第二は共和制、第三はいわゆる恐怖政治、第四は三頭政治、第五は独裁制、第六はヨハネの時代の皇帝制です。そして第七の政治形態は、十の国々がひとりの支配者によって支配される国です。

五人はすでに倒れたが、ひとりは今おり、ほかのひとは、まだ来ていません。しかし彼が来れば、しばらくの間とどまるはずですが、また、昔いたが今はいない獸について言えば、彼は八番目でもあります。先の七人のうちのひとりです。そして彼はついに滅び

ます。

(黙示 17・10、11)

しかしこれから来る七番めの王による支配は、三年半しか続きません。

この獸は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威を与えられた。

(黙示 13・5)

またもう一つの解釈として、「王」は反キリスト的な支配者を意味しており、七という数字が完全な数であることから、反キリスト的な支配者の全体を指す、とも考えられています。反キリスト的な支配者として、ニムロデ、パロ、ネブカデネサル、アンティオχος・エピファニアス、エルサレムを滅ぼしたティトスらがあげられます。これら五人の者たちはヨハネの時代にはいませんでした。ヨハネの時代にいた第六番めの支配者は、ドミティアヌスです。

そして、第七番めの支配者は反キリストである獸だと思われれます。第七番めの支配者は、同時に八番めの者でもあります。

私は見た。見よ。白い馬であつた。それに乗っている者は弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て行つた。

(黙示 6・2)

また私は見た。海から一匹の獸が上つて来た。これには十本の角と七つの頭とがあつた。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があつた。

(黙示 13・1)

また、昔いたが今はいない獣について言えば、彼は八番目でもありますが、先の七人のうちのひとりです。そして彼はついには滅びます。

(黙示 17・11)

七人の王とは、すべての反キリスト的な支配者をまとめた表現です。第八番目の支配者とは、彼がこれまでのすべての者に対し、力においても知恵においても勝っていることを示しています。八という数字は、新しいものという意味があるからです。

生けるまことの神がイエス様をおして新しい創造を始めたのと同じように、竜であるサタンも新しい創造を始めようとしてしました。竜は殺された反キリストを再び復活させます。それはサタンが、イエス様の復活を真似て行なうことです。

反キリストの復活により新しい創造が起きます。しかしそれは神なき創造です。11節には、その反キリストは滅びに定められていると記されています。

すると、獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きてままで投げ込まれた。

(黙示 19・20)

テサロニケ人への手紙第二の2章3節によると、反キリストは滅びの子と証言されています。

滅びの子は、多くの人々を滅びへと誘惑し、最後には自分自身も滅びへと入っていきます。

……なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。

(Ⅱテサロニケ 2・3)

3 十の角

7節には、獣が十本の角を持っていると記されています。十本の角は、世界の支配力が一つにされたことを示しています。つまり十人の支配者は、自分の権力と考えによって支配するのでなく、ひとりの独裁者の言いなりの支配を行います。彼らは反キリストの道具にすぎません。

終わりの時代のローマ帝国は、反キリストによって支配される十の国家の統一体です。彼らの考えはただ一つです。すなわち、反キリストの考えがすべての国々の考えを支配するのです。十の国は反キリストに従順に従っていきます。

ダニエルはこの十の国々について、像の十本の指に例えました。

あなたがご覧になった足と足の指は、その一部が陶器師の粘土、一部が鉄でしたが、それは分裂した国のことです。その国には鉄の強さがあるでしょうが、あなたがご覧になったように、その鉄はどろどろの粘土と混じり合っているのです。その足の指が一部は鉄、一部は粘土であったように、その国は一部は強く、一部はもろいでしょう。

(ダニエル 2・41、42)

反キリストは十の国を従え、小羊である主イエス様に戦いを挑みます。

第六の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけた。すると、水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かれてしまった。また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた霊どもが三つ出て来るのを見た。彼らはしるしを行なう悪霊どもの霊である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。——見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである。——こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。

(黙示 16・12〜16)

また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。「さあ、神の大宴会に集まり、王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬とそれに乗る者の肉、すべての自由人と奴隸、小さい者と大きい者の肉を食べよ。」

また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。すると、獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が、

彼らの肉を飽きるほどに食べた。

(黙示 19・17-21)

反キリストは、イエス・キリストを滅ぼして、やりたい放題に世界を支配しようとしています。しかしイエス様は、これらの反キリストに対して、勝利をおさめられます。

主イエス様は小羊として勝利なさいます。つまり、武器や力を行使することなくすべてにうち勝たれるのです。なぜなら、主イエス様は、主の主であると同時に小羊でもあられるからです。小羊はいかなる力にも勝る強いお方です。

主イエス様は、十字架のみわざにより、悪魔に対して完全な勝利を得られました。現在すでに、主イエス様は勝利を勝ちとられています。この勝利は将来明らかにされ、そして祝われることでしょう。

主イエス様はつねにすべてのもの主であります。

すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。

(マタイ 4・11)

イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した。」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。

(ヨハネ 19・30)

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」

(マタイ 28・18)

黙示録17章でこの勝利が完全な形で現わされます。そして救われ、選ばれている忠実な者たちがこの勝利にあずかります。ここに私たちは、主イエス様の「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」(黙示2・10)というみことばを思い出すことができます。

救われ、選ばれている忠実な者たちは、自ら剣をとって戦う必要がありません。ただ主イエスのみもとにいれば、イエス様の勝利にあずかることができます。

また、私は見た。見よ。白い雲が起こり、その雲に人の子のような方が乗っておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持つておられた。すると、もうひとりの御使いが聖所から出て来て、雲に乗っておられる方に向かって大声で叫んだ。「かまを入れて刈り取ってください。地の穀物は実ったので、取り入れる時が来りましたから。」そこで、雲に乗っておられる方が、地にかまを入れると地は刈り取られた。

また、もうひとりの御使いが、天の聖所から出て来たが、この御使いも、鋭いかまを持つていた。すると、火を支配する権威を持ったもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持つ御使いに大声で叫んで言った。「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから。」そこで御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどにな

り、千六百スタディオンの広がった。

(黙示 14・14、20)

こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。

(黙示 16・16)

また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。「さあ、神の大宴会に集まり、王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬とそれに乗る者の肉、すべての自由人と奴隷、小さい者と大きい者の肉を食べよ。」

「また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。すると、獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々を惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によつて殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。」

(黙示 19・17、21)

3 獣が淫婦を滅ぼす

次に、黙示録17章15節から18節の部分から「獣が淫婦を滅ぼす」ことを学びましょう。

まず、この前の部分から通して見ると、8節から11節では獣が滅ぼされ、12節から14節では十

人の王が滅ぼされ、15節から18節では淫婦が滅ぼされることが書かれています。しかし、時間の流れとしてはこの順序は反対で、淫婦が滅ぼされたあとに十人の王が滅び、最後に獣が滅ぼされるのです。この部分も三つに分けて考えてみましょう。

1 世界的な偶像礼拝の広がり

終わりの時代の間違つた宗教については、黙示録13章ですでに示されています。にせ預言者は、人々に獣の像の礼拝を勧めました。すなわち人間を拝ませたのです。この偶像礼拝は人々に強制され、従わない者たちは殺されました。

私たちはいま、黙示録17章で、この偶像礼拝が世界に広がるさまを見ます。すべての人々はこの偶像を礼拝させられ、バビロンへと向かって行きます。反キリストの時代が始まる時、この宗教はすべての人々を支配します。それは淫婦が獣の上に乗って獣を支配するということです。17章12節に書かれているのは、淫婦が十人の王たちを用いて世界を支配することです。

私たちはすでに、終わりの時代のローマが、さばかれるべき存在にまでに成熟したバビロンであることを学びました。ローマ・カトリック教会では、今もバビロンの淫行を引き継いでいます。そこでは神から出る物はすべて否定され、真理が偽りに変えられ、造られた物が造り主よりも重んじられるようになります。

昔のバビロンは、偶像礼拝の母です。

その水の上には、ひでりが下り、それはかれる。ここは刻んだ像の国で、彼らは偶像の

神に狂っているからだ。

(エレミヤ 50・38)

いわゆる聖母マリヤとイエスを中心に置く礼拝は、霊とまことによる礼拝とはまったく違うものです。この母子像への礼拝は、異邦人の寺院における母と子、すなわちセミラミス・アストレスとその子タムズへの礼拝と同じことにはなりません。

主イエス様の母マリヤは、ほかの信者と同じく心のへりくだった信者にすぎませんでした。使徒の働き1章14節には、マリヤはほかの信者と共に祈る婦人であったと書かれています。聖書には、マリヤが復活し、昇天し、天の女王になったとは、どこにも記されていません。しかしローマ・カトリック教会では、マリヤがこのようになったと教えています。これはバビロンの偶像礼拝によって起こった過ちです。

目を天に上げよ。また下の地を見よ。天は煙のように散りうせ、地も衣のように古びて、その上に住む者は、ぶよのように死ぬ。しかし、わたしの救いはとこしえに続き、わたしの義はくじけないからだ。義を知る者、心にわたしのおしえを持つ民よ。わたしに聞け。人のそしりを恐れるな。彼らのものしりにくじけるな。しみが彼らを衣のように食い尽くし、虫が彼らを羊毛のように食い尽くす。しかし、わたしの義はとこしえに続き、わたしの救いは代々にわたるからだ。さめよ。さめよ。力をまといえ。主の御腕よ。さめよ。昔の日、いにしえの代のように。ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。

(イザヤ 51・6-9)

神は今もなお、偶像を礼拝する者をいましめられます。

偶像礼拝はローマ・カトリック教会だけではなく、プロテスタント教会でも行なわれています。たとえば、教会の階級制や儀式がそうです。また幼児洗礼はカトリック教会から来たものです。幼児洗礼はバビロンの偶像礼拝、すなわちセミラミス・アストレスとタムズへの礼拝と関係が深い行為です。

私たちは、カトリック教会について、三つの特徴をあげることができます。

まず、カトリック教会の根本は、神のみことばだけに基づいてはけません。カトリック教会は異邦人の教義と儀式を受け入れて、今まで守ってきています。

次に、カトリック教会の統一性は、偶像礼拝と結びついた間違った統一性に基いています。真の統一は、聖霊が人の心を支配するときを実現するものです。

また、カトリック教会の中心はローマにあり、ローマ法王がその中心となっています。真の教会の中心におられるのは人間的なものではなく、生けるまことの神ただおひとりです。

2 淫婦に対する世界中の憎しみ

墮落した教会によって、反キリストが世界支配に成功しますが、まもなくこの墮落した教会にさばきがくだされます。このとき主イエス様の警告が現実のものとなります。

あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるので

しよう。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。

(マタイ 5・13)

十人の王を支配する墮落した教会は、塩の力を失った塩のようであり、十人の王は16節にあるとおり、この墮落した教会の支配に幻滅し、戦いを挑み、ついには焼きつくしてしまいます。

この後、私は、もうひとりの御使いが、大きな権威を帯びて、天から下って来るのを見た。地はその栄光のために明るくなった。彼は力強い声で叫んで言った。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつとなった。」

(黙示 18・1、2)

バビロンはここでは「悪霊の住まい」と表わされています。これがこの教会に対しての神のご判断です。誰が悪霊の住まいを居心地よい場所だと感じるでしょう。しかし多くの人々は、何世紀もの間この汚れた空気の中で生活を続けてきました。神はその民に対して、「そこから離れ去りなさい。」と求めています。

それから、私は、天からのもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。なぜなら、彼女の罪は積み重なって天にまで届き、神は彼女の不正を覚えておられるからです。」

(黙示 18・4、5)

淫婦の罪は、淫婦自身が持つ罪ばかりでなく、人々を罪の中へと誘い込むという罪も併せ持っています。

私たちは黙示録13章で、獣が何でもできることを学びましたが、ただひとつ不可能なことがあります。それは人を愛することと、人の心に愛を呼び起こすことです。淫婦も、情欲を呼び起こすだけで愛を呼び起こすことはできません。淫婦は富や力によって人を集めることができますが、愛することはできません。このことが終わりの時代に明らかにされます。

人々は、自由、正義、幸福などという言葉の裏で、大きな犠牲が強要されたことに気づきません。主イエス様をとおしてでなければ、すべての被造物の救いは成し遂げられないからです。

反キリストは墮落した教会と結びついたまま投げ捨てられます。それはちょうど淫婦が使い捨てられるように扱われるのです。名前だけのキリスト教は、反キリスト教徒と共に投げ捨てられるのです。

淫婦はすべての富を奪われ、裸にされて、荒れ果ててしまいます。淫婦はその傲慢を取り去られ、恥を見ます。16節に、十本の角と獣は彼女の肉を食べる、と書かれているのは、淫婦が徹底的に破壊されることを意味しています。このみことばは、イゼベルの最後を連想させます。

彼が、「その女を突き落とせ。」と言うと、彼らは彼女を突き落とした。それで彼女の血は壁や馬にはねかえった。エフーは彼女を踏みつけた。彼は内にはいつて飲み食いし、それから言った。「あののろわれた女を見に行つて、彼女を葬つてやれ。あれは王の娘だから

ら。」彼らが彼女を葬りに行つてみると、彼女の頭蓋骨と両足と両方の手首しか残って
なかつたので、帰つて来て、エフーにこのことを知らせた。すると、エフーは言った。「こ
れは、主がそのしもベティシユベ人エリヤによつて語られたことばのとおりだ。『イズレ
エルの地所で犬どもがイゼベルの肉を食らい、イゼベルの死体は、イズレエルの地所で畑
の上にまかれた肥やしのようになり、だれも、これがイゼベルだと言えなくなる。』」

(Ⅱ列王 9・33-37)

イゼベルは淫婦バビロンの雛形です。イゼベルも偶像礼拝を行ない、預言者たちの血を流しま
した。そしてイゼベルの肉も食べられました。

しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがまま
にさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて誤り
に導き、不品行を行なわせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。わたしは悔い改め
る機会を与えたが、この女は不品行を悔い改めようとしな。見よ。わたしは、この女を
病の床に投げ込もう。また、この女と姦淫を行なう者たちも、この女の行ないを離れて悔
い改めなければ、大きな患難の中に投げ込もう。また、わたしは、この女の子どもたちを
も死病によつて殺す。こうして全教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知
るようになる。また、わたしは、あなたがたの行ないに應じてひとりひとりに報いよう。

(黙示 2・20-23)

さらに「彼女を火で焼き尽くす」(16節)と書かれています。レビ記21章9節には、すべて姦淫の者は火によつて焼かれる、と示されています。

祭司の娘が淫行で身を汚すなら、その父を汚すことになる。彼女は火で焼かれなければならない。(レビ 21・9)

人がもし、女をその母といつしよにめとるなら、それは破廉恥なことである。彼も彼女らも共に火で焼かれなければならない。あなたがたの間で破廉恥な行為があつてはならないためである。(レビ 20・14)

やもめ、離婚された女、あるいは淫行で汚れている女、これらをめとつてはならない。彼はただ、自分の民から処女をめとらなければならない。(レビ 21・14)

3 神のご計画の成就

このように、淫婦は獣に憎まれ、ついに滅ぼされます。その時代の人々は、墮落した教会を破壊したのは自分たちであると考えますが、本当は主なる神のご計画の成就なのです。彼らの知らない間に、神のご計画が実現します。神は悪魔の力でさえもご自分の計画のために用いられます。

主なる神は、十人の王たちに淫婦をさばく力を与えられます。獸が、高ぶった豊かな淫婦を滅ぼし、倒します。黙示録14章8節で、神の御使いは、このことがすでに起こったことのように予言しています。

また、第二の、別の御使いが続いてやって来て、言った。「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」

(黙示 14・8)

もちろん神は、ご自分の力でこの計画を実現されることもできるでしょう。しかし神は、この計画のために悪魔を使われるのです。主イエス様による救いのみわざが成就するために、そうとは知らずにゴルゴタでピラトが用いられたのと同じです。またヨセフの兄弟たちも、それとは知らずに神のご計画の成就のために用いられました。全能の神は、世界の支配権を手中に持つておられます。悪魔ですらも、神のご計画の実現のために使われるのです。

終わりの時代に、人は神から自由になろうとし、自分の道を進もうとします。神は人にその道を行かせます。しかし、そのことをとおして、神はご自分の計画を実現されるのです。

わたしはあなたを引き回し、あなたのがごに鉤をかけ、あなたと、あなたの全軍勢を出陣させる。それはみな武装した馬や騎兵、大盾と盾を持ち、みな剣を取る大集団だ。

(エゼキエル 38・4)

淫婦、すなわち墮落した教会は、世界の支配者の誇りです。しかし世界の国々の政府は、その淫婦を滅ぼします。世界の支配者たちは、神の怒りとさばきの道具として用いられます。私たちはここに、神の全能の力を見ることができません。主なる神は、敵に対してさばきを行なうだけでなく、その敵が自滅するように仕向けられるのです。神は、神の敵を、それに対立する者によって滅ぼし、ご自分の計画を実現なさいます。神の敵がまったく気づかないままに、神の計画と約束とさばきとが成就されます。神は、何と偉大なお方でしょう。

この章で、私たちは真の信仰と間違った宗教との対立を学びました。小羊に対する礼拝か、あるいは反キリストに対する礼拝か、言いかえればまことの神への礼拝か、偶像への礼拝かという対立です。いずれかしか道はありません。もっとも悪いのは妥協という道です。

いま私たちにとって大切なことは、キリストの霊と反キリストの悪意とをはっきり区別することです。それは上から来るエルサレムと、下から来るバビロンとの区別でもあります。

主イエス様の側に妥協せず立ち、主イエス様の勝利にあずかる者は幸いです。

30 最後の審判とバビロンの破滅

黙示録18章1節から24節まで

- 1 さばきの判決
- 1 大きな権威を帯びた御使いによるバビロンの滅びの預言
- 2 バビロンにいる神の民に対する警告
- 3 神のさばきの手段についての要求
- 2 この世の悲しみと天国の喜び
- 1 力ある者と富む者と創造力を持つ者の嘆き
- 2 聖徒たちと使徒たちと預言者たちの喜び
- 3 さばきのしるし
- 1 文化の領域
- 2 さばきの理由
- 3 良心の問題

この後、私は、もうひとりの御使いが、大きな権威を帯びて、天から下つて来るのを見た。地はその栄光のために明るくなつた。彼は力強い声で叫んで言つた。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪靈の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巢くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巢くつとなつた。それは、すべての国々の民が、彼女の不品行に対する激しい御怒りのぶどう酒を飲み、地上の王たちは、彼女と不品行を行ない、地上の商人たちは、彼女の極度の好色によつて富を得たからである。」それから、私は、天からのもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。なぜなら、彼女の罪は積み重なつて天にまで届き、神は彼女の不正を覚えておられるからです。あなたがたは、彼女が支払つたものをそのまま彼女に返し、彼女の行ないに應じて二倍にして戻しなさい。彼女が混ぜ合わせた杯の中には、彼女のために二倍の量を混ぜ合わせなさい。彼女が自分を誇り、好色にふけつたと同じだけの苦しみと悲しみを、彼女に与えなさい。彼女は心の中で『私は女王の座に着いている者であり、やめめではないから、悲しみを知らない。』と云うからです。それゆえ一日のうちさまざまの災害、すなわち死病、悲しみ、飢えが彼女を襲い、彼女は火で焼き尽くされます。彼女をさばく神である主は力の強い方だからです。彼女と不品行を行ない、好色にふけつた地上の王たちは、彼女が火で焼かれる煙を見ると、彼女のことので泣き、悲しみます。彼らは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立って、こう言います。『わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。力強い都、バビロンよ。』

あなたのさばきは、一瞬のうちに来た。』¹¹また、地上の商人たちは彼女のことで泣き悲しみます。もはや彼らの商品を買う者がだれもいないからです。商品¹²とは、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、香木、さまざまの象牙細工、高価な木や銅や鉄や大理石で造ったあらゆる種類の器具、¹³また、肉桂、香料、香、香油、乳香、ぶどう酒、オリブ油、麦粉、麦、牛、羊、それに馬、車、奴隸、また人のいのちです。また、¹⁴あなたの心の望みである熟したくだものは、あなたから遠ざかってしまい、あらゆるはでな物、はなやかな物は消えうせて、もはや、決してそれらの物を見いだすことができません。¹⁵これらの物を商つて彼女から富を得ていた商人たちは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、泣き悲しんで、¹⁶言います。『わざわいが来た。わざわいが来た。麻布、紫布、緋布を着て、金、寶石、真珠を飾りにしていた大きな都よ。あれほどの富が、一瞬のうちに荒れすたれてしまった。』¹⁷また、すべての船長、すべての船客、水夫、海で働く者たちも、遠く離れて立っていて、¹⁸彼女が焼かれる煙を見て、叫んで言いました。『このすばらしい都のような所がほかにあろうか。』¹⁹それから、彼らは、頭にちりをかぶって、泣き悲しみ、叫んで言いました。『わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。海に舟を持つ者はみな、この都のおごりによって富を得ていたのに、それが一瞬のうちに荒れすたれるとは。』²⁰おお、天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。神は、あなたがたのために、この都にさばきを宣告されたからです。』

²¹また、ひとりの強い御使いが、大きい、ひき臼のような石を取り上げ、海に投げ入れて

言った。「大きな都バビロンは、このように激しく打ち倒されて、もはやなくなって消えうせてしまう。²²立琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッパを鳴らす者の声は、もうおまえのうちに聞かれなくなる。あらゆる技術を持った職人たちも、もうおまえのうちに見られなくなる。ひき臼の音も、もうおまえのうちに聞かれなくなる。²³ともしびの光は、もうおまえのうちに輝かなくなる。花婿、花嫁の声も、もうおまえのうちに聞かれなくなる。なぜなら、おまえの商人たちは地上の力ある者どもで、すべての国々の民がおまえの魔術にだまされていたからだ。²⁴また、預言者や聖徒たちの血、および地上で殺されたすべての人々の血が、この都の中に見いだされたからだ。」

(黙示 18・1〜24)

1 さばきの判決

1 大きな権威を帯びた御使いによるバビロンの滅びの預言

黙示録18章の主題は、「最後の審判とバビロンの破滅」です。この章は、「大きな権威を帯びた御使いによるバビロンの滅びの預言」、「この世の悲しみと天国の喜び」、「さばきのしるし」の3つの部分に分けることができます。

前回学んだ黙示録17章の「バビロン」は、黙示録19章の「主イエスの花嫁」に対応しています。そして黙示録18章の「バビロン」は、黙示録21章の「新しいエルサレム」に対応しています。このような二つの象徴の対応は、旧約聖書でもたびたび出てきます。たとえば、黙示録18章に対応する箇所は、旧約聖書の中に四十回以上出てきます。特にイザヤ書47章とエレミヤ書50章、51章

は関連が深い箇所です。

黙示録18章では、ひとりの御使いが大きな權威を帯びて天から下って来ます。天には主の支配の御座があります。16章で見たように、バビロンに対しても、全能の神が支配をなさいます。地上で起こるすべてのことは、神によって、定められています。

一見、強力に見える悪魔のこの世での支配力も、神によって定められています。悪は最後の日に向かって成熟しなければならないのであり、そしてさばきの時に至るのです。悪魔と反キリストとにせ預言者とは、3年半の間、驚くべき大きな国を建てます。そして反キリストが全世界で神として礼拝されます。しかし神である主は、はっきりとした目的を持っておられます。終わりの時代において、主はその力を、さばきを通して明らかにされます。このさばきについては黙示録17章と18章で記されています。

黙示録17章では、バビロンは淫婦としてローマに中心を持つ世界宗教として描かれています。黙示録18章では、バビロンは世界の政治と商業と富と汚れの中心地として描かれています。

このバビロンは悪霊の住みかであり、バビロンの精神は、悪魔の精神です。今日のローマ・カトリック教会も悪霊に支配されています。カトリック教会の偶像礼拝は、靈的な姦淫です。国家の力と結びつくことも靈的な姦淫です。ローマ・カトリック教会はただひとつの目的を追求しています。国家の力を利用して世界の支配を実現することです。

教会も人間もともに、聖霊に満たされるか、悪霊に満たされるかのいずれかであり、その中間

はありません。私たちは、そのいずれでしょうか。神の霊だけが私たちを導かれるのでしょうか。主イエス様だけがすべての栄光をお受けになることが私たちの望みとなっているでしょうか。終わりの時代においては、反キリストの国と、いわゆる宗教は、ともに悪霊によって導かれることが明らかにされます。「バビロン」は神に対する敵対の中心を指しています。それはまた、闇と真の信者に敵対する力の中心でもあります。

今日、神に敵対する「バビロン」は盛え、その力を誇っています。しかし終わりの時には、「バビロン」は荒れ果てた所となるのです。これがまことの神から離れた文化と宗教とに対する報い입니다。かつてのバビロンは、宗教と経済の中心でした。エレミヤ51章14節には、「必ず、わたしはほつたような大群の人をあなたに満たす。彼らはあなたに向かって叫び声をあげる。」と記されています。バビロンはかつては喜びの声に満たされていました。しかしそのバビロンは、恐ろしいほど変わってしまったのです。

万国を打った鉄槌は、どうして折られ、砕かれたのか。バビロンよ。どうして国々の恐怖となったのか。

(エレミヤ 50・23)

剣がその馬と車と、そこに住む混血の民にも下り、彼らは女のようになる。剣がその財宝にも下り、それらはかすめ取られる。

(エレミヤ 50・37)

見よ。一つの民が北から来る。大きな国と多くの王が地の果て果てから奮い立つ。

来るべき「バビロン」であるローマは、偶像礼拝へと導かれ、ますます墮落したものになりま
す。これに対するさばきは、文化と宗教の墮落です。ローマ・カトリック教会は、神のみことば
による権威を放棄し、神の戒めに対しては無関心になっています。その結果、真の力を失い、偽
りの力を求めるようになりました。中世の終わりにおいて、カトリック教会は真の信者たちを迫
害し、多くの人々を殺しました。霊的な姦淫と富、権力を求めることがカトリック教会を大きく
したのです。

2 バビロンにいる神の民に対する警告

「バビロン」の罪は4節から5節にあるように、積み重なってさばきに向かつて成熟します。
しかし「バビロン」はそのことに気がつきません。罪はいつも人をめくらにします。ここに記さ
れている天から響く声とは主イエス様の声です。その呼びかけは、「わが民よ。」から始まってい
ます。信者は神の民であり、イエス様の民です。このことを通して私たちは、「バビロン」にも
真の神の民がいることを知ることができます。どのような教会、どのような組織の中にも真のキ
リスト者が存在しています。そして主イエス様は、ご自分に属する者たち一人一人をよく知って
おられるのです。

それにもかかわらず、神の不動の礎は堅く置かれていて、それに次のような銘が刻まれ

(エレミヤ 50・41)

ています。「主はご自分に属する者を知っておられる。」また、「主の御名を呼ぶ者は、だれでも不義を離れよ。」

(Ⅱテモテ 2・19)

よく、「人間はどのような教会に属していても、救われてさえいれれば構わない」と言う人がいます。しかしこれは間違いです。聖書には「主の御名を呼ぶ者は、だれでも不義を離れよ。」と示されているからです。ですから主は、「バビロン」に向かつて、その中から真の信者が離れるように、その「バビロン」の悪に染まらないようにと呼びかけておられます。つまり、あらゆる悪との交わりを捨て去ることが大切です。そしてこの主の呼びかけは、いつの時代にも当てはまります。主は、すべての罪から離れ、妥協することなく、ご自分の側につくことを求めておられるのです。

アブラハムもかつて偶像礼拝の中から呼び出されました。

その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」

(創世記 12・1)

ロトもまた、ソドムとゴモラから呼び出されました。

ふたりはロトに言った。「ほかにあなたの身の内の者がここにいますか。あなたの婿やあなたの息子、娘、あるいはこの町にいるあなたの身の内の者を見な、この場所から連れ出しなさい。わたしたちはこの場所を滅ぼそうとしているからです。彼らに対する叫びが主の前で大きくなったので、主はこの町を滅ぼすために、わたしたちを遣わされたのです。」

そこでロトは出て行き、娘たちをめぐった婿たちに告げて言った。「立つてこの場所から出て行きなさい。主がこの町を滅ぼそうとしておられるから。」しかし、彼の婿たちには、それは冗談のように思われた。

(創世記 19・12〜14)

主はイスラエルの民に、モーセを通して、コラとその子供らから離れることを要求されました。

主はモーセに告げて仰せられた。「この会衆に告げて、コラとダタンとアピラムの住まいの付近から離れ去るように言え。」モーセは立ち上がり、イスラエルの長老たちを従えて、ダタンとアピラムのところへ行き、そして会衆に告げて言った。「さあ、この悪者どもが天幕から離れ、彼らのものには何にもさわらな。彼らのすべての罪のために、あなたが滅ぼし尽くされるといけないから。」

(民数記 16・23〜26)

彼らとすべて彼らに属する者は、生きながら、よみに下り、地は彼らを包んでしまい、彼らは集会の中から滅び去った。このとき、彼らの回りにいたイスラエル人はみな、彼らの叫び声を聞いて逃げた。「地が私たちをも、のみこんでしまうかもしれない。」と思ったからである。また、主のところから火が出て、香をささげていた二百五十人を焼き尽くした。

(民数記 16・33〜35)

主は、バビロンがメディアとペルシャとによって滅ぼされる前に、ご自分の民を呼び出されました。

「バビロンの中から逃げ、それぞれ自分のいのちを救え。バビロンの咎のために断ち滅ぼされるな。」

(エレミヤ 51・6)

「わたしの民よ。その中から出よ。主の燃える怒りを免れて、おのおの自分のいのちを救え。」

(エレミヤ 51・45)

新約聖書においても私たちはこれと同じような神の呼びかけを見ることができます。ペテロはこの悪の時代から救われなさいと言っています。

ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、「この曲がった時代から救われなさい。」と言って彼らに勧めた。

(使徒 2・40)

パウロはコリントの教会に向かって、偶像礼拝を離れなさい、不信仰と汚れとから離れなさいと言っています。

ですから、私の愛する者たちよ。偶像礼拝を避けなさい。

(Iコリント 10・14)

不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、不品行を

行なう者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。

(Iコリント 6・18)

パウロはまた、テモテに対して、若いときの情欲を離れなさいと言っています。

それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。

(IIテモテ 2・22)

しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。

(Iテモテ 6・11)

さらにペテロは、信者たちが恥ずべき欲望とこの世の汚れとから身を避けなさいと言っています。

その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。

(IIペテロ 1・4)

主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりもっと悪いものとなります。

(IIペテロ 2・20)

これらはすべて同じことを意味しています。つまり「悪を避けて彼らの中から逃れよ」ということです。

「それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

(Ⅱコリント 6・17、18)

「バビロン」は、主に対立するものです。したがって主は、ご自分に属する者たちがその墮落した宗教との関係を断ち切ることを求めておられます。なぜローマ・カトリック教会は、神に対立して対立するのでしょうか。

ローマ・カトリック教会は、神の模倣を試みながら、神のもつとも愛しておられる主のみからである教会を迫害し、自分たちこそが真の教会であると主張してきました。ヨシユア記7章を見ると、カルミの子アカンは、聖絶された外套や金銀を盗みました。その結果アカンは石で打ち殺され、神はイスラエルから離れ去ったのです。主は私たちにはつきりとした態度を取ることを要求しておられます。

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

(ローマ 12・2)

真の信者はこの世の人のようであってはなりません。真の信者はこの世では異質な者でなければなりません。真の信者は主なる神にのみ仕えることを選びます。

もしも主に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、主に仕える。

(ヨシユア 24・15)

それは、この世から離れ去るのではなく、この世にあつて寄留者のように生きることの意味します。ちようどイエス様がそうであつたように。

終わりの時代にあつて、「外に出よう」ということは、主の語りかけです。私たちは教会が「バビロン」であると自らを称するときには、そして教会と行動を共にすることができないときには、そこから出ていかなければならないのです。

3 神のさばきの手段についての要求

次に、6節から8節を見てみましょう。すべての罪がさばかれます。特に傲慢がさばかれるのです。この箇所には、「彼女が支払ったものをそのまま彼女に返し、彼女の行いに応じて二倍にして戻しなさい。」とあります。「バビロン」は自ら生ける神を離れて、罪を犯しただけでなく、

他の人々を罪に誘うという二重の罪を犯したのです。人々は救いに導かれるどころか、罪に導かれたのです。

思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。

(ガラテヤ 6・7)

人は蒔いたものを刈り取らなければなりません。ローマ・カトリック教会も、恐ろしいさばきを刈り取らなければなりません。収穫の刈り入れでは、かつて蒔いた種が何倍にも増えています。「風を蒔く者は風を刈り取る」とホセア書の8章7節に記されている通りです。

彼らは風を蒔いて、つむじ風を刈り取る。麦には穂が出ない。麦粉も作れない。たといできて、他国人がこれを食い尽くす。

(ホセア 8・7)

これは、善についても悪についても同じように当てはまります。ですから、罪が大きければ大きいほど、さばきもまた大きくなるのです。イエス様だけが、罪を赦し恥を覆ってくださいます。罪の中心は、自分を正しいとする心です。神だけに帰せられる栄光を、自分にもにしようとするのが罪なのです。

射手呼び集めてバビロンを攻め、弓を張る者はみな、これを囲んで陣を敷き、ひとりものがすな。そのしわざに応じてこれに報い、これがしたとおりに、これにせよ。主に向かい、イスラエルの聖なる方に向かって高ぶったからだ。

(エレミヤ 50・29)

まことに、万軍の主の日は、すべておごり高ぶる者、すべて誇る者に襲いかかり、これを低くする。高くそびえるレバノンのすべての杉の木と、バシヤンのすべての檜の木、すべての高い山々と、すべてのそびえる峰々、すべてのそそり立つやぐらと、堅固な城壁、タルシシュのすべての船、すべての慕わしい船に襲いかかる。その日には、高ぶる者はかがめられ、高慢な者は低くされ、主おひとりだけが高められる。(イザヤ 2・12-17)

しかし、万軍の主は、さばきによって高くなり、聖なる神は正義によって、みずから聖なることを示される。(イザヤ 5・16)

自分を中心とした生活と、そこから生じる傲慢から、自分が中心にならなければ我慢ができないという態度が生まれてきます。「バビロン」もまた、自らを誇りとしたことが7節に書かれています。

彼女が自分を誇り、好色にふけたと同じだけの苦しみと悲しみを、彼女に与えなさい。彼女は心の中で『私は女王の座に着いている者であり、やもめではないから、悲しみを知らない。』と言うからです。(黙示 18・7)

古代のバビロンもまた、自分の名をあげようとしたのです。

そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」（創世記 11・4）

この態度に対して、主はさばかれました。

ところがアブラハムは、まったく逆の態度をとりました。アブラハムは自分の名譽ではなく、神の名譽だけを心にかけていたのです。ですから主なる神は、アブラハムの名を高めると約束されたのです。

「そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。」（創世記 12・2）

イエス様はご自分に属する者たちに祝福を与えようとしておられます。「バビロン」はイエス様の栄光ではなく、自分の栄光を現わそうとしたのです。「バビロン」は、18章の7節で「私は女王の座に着いている者であり、やもめではないから、悲しみを知らない。」と語っています。この言葉には傲慢と高ぶりが現われています。人は神に頼ることを求めないで自分が中心に立つとうとします。しかし神から離れて独立することは、ちょうどやもめになるのと同じことです。神から離れることは孤独になることです。「バビロン」は自らの富を誇り、神から離れているむなしさに気がつきません。

18章の7節の表現に注意しましょう。「彼女は心の中で…と言うからです。」とあります。つま

り、それはひとり言です。私たちは同じようなひとり言を、聖書の中で見出すことができます。

「まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思い、……。」

(マタイ 24・47、48)

マタイ24章48節の悪いしもべは、「主人はまだまだ帰るまい。」と、心の中で思っています。また、ルカの福音書12章16節から19節には、ある金持ちの心と言葉が記されています。

「ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もつと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。『たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』」

(ルカ 12・16、19)

ラオデキヤの教会は、黙示録3章17節で、「自分は豊かになった。乏しいものは何もない」と言っています。

「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」

(黙示 3・17)

これらの言葉の中に、自分を誇りとし、自分でめくらになつてゐる者の姿が描かれています。「バビロン」は、「自分の罪を憐れんでください」と祈る人々と大きな違いがあります。このように祈る人には救いと解放が与えられますが、「バビロン」は、ただ自分のことだけを考えています。「バビロン」は自分だけを愛し、自分だけを大切にします。同情心や思いやり、心遣いなどのやさしい心を「バビロン」は全然知ろうともしないのです。

「バビロン」は7節にある通り、「悲しみを知らない。」と言ひ、いつまでも栄えることができると思つてゐるのです。

2 この世の悲しみと天国の喜び

1 力ある者と富む者と創造力を持つ者の嘆き

続いて、9節から20節までを見ていきましょう。

二千年ほど前から、ローマは永遠の都であると言われてきました。しかし、この都はまもなく滅び去ります。この世の王や支配者、富や交易や産業、それは一瞬のうちに荒れすたれてしまふのです。つまり、政治、経済、交通の3つの領域が破滅するのです。

9節の地上の王たちとは、黙示録17章16節の十人の王たちのことでしょう。これらの王たちは、神が「バビロン」へのさばきを行なうための道具とされたのです。そして彼らは、「バビロン」の破滅によつて大きな損失を被ることになりました。終わりの時代の教会の破滅と共に、地上の王たちは、その欲望を追求することができなくなります。

続く口節には、「商人たち」の嘆きが詳しく述べられています。「バビロン」の滅びとともに「バビロン」の経済も破滅するのです。ここには三十の商品の名前が記されていますが、いずれも、もっとも価値のある、高価なものばかりです。そして莫大な富の集まるところには、道徳的な墮落が生じてきます。富が集まれば、当然社会的な不公平も生じてきます。三十の高価な商品は、裕福な階層の人々が求める品々であり、彼らの欲望が何を求めているかを示しています。その欲望はこの世の外面的なものに対して向けられています。ここに書かれた商品は、物質として貴重で重要なものではありませんが、人の心がそれらに奪われるときには、否定的な意味が強くなります。なぜなら、これらによって社会的な不公平が生じ、人間が物質の奴隷となりはてるからです。ローマの富は、ヨハネの時代にはたいへん強大なものでした。ユダヤの經典タルムードには、「この世の富の90パーセントはローマに集められた」と書かれています。世界中の商人と商品とがローマに流れ込んでいたのです。

また、「ローマにないものは世界のどこにもない」という格言もあります。多くの商品がアジアやインドや中国やアフリカからローマにもたらされました。ローマの皇帝は、水ではなく香水の中で体を洗いました。しかもそれを一度使っただけで捨ててしまったのです。着物も一度着ただけで捨てていました。皇帝は、旅行に出るときには千台以上の車を従えて行きました。また、銀の風呂で入浴をしました。ローマ帝国には、六千万の奴隷がいました。奴隷を持っていないということは、着物や家を持っていないのと同じことでした。貧しい市民でも数人の奴隷を持っていたのです。

最盛期のローマには、一つの家庭が四百人以上の奴隷を持つこともまれではなかったのです。大きな地主は、一万人以上の奴隷を持っていました。ローマにおいてはあらゆるものを見る事ができ、あらゆるものを所有することができました。のちにローマ・カトリック教会は「罪の赦し」を金で売りました。ルターは、「ローマは何でも金で売ろうと思っている」と叫んで怒りました。「神であろうと、イエス様であろうと、聖霊であろうと、売れるものなら金を儲けるために何でも売ろうとしている」と叫びました。まさに世界の富はローマに集められ、人間の欲望はとどまるところを知らなかったのです。

このようにして、ローマは逃れることのできないさばきに向かっていました。ローマの持つ富と権力をめぐって、「淫婦」と「獣」、つまり教会と国家の関係がこじれていきます。教会と国家がともに主なるまことの神に反抗する結果、この両者の関係は決して良いものにはならないのです。罪を犯せば真の交わりがなくなるのは当然で、そこには偽りの交わりしか残りません。罪によって、交わりは壊されます。人がこの世のことだけを考え、自分の利益だけを追及しているときには、人と人との交わりは失われてしまいます。そして、物質的な富だけを大切にしている人を利用してする人に対しては、神のさばきは容赦なく下されるのです。

「バビロン」は、羊の皮をかぶった狼のようなものです。「バビロン」に属する人々は神に仕えていると言いながら、人を主イエス様のもとに導こうとしません。その逆に、真の信者を憎み、迫害し、殺害します。その結果は、悲劇的なさばきに終わります。

「バビロン」に対するさばきの後で、政治や経済や交通はまひ状態になります。どのように懇

願しても、この状態を回復することができません。あらゆる懇願の結果は絶望と落胆があるのみです。政治家や権力者の源が、生けるまことの神の中に置かれていないときは、すべては無力です。商人たちの富が神ご自身を知ることには用いられないなら、彼らは、非常な貧しさを体験させられます。

物を造り出す者、海で働く者たちがその報酬であるパンを神の御手から受け取るのでなければ、彼らは「バビロン」のさばきの時に、もはやパンを得ることすらできなくなるのです。

また、「わざわいが来た。わざわいが来た。」と繰り返す言葉が、10節、16節、19節と三回も繰り返されていることは、そのさばきが大変厳しいことを示しています。この繰り返される三つの「わざわいが来た。」という言葉に対して、20節には「喜びなさい。」という言葉が出てきます。この言葉は、ここに表現される喜びが大変大きなものであることを示しています。

主なる神の民にとって必要なことは、復讐を行なうことではなく、すべてを神に栄光を帰することです。神は人間には文化が必要なことを知っておられます。それは人間が動物化することなく、地上を豊かに、平和にすることを望んでおられるからです。しかし人間は、知識によっておごり高ぶり、その力を互いに支配しあうために用いています。そして神に対して心を閉ざしています。こういった態度に対してさばきが下されるのです。

もし、不正と罪をさばかないとすると、神は偶像にすぎません。しかし聖書の神は聖なるお方であり、さばく神でもあります。そして神のさばきは正しいのです。18章には、悲しみの叫びに対して、喜びの声があがっています。バビロンに従い、自分のことだけを考えた人々は、嘆き悲

しむことになります。

すると彼らはすっかり分別を失ってしまつて、イエスをどうしてやろうかと話し合つた。

(ルカ 6・11)

「いま食べ飽きているあなたがたは、哀れな者です。やがて、飢えるようになるからです。いま笑っているあなたがたは、哀れな者です。やがて悲しみ泣くようになるからです。」

(ルカ 6・25)

2 聖徒たちと使徒たちと預言者たちの喜び

これに対して、神に栄光を帰した人々は、どのような苦しみをも喜びをもつて乗り越えることができます。次の19章を見ると、聖徒たちと使徒たちと預言者たちの喜びが述べられています。くわしくは次章で学びますが、ここでその要旨を少しだけまとめておきましょう。

まず、「聖徒たち」とは、神の側に立ち、汚されることのない人々です。この世においては、彼らは異邦人であり、寄留者です。彼らは毎日主イエス様の再臨を待ち望んでいます。次に、「使徒たち」とは、遣わされた人々のことです。彼らは自分の思いで行動するのではなく、主なる神の支配の下に立つ人々です。彼らの思いは「主よ。お語りください。しもべは聞いております」という態度を守ることです。「ここに私がおります。私を遣わしてください」という思いです。彼らの意思是神に聞き従うことです。そして、「預言者」とは、主なる神によって力を与えられ

た人々のことです。彼らは神の口となり、神のみことばを伝えます。彼らは自己の思想を伝える者ではなく、神のみことば、神の判断を伝える者です。このように聖徒、使徒、預言者が、神の前に喜んでいるのです。彼らの喜びの根底は、勝ち取られた神の勝利です。彼らは主なる神の計画が成就したことを喜びます。神のご計画によれば、「バビロン」は滅ぼされなければなりません。なぜならば、「バビロン」は「惑わし者」であったからです。

3 さばきのしるし

さて、21節から24節に進みましょう。ここには御使いの象徴的な行ないが記されています。御使いが石を海の中に投げ入れて、「バビロン」がこのように打ち倒されると言っています。「バビロン」は石が投げ落とされるように、大きな高ぶりから打ち倒されるのです。私たちはこのような歴史的な前例を、古代バビロンの滅亡に見ることができます。バビロンの滅亡はエレミヤによって預言されました。ここにも、石が出てきます。

この書物を読み終わったなら、それに石を結びつけて、ユーフラテス川の中に投げ入れ、『このように、バビロンは沈み、浮かび上がれない。わたしがもたらすわざわいのためだ。彼らは疲れ果てる。』と言いなさい。

(エレミヤ 51・63、64)

しかし、終わりの時代の「バビロン」は、もっと恐ろしいことになります。その罪が、はるかに大きいからです。

この「バビロン」に対するさばきは、最後のさばきです。石が水の中に沈むように、「バビロン」は完全に破滅するのです。

主はパロの戦車も軍勢も海の中に投げ込まれた。えり抜きの補佐官たちも葦の海におぼれて死んだ。大いなる水は彼らを包んでしまい、彼らは石のように深みに下った。

(出エジプト 15・4、5)

あなたが彼らの前で海を分けたので、彼らは海の中のかわいた地を通って行きました。しかし、あなたは、奔流に石を投げ込むように、彼らの追っ手を海の深みに投げ込まれました。

(ネヘミヤ 9・11)

1 文化の領域

「バビロン」の滅亡については、黙示録で14回記されています。まず、文化的な領域についての滅亡です。

・音楽

22節にある立琴や歌の声は、この世的な音楽を意味します。笛とラッパは宗教的な音楽を意味します。かつては音楽は喜びを表わすものでしたが、さばきの後では、そのような音楽や歌声は聞かれなくなります。

・工芸

次の箇所には、職人のことが記されています。都市、文化の根底は、物を作る職人たちの技術によっています。この職人が見られなくなるということは、都市、文化の崩壊を示しています。

・食べ物

次に続く、ひき臼の音も聞かれなくなるとあるのは、ひき臼でひくべき粉がなくなること示しています。食べ物の基本であるパンがなくなるために、誰も生きていけなくなります。

・文明

文明もまた崩壊します。23節の、ともしびの光りが輝かなくなるということは、家のともしびが消されることです。それは、人間の文明の基本が消え去ることです。

・家族

花婿や花嫁の音が聞かれなくなるということは、もはや家族や家庭が絶え、共同生活が、失われることを意味しています。

これら、五つの文化の領域は、神からの五つの賜物です。しかし、偽りや略奪や富や不道徳が世界を支配するときには、神のさばきがくだされるのです。さばきの後では、「バビロン」は墓場のごとく暗く、静かになるのです。

2 さばきの理由

23節の後半からは、その理由が三つ、示されています。

・商人

商人はこの地上の力ある者のひとつです。商人は影響力を持つだけでなく、大きな力を持ち、売上と利潤を追い求めるために、神も、他の人々のことも忘れてしまいます。これは、エゴイズムであり、ときには道徳的な拘束力を破り捨ててはばからなくなります。

残念なことに、終わりの時代の教会には、同じことが起こります。教会の使命は、神のために生き、天の宝とされることです。しかし教会は自らの利益のために生き、世界の宝を自分のところに集めるようになります。いかに多くの資金が、寺院を建て、壮麗な装飾を装い、祭礼を行なうことのために費やされることでしょうか。

この自己中心の思いが、終わりの時代のさばきの原因となるのです。

・魔術

23節の最後には、「すべての国々の民がおまえの魔術にだまされていたからだ。」とあります。これもさばきの原因となります。淫婦たちの呪術については、次のように記されています。

子を失うことと、やめになること、この二つが一日のうちに、またたくまにあなたに来る。あなたがどんなに多く呪術を行なっても、どんなに強く呪文を唱えても、これらは突然、あなたを見舞う。

(イザヤ 47・9)

これは、すぐれて美しい遊女、呪術を行なう女の多くの淫行によるものだ。彼女はその淫行によって国々を、その魅力によって諸部族を売った。

(ナホム 3・4)

主イエス様は、「つまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みで溺れ死んだほうがましです。」と言われました。

「しかし、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにもつまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです。」

(マタイ 18・6)

このようにつまずきは、「まちがった宗教の責任」です。まちがった教会は、主イエス様のもとに人を導くことをしないで、人々をまちがった方へと導いていくのです。

ローマ・カトリック教会は、「人は洗礼を受けることにより救われる」とか、あるいは「人は良い行ないによつて救われる」と教えています。

また、まちがった宗教は、自己の利益を実現する手段ともなります。自己の利益に仕えることが、道徳的にも正しいと教えられます。その結果、自己の利益の追求を助けてくれるものが神となり、善悪を判断する尺度はただ利益のみ、ということになっていきます。宗教的な儀式にすぎない幼児洗礼とかミサとかは、聖書によれば魔術であり偶像礼拝です。宗教的な儀式にすぎない幼児洗礼とかミサとかは、聖書によれば魔術であり偶像礼拝です。

真の教会は、真理の土台であり柱でなければなりません。

それは、たとえ私がおそくなつたばあいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。

(I テモテ 3・15)

3 良心の問題

第三のさばきの原因は、24節にある預言者と聖徒の血が「バビロン」で流されたことにあります。真の信者は、常にまちがった教会からは妨げとされ、「良心を刺すとげ」としてのけ者になります。ですから彼らは憎まれ、迫害され、殺されたのです。人々は、主イエス様の証し人の証しができないようにし、そして殺したのです。このゆえに、さばきがくだされます。

まことの教会は、主イエス様のために証しをし、そのために苦しみを受けます。

あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのため
の苦しみを賜わったのです。
(ピリピ 1・29)

確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

(Ⅱテモテ 3・12)

しかし、偽りの教会は、主イエス様の証し人に反抗し、彼らを死に追いやります。

主イエス様の支配が拒まれるところにおいては、神のさばきがくだされるのです。

バビロンの王であるニムロデは、バビロンの町とバベルの塔とを建設しました。しかし、バビロンの町が滅びたときに塔もまた崩れ去りました。しかし、人智によりたのみ、壮麗さを誇ろうとするバベルの精神は、全世界を捕らえたのです。終わりの時代にはこのことがますますはつきりしてきます。

バビロンは一方においては、自己の力による文化と教育と政治との中心地であり、他方において、墮落した教会、すなわちおもにローマ・カトリック教会の象徴です。

新約聖書には、悪魔的な体制としてのバビロンについて、三十回述べられています。この世界体制の支配者はサタンです。

「今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。」

(ヨハネ 12・31)

「わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。

彼はわたしに対して何もすることはできません。」

(ヨハネ 14・30)

「さばきについては、この世を支配する者がさばかれたからです。」(ヨハネ 16・11)

私たちは神からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。

(Iヨハネ 5・19)

「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。」

(黙示 2・13)

この世の世界体制の精神は、まったく罪に根ざしています。

キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです。

(ガラテヤ 1・4)

神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。

(コロサイ 1・13、14)

主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりもっと悪いものとなります。

(Ⅱペテロ 2・20)

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思つたら、その人は自分を神の敵としているのです。

(ヤコブ 4・4)

イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。

(Iヨハネ 4・3)

しかし、この世の世界体制は、まもなく過ぎ去り、滅び去ります。

世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。

(Iヨハネ 2・17)

また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実。」と呼ばれる方であり、義をもつてさばきをし、戦いをされる。その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもつて彼らを牧される。この方はまた、万軍の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。その着物にも、もにも、「王の王、主の主。」という名が書かれていた。

(黙示 19・11、16)

また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から下つて来るのを見た。彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕らえ、これを千年の間縛つて、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放さなければならぬ。

(黙示 20・1-3)

この世の世界体制の精神の特徴は、所有欲と高ぶりと迫害です。その結果は戦争です。この精神は、信者に対していつも誘惑しようとしています。

すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。

(Iヨハネ 2・16)

それから、私は、天からのもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。なぜなら、彼女の罪は積み重なって天にまで届き、神は彼女の不正を覚えておられるからです。」

(黙示 18・4、5)

主イエス様は、十字架の死を通して、すでに完全な勝利を得られました。そのとき、主なる神によって、墮落した宗教と神なきローマ帝国とがこの目的のために用いられました。

十字架につかれたイエス様の罪状書きは三つの国の言葉で記されました。しかしこの罪状書きは実は本当の罪状書きではありませんでした。その言葉は、「ユダヤ人の王イエス」と読まれたのです。ヘブライ語は宗教の言葉であり、ギリシヤ語は文化の言葉であり、ラテン語は政治の言葉です。

その当時、ユダヤ人は、神の子イエス・キリストを受け入れようとしませんでした。彼らはまことの神とイエス・キリストなしに天国を作ろうとしたのです。この努力の結果は破局であったと、黙示録の中に記されています。この世のものに拠り所を持つととする者は、破局に終わります。しかし主イエス様に望みを置く者は、神の永遠の栄光を受けるのです。

黙示録の18章は、三つの良心の問題を私たちに問いかけています。

まず、私たちは、まだ崩壊した「バビロン」の中にいるのでしょうか。あるいはそこから出ているのでしょうか。私たちの周囲の人々は、「バビロン」の精神に支配されています。私たちはこのような環境の中で妥協し、平然としているのでしょうか。あるいは、悩んでいるのでしょうか。

私たちは主イエス様の側に立ち、主イエス様の証しをしているのでしょうか。私たちは人々がこのような環境の中から救い出されることを本当に心にかけて、願っているのでしょうか。

私たちは本当に、主イエス様のもとに他の人々を導こうとしているのでしょうか。

次に、私たちは、この世の終わりが来るとき、外側のすべてのものを奪い取られて乞食のようになるか、あるいは主イエス様の豊かな恵みと富にあずかる者となるかのいずれかです。私たち

の生活の目的は何でしょうか。私たちは何に支配されているのでしょうか。

また、困難、苦しみ、迫害が襲ってくるときに、私たちの態度はどうでしょうか。私たちは、あらゆる攻撃の中で、主イエス様が勝利を得られたということを喜んで、それに耐えているでしょうか。

主イエス様の勝利がまもなく明らかにされる、という確信を持つ私たちは幸いです。

31 三つの「ハレルヤ」と小羊の婚姻

黙示録19章1節から10節まで

- 1 バビロンの崩壊に対する喜びの歌
 - 1 第一番目の「ハレルヤ」(救い)
 - 2 第二番目の「ハレルヤ」(さばき)
 - 3 第三番目の「ハレルヤ」(支配)
-
- 2 小羊の婚姻
 - 1 「花婿」とは誰か
 - 2 「花嫁」とは誰か
 - 3 「招待客」とは誰か

この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。神のさばきは真実で、正しいからである。神は不品行によつて地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」彼らは再び言った。「ハレルヤ。彼女の煙は永遠に立ち上る。」すると、二十四人の長老と四つの生き物はひれ伏し、御座についておられる神を拝んで、「アーメン。ハレルヤ。」と言った。また、御座から声が出て言った。「すべての、神のしもべたち。小さい者も大きい者も、神を恐れかしこむ者たちよ。われらの神を賛美せよ。」

また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである。」御使いは私に「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ、と書きなさい。」と言い、また、「これは神の真実のことばです。」と言った。そこで、私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると、彼は私に言った。「いけません。私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じしもべです。神を拝みなさい。イエスのあかしは預言の霊です。」

(黙示 19・1-10)

黙示録19章全体を通しての主題は、「イエス様のご再臨」、「勝利者であるイエス様」、「反キリ

ストの時代の終わり」、「地が再び創造者の所有に戻されること」です。

まず19章1節から10節までを、主題別に前半（1〜5節）と後半（6〜10節）に分けて考えてみましょう。

1 「バビロン」の崩壊に対する喜びの歌

人間の歴史は、二つの方向に向かって進んでいきます。悪魔か神かの、いずれかの方向です。悪魔は神から力を与えられています。終わりの時代において、その力が明らかにされます。この世界全体が一つの巨大な「バビロン」の王国として統一されるときこそ、悪魔はその力をあらわにします。悪魔は思い上がり、まるで生ける神が死んだかのように振るまうのです。

しかし、主なる神が沈黙しておられるのは、しばらくの間だけです。罪が満ちわたって後に、神のさばきが下されるのです。黙示録18章を通して、私たちは神の恐るべきさばきについて学んできました。「バビロン」は滅ぼされ、地上には「バビロン」の崩壊を悼む大きな悲しみが起ります。しかし、「バビロン」の崩壊が大きければ大きいほど、天における喜びは大きいのです。天におけるこの大きな喜びを、黙示録19章のはじめに見ることができます。

この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。神のさばきは真実で、正しいからである。神は不品行によって地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」

（黙示 19・1〜2）

罪の悔い改めがあるとき、天には大きな喜びが湧き起ります。しかし黙示録19章に記されている喜びは、それにも増して大きいのです。なぜこの喜びは、そんなにも大きいのでしょうか。主なる神のご目的とご計画が、このとき成就するからです。

イエス様の今現在のご目的は、失われた人々を救い出し、みからだである教会を建てあげることです。悪魔の目的は、人の目をくらまして偽りの教会を建てることです。この偽りの教会が、「バビロン」です。

「バビロン」崩壊から千年の間、イエス様のみからだであるまことの教会は、イエス様と共に地上を支配します。これを千年王国と呼びます。このとき、教会は「聖なる都」と呼ばれます。

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。：また、最後の七つの災害の満ちているあの七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりが来た。彼は私に話して、こう言った。「ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。」

(黙示 21・2、9)

悪魔もこれを模倣して教会を建てますが、この教会は「聖なる都」ではなく、「大きな都」と表現されています。

また、ひとりの強い御使いが、大きい、ひき白のような石を取り上げ、海に投げ入れて言った。「大きな都バビロンは、このように激しく打ち倒されて、もはやなくなつて消え

うせてしまう。」

(黙示 18・21)

イエス様のみからだであるまことの教会は、またの名を「キリストの花嫁」と呼ばれ、悪魔の偽りの教会は「大淫婦」(19章2節)と呼ばれるのです。

悪魔に対するさばきは、徹底して行なわれます。悪魔が打ち倒されさばかれる時の天上の喜びはたいへん大きなものです。「小羊の婚姻」は、大淫婦であるにせの教会に神のさばきが下された後で、実現されます。

黙示録18章20節において、天に住む者たちに、「喜びなさい」という命令が与えられています。

「おお、天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。神は、あなたがたのために、この都にさばきを宣告されたからです。」(黙示 18・20)

この「喜びなさい」という命令が、19章で実現されます。天上の者たちが「ハレルヤ」と叫んでいます。新約聖書の中では、黙示録19章で初めて「ハレルヤ」ということが出てきます。「ハレルヤ」とは喜びの表現です。「ハレルヤ」とは、「主をほめよ」という意味です。

黙示録18章には、三種類の人々の嘆き悲しむさまが記されています。地上の王(9節)と、商人(11節)と、荒れすたる都の富を惜しむ人々(19節)の嘆き声です。

彼女と不品行を行ない、好色にふけった地上の王たちは、彼女が火で焼かれる煙を見る
と、彼女のことで泣き、悲しみます。

(黙示 18・9)

また、地上の商人たちは彼女のことと泣き悲しみます。もはや彼らの商品を買う者がだれもないからです。

(黙示 18・11)

それから、彼らは、頭にちりをかぶって、泣き悲しみ、叫んで言いました。「わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。海に舟を持つ者はみな、この都のおごりによつて富を得ていたのに、それが一瞬のうちに荒れすたるとは。」

(黙示 18・19)

これに対し、黙示録19章では、三種類の「ハレルヤ」が歌われています。旧約聖書でも、詩篇の中に「ハレルヤ」ということばが、二十一回出てきます。例えば次のようです。

罪人らが地から絶え果て、悪者どもが、もはやいなくなりますように。わがたましいよ。主をほめたたえよ。ハレルヤ。

(詩篇 104・35)

黙示録19章における「ハレルヤ」は、自分個人への恵みに対して主をたたえる歌声ではなく、「最終的な神の勝利」をたたえる歌声です。悪魔とその仲間が減びるとき、「ハレルヤ」が高らかに歌われるのです。

1 第一番目の「ハレルヤ」(救い)

この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。

「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。神のさばきは真実で、正しいからである。神は不品行によつて地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」

(黙示 19・1・2)

黙示録19章1節から2節に見られる第一番目のハレルヤは、神の救いの力に対して歌われている。まず。

彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」

(黙示 7・10)

そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの權威が現れた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。」

(黙示 12・10)

神は、私たちにとって救い主であり、救いを欲しておられ、救いを与えるお方です。救いの力を現わすために、神は反キリスト、にせ預言者の力を打ち壊されました。主なる神のさばきは、神をあかすために血を流した者たちの復讐のためにもなされるのです。

神はもちろん、生きておられます。神の本質は、恵みと寛容です。神は人間を救い、そして、

癒そうとしておられます。神は常に、聖なる神であられます。人は、神を拒むときにさばきを受けるのです。この地上を神なしで天国にしようとする人間の試みのすべては、失敗に終わります。

2 第二番目の「ハレルヤ」(さばき)

彼らは再び言った。「ハレルヤ。彼女の煙は永遠に立ち上る。」

(黙示 19・3)

黙示録19章3節に見られる第二番目の「ハレルヤ」は、神のさばきに対して歌われています。さばきは神の勝利です。さばきの目的は、神だけに栄光を帰することです。「神をほめよ」ということばが、ここに響き渡っているのです。神のさばきは正しく、しかも真実です。煙は永遠に立ち上ります。「永遠に立ち上る煙」とは、「人間の力によることがむなし」ことを表しています。人間の世界の移ろいややすさに対して、神の偉大さは変わることがなく、永遠です。神の義を求める者は、永遠に神をほめたたえます。すべての人々は、神のさばきが真実で正しいと告白せざるをえません。

それではなぜ、神のさばきは正しいのでしょうか。まず、神だけが、人間の心の奥にある思いと動機とを見抜くことがおできになるからです。そして、神だけが、差別や偏見にとられることなく、完全に公正にさばくことがおできになるからです。神だけが、正しいさばきに必要な知恵と力とを持っておられます。

3 第三番目の「ハレルヤ」(支配)

すると、二十四人の長老と四つの生き物はひれ伏し、御座についておられる神を拝んで、「アーメン。ハレルヤ。」と言った。

(黙示 19・4)

黙示録19章4節に見られる第三番目の「ハレルヤ」は、神のご支配をたたえています。

さばきを通して、神のご支配が明らかになります。イエス様は主権者として、汚れのないものとして、ご自身の姿を現わされます。そして、イエス様のみからだである教会もまた、汚れのないものとして、イエス様の前に立たされるのです。

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

(エペソ 5・27)

この「栄光の教会」が、イエス様と共に下ることによって、神の支配が実現されます。この事実を前にして、二十四人の長老たちはただ、礼拝せざるをえません。これまでも長老たちは、神のさばきのゆえに、幾度も神をほめたたえてきました。

二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆ

えに、万物は存在し、また創造されたのですから。」

(黙示 4・10～11)

また、四つの生き物はアーメンと言ひ、長老たちはひれ伏して拝んだ。(黙示 5・14)

それから、神の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神を礼拝して、言った。「万物の支配者、常にいまし、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、王となられたことを感謝します。」

(黙示 11・16～17)

しかし黙示録19章においては、長老たちはもはや、ほめたたえることをせず、神を拝んで「アーメン。ハレルヤ。」と言ひ、神の御座の前にただひれ伏すのみです。

信仰のない人々の目から見ると、神の行ないは時として正しいとは思えないこともあります。信仰のない人々は神の恵みを拒み、神の愛を無視し、神の戒めを否定します。神がさばきを行うとき、彼らは「神のさばきが正しくない」と主張します。このような人々の、盲目で悔い改めない状態は、次のように記されています。

これらの災害によつて殺されずに残つた人々は、その手のわざを悔い改めないで、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝み続け、その殺人や、魔術や、不品行や、盗みを悔い改めなかつた。

(黙示 9・20～21)

こうして、人々は激しい炎熱によって焼かれた。しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかつた。

(黙示 16・9)

そして、その苦しみと、はれものとのゆえに、天の神に対してけがしごとを言い、自分の行ないを悔い改めようとしなかつた。

(黙示 16・11)

また、一タラントほどの大きな雷が、人々の上に天から降って来た。人々は、この雷の災害のため、神にけがしごとを言った。その災害が非常に激しかったからである。

(黙示 16・21)

神が何度も警告してくださったにもかかわらず、彼らは神の恵みを拒み続けました。これは、今日の状況でもあります。

しかし、黙示録19章では、三つの「ハレルヤ」が叫ばれるとき、主イエス様はこの地上を支配するために再び地上に来られます。主イエス様は、十字架のみわざを通して、この地上に対する支配権を明らかにされました。しかし、この権利は、今まで行使されませんでした。今やイエス様は、正しいさばきを下すために、神の国を実現するために来られるのです。

イエス様は、すべての人の身代わりとなって死なれました。それゆえイエス様は、救いを拒んだすべての人々をさばくことがおできになるのです。

もう一度、黙示録19章1節を見てください。

この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。」
(黙示 19・1)

救い、栄光、力のすべては、主イエス様に属します。イエス様こそが唯一の救い主であられます。ですから私たちは、心からの感謝をささげるべきです。イエス様こそが栄光を持つお方であり、その栄光を私たちにも与えてくださるのです。ですから私たちは、礼拝をささげるべきです。神は私たちに残りの愛を示してくださいました。ですから私たちは、神を信頼すべきです。

イエス様の救いと栄光と力とに対する私たちの態度は、感謝と礼拝と信頼でなければなりません。

2 小羊の婚姻

黙示録19章1節から5節の中で、私たちは三種類の「ハレルヤ」を聞きました。それは、主の勝利に対する賛美、バビロンをさばかれた主をほめたたえる叫びでした。

私たちは、次の6節でさらに大きな「ハレルヤ」を聞きます。これは、小羊の婚姻に対してさげられるものです。

また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハ

レルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。」

(黙示 19・6-7)

このすぐ前に「神のしもべたち」という表現があります。

また、御座から声が出て言った。「すべての、神のしもべたち。小さい者も大きい者も、神を恐れかしこむ者たちよ。われらの神を賛美せよ。」

(黙示 19・5)

預言者たちは「神のしもべ」と表現されています。

第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラツパの音が響くその日には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。

(黙示 10・7)

諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りの日が来しました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。

(黙示 11・18)

殉教者たちもまた「神のしもべ」です。

私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。

(黙示 7・3)

神は不品行によって地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。

(黙示 19・2)

要約すると、「神のしもべたち」とは、神のみことばを自分の声を通して伝え、神のために命を差し出している人々のことです。「小さい者も大きい者も」という表現は、「神に属するすべての者たちを含む」という意味です。彼らは皆、今こそそのご支配を明らかに示された神をほめたたえているのです。この喜びは、旧約聖書でも見ることができます。

主は、王であられ、みいつをまとしておられます。主はまとしておられます。力を身に帯びておられます。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはありません。

(詩篇 93・1)

主は、王だ。地は、こおどりし、多くの鳥々は喜べ。

(詩篇 97・1)

主は王である。国々の民は恐れおののけ。主は、ケルビムの上の御座に着いておられる。地よ、震えよ。

(詩篇 99・1)

黙示録19章7節にも、「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。」という表現が見られます。同じ表現を次の箇所にも見ることができます。

喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいだから。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。
(マタイ 5・12)

彼らは、まごころから神をほめたたえています。なぜなら神は、ご自身に属する者たちに対するお約束を成就してくださったからです。

1 「花婿」とは誰か

次に、7節にある小羊の婚姻の時間について、学んでいきましょう。この婚姻の花婿とは、言うまでもなく、イエス様です。イエス様は、創造者やさばき主としてではなく「小羊」として、花嫁に会われます。イエス様はかつて、「小羊」として、私たちの罪をお受けになり、私たちが受けるべきさばきを受けてくださいました。イエス様はこれらのことを、私たちに對する愛のゆえになしてくださったのです。

いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。
(ガラテヤ 2・20)

ここに見る婚姻は、イエス様の勝利の姿です。イエス様は自らを「花婿である」と言っておられます。

イエスは彼らに言われた。「花婿につき添う友だちは、花婿がいつしよにいる間は、どうして悲しんだりできません。しかし、花婿が取り去られる時が来ます。そのときには断食します。」
(マタイ 9・15)

イエスはもう一度たとえをもって彼らに話された。「天の御国は、王子のために披露宴を設けた王にたとえることができます。王は、招待しておいたお客を呼びに、しもべたちを遣わしたが、彼らは来たがらなかった。∴招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」
(マタイ 22・1、2、3、14)

洗礼者ヨハネも「イエス様は花婿である」と言っています。

花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされています。
(ヨハネ 3・29)

パウロも「イエス様は花婿である」と言っています。

というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。

私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。
(Ⅱコリント 11・2)

2 「花嫁」とは誰か

同じ7節にある「花嫁」は、まことの教会を意味しています。

多くの聖書学者や註解者たちは、「花嫁」が「イスラエル」を意味すると考えています。彼らは旧約聖書の多くの箇所の中に、その根拠を見出しています。それは以下のような箇所です。

「あなたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の主。あなたの贖い主は、イスラエルの聖なる方で、全地の神と呼ばれている。主は、あなたを、夫に捨てられた、心に悲しみのある女と呼んだが、若い時の妻をどうして見捨てられようか。」とあなたの神は仰せられる。「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」とあなたを贖う神は仰せられる。

(イザヤ 54・5〜8)

あなたは主の手にある輝かしい冠となり、あなたの神の手のひらにある王のかぶり物となる。あなたはもう、「見捨てられている。」と言われず、あなたの国はもう、「荒れ果てている」とは言われない。かえって、あなたは「わたしの喜びは、彼女にある。」と呼ばれ、

あなたの国は夫のある国と呼ばれよう。主の喜びがあなたにあり、あなたの国が夫を得るからである。若い男が若い女をめとるように、あなたの子らはあなたをめとり、花婿が花嫁を喜ぶように、あなたの神はあなたを喜ぶ。

(イザヤ 62・3～5)

わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契りを結ぶ。わたしは真実をもってあなたと契りを結ぶ。このとき、あなたは主を知ろう。

(ホセア 2・19～20)

背信の子らよ。帰れ。——主の御告げ。——わたしが、あなたがたの夫になるからだ。わたしはあなたがたを、町からひとり、氏族からふたり選び取り、シオンに連れて行こう。

(エレミヤ 3・14)

確かに、イスラエルは「主の妻」と呼ばれています。偶像を拝み、偶像に仕えて姦淫を犯した妻であるイスラエルは、後に「淫婦」と呼ばれるようになりました。そしてさらに後、イエス様に悔い改めて立ち帰り、受け入れられるのです。しかしそれは「小羊の婚姻」の後のことです。

さて、先にも述べましたが、黙示録19章における「花嫁」とは、主イエス様のまことの教会をさしています。

「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのも

とに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」（ヨハネ14・3）

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあつて眠った人々をイエスといっしよに連れて来られるはずで、私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下つて来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによりがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしよに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになりました。（Iテサロニケ 4・13〜17）

この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

（エペソ 5・32）

私たちは、まことの教会を「天の花嫁」、イスラエルを「地の花嫁」と呼ぶことができます。花嫁はいずれも、小羊の血によつて贖われます。しかし、「天の花嫁」と「地の花嫁」には異なつ

た使命があります。天上のエルサレムと地上のエルサレムがあるように、天の花嫁と地の花嫁とがあるのです。コリントの教会も、天に属する教会(花嫁)でした。

私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。
(Ⅱコリント 11・2)

この教会は、異邦人とユダヤ人、両方の信者たちによって建て上げられたものでした。次の箇所を見ると、教会がイエス様のからだとして、また妻として描かれています。

私たちはキリストのからだの部分だからです。「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とを
さして言っているのです。
(エペソ 5・30〜32)

私たちは、どのようにしてイエス様の花嫁になることができるのでしょうか。罪人としてイエス様のもとに来て、イエス様の十字架による赦しと救いを受け入れることによってです。イエス様によって永遠のいのちを与えられることによってです。このことを通して、人はイエス様との結びつきを得ます。信仰の成長は、イエス様をより良く知ることによって得られます。イエス様は、まもなく再びこの地上に下って来られて、ご自分に属する者たちをみもとに迎えてくださるのです。

さて、「天にいる二十四人の長老たち」は、黙示録4章においても見ることができます。

御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。
(黙示 4・4)

この「二十四人の長老たち」とは、旧約聖書と新約聖書の時代からそれぞれ選出された信者たちです。これらの信者たちは、黙示録19章に記されているとおり、終わりの時に、長老という名をもって現われます。

これに対し、「キリストの花嫁」とは、新約聖書の時代から選出された信者たちです。このことは、今日、主イエス様を受け入れている人々はみな、イエス様の花嫁となることを意味しています。

3 「招待客」とは誰か

9節にある「婚宴に招かれた者」、つまり「招待客」は、旧約聖書の時代の信者たちによって構成されています。大いなる苦難の時代の殉教者たちもこの中に入ります。招待客は、花嫁とはまた違う別のグループを形成しています。これらの人々は花嫁の友達であり、共に喜ぶ人々です。

花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことはばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。
(ヨハネ 3・29)

彼らは花嫁ではなく、花嫁の栄光にあずかる者たちです。永遠の喜びがすべての者たちの上にあふれるのです。

私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。

(黙示 19・7)

さて、7節の後半に「花嫁はその用意ができた」とあるのは、何をさしているのでしょうか。その絶対的な条件とは、イエス様の血による救いです。さらに、聖霊を通して内側から輝き出る永遠のいのちをいただくことも、花嫁となるための条件です。主を信じる者たちは、イエス様を通して天の栄光に入る用意をされるのです。

ところで、「イエス様の婚姻」と「天の栄光に入る備え」とは、何をさすのでしょうか。携挙の後で、すべての信者は、さばきの座に立たされます。

なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けることになるからです。

(Ⅱコリント 5・10)

私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。

(ローマ 14・10)

その時すべての信者は、各自、忠実さにしたがって報いを受けるのです。

ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごともしっかりにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。(Iコリント 4・5)

よく気をつけて、私たちの労苦の実をだいなしにすることなく、豊かな報いを受けるようになりなさい。
(IIヨハネ 8)

花嫁を飾るものは、「聖い衣」です。「聖い衣」は、雪のように白いです。これに対して淫婦の衣とは、緋色の衣です。

この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで実を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手持っていた。
(黙示 17・4)

花嫁の「聖い衣」は純白で、しみひとつありません。そして純白は、栄光と光の性格をも表しています。また、「聖い衣」は、聖徒の正しい行ないを表わしています。これに対して淫婦の衣は、不品行で汚されているのです。

ヨハネが黙示録を書いた頃、人々は、亜麻布でできたツニカという下着と、トガという上着を着ていました。その下着は、純白とは言えない亜麻布をしていました。ですから、8節にある花嫁が着る光輝くきよい麻布の衣が、イエス様の聖い義の衣をさしていることは、明らかです。イ

イエスを信じる者はすべて、その罪を白く聖められ、義とされ、救われているのです。イエス様の聖さと義は、何によっても決して奪い去られるようなことはありません。

しかし、黙示録19章において指し示されているのは、下着のツニカ、つまり「義とされること」ではなく、上着のトガ、つまり「正しい行ないに対する報い」についてです。この「正しい行ない」は、信者の力によってもたらされるものではなく、聖霊の実としてもたらされるものです。

神は正しい方であって、あなたがたの行いを忘れず、あなた方がこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。

(ヘブル 6・10)

親切な言葉、愛の行ない、信仰による祈りなどはすべて、報いを受けます。「婚姻の時の着物」と私たちの地上における生活とは、密接な関係を持つのです。

自分を中心とし、自分の力で行なわれたことはすべて、炎によって焼き捨てられます。これに対し、イエス様への愛からなされたことはすべて、報いられます。私たちの心の動機は、純粹でなければなりません。

私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝しています。(ピリピ 1・3)

私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしてくださるのは神です。(ピリピ 1・8)

すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません。

(ヘブル 12・14)

召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。

(エペソ 4・1)

主になつた歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。

(コロサイ 1・10)

肉体の中にあると、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

(Ⅱコリント 5・9)

さて、ここまでは、上着のトガについて語ってきました。その上着は花嫁に与えられ、着ることを許されました。

花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである。

(黙示 19・8)

これによって、花嫁、つまり聖徒たちの行ないもまた、神からの賜物であることがわかります。

聖霊は、従順な信者を通して働かれます。したがって、信者は聖められた行ないを、自分のものとして誇ることはできません。聖い行ないを与えられたお方こそが、たたえられるべきなのです。花嫁は飾られて、花婿の前に立ちます。このようにして花嫁は、神の栄光を、また恵みをほめたたえます。

それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。
(エペソ 1・6)

それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえる者となるためです。
(エペソ 1・12)

聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。
(エペソ 1・14)

主は、6節では「万物の支配者である神（エホバ・エロヒム・シヤダイ）」と呼ばれています。偉大な万物の主である神として、主はアブラハムにご自身をあらわされ、全地の支配権を彼にお与えになると約束されました。黙示録19章においては、主なる神がこの時と同じ名前をもってご自身を現わしておられます。

神は、敵に対して全能であります。また、さばき主として全能であると同時に、救い主とし

でも全能であります。選ばれたイスラエルの民を、救われるお方です。

「全能」ということは、神が全地のすべての支配権を握っておられることを意味します。なにごとも神の意志なしに起こることはありません。この、全能者（パントクラトラ）という表現は、新約聖書の中で、次の十箇所にわたって記されています。

わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が
言われる。
(Ⅱコリント 6・18)

神である主、常にいますし、昔いますし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。
「わたしはアルファであり、オメガである。」
(黙示 1・8)

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いますし、常に
いますし、後に来られる方。
(黙示 4・8)

万物の支配者、常にいますし、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、
王となられたことを感謝します。
(黙示 11・17)

あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。主よ。万物の支配者である神よ。あ
なたの道は正しく、真実です。もろもろの民の王よ。
(黙示 15・3)

しかり。主よ。万物の支配者である神よ。あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。

(黙示 16・7)

彼らはしるしを行なう悪霊どもの霊である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。

(黙示 16・14)

ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。(黙示 19・6)

この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。

(黙示 19・15)

私は、この都の中に神殿を見なかった。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。

(黙示 21・22)

黙示録に多く出てくる神の名前は、「万物の支配者である神」です。

黙示録の筆者であるヨハネは、信仰のゆえにパトモス島に追放されていました。また、多くの信者が信仰のゆえに迫害され、殺されてきました。このような状況の中で、ヨハネは神を「万物の支配者である神」と呼んだのです。すなわち、神がすべてを支配し、すべての事柄の上に立つておられる、ということを示したのです。真の支配者は決して悪魔などではなく、ローマの皇帝でもなく、ただおひとり主なる神だけがすべてを支配し、世界の歴史を作っておられることを、明言したのです。

さて、「小羊の婚姻の時」は、人間の理解や想像をはるかに超えた、すばらしい時です。それについての詳しいことは、聖書の中には何も記載されていません。つまりそれは、人間のことはでは表現することができないほど、すばらしいときなのです。このとき、信者は永遠に主イエス様と一つにされるのです。この幸福に比べれば、他のどんな喜びもまったく取るに足りません。黙示録19章9節には、「これは神の真実のことばです。」とあります。主は私たちに、来るべきことについて確信を持つだけでなく、常にそのことを考え、喜ぶことを求めておられるのです。「これは神の真実のことばです。」という表現は、「多分そうなるでしょう。」という言い方は基本的に異なります。また、「これは神の真実のことばです。」という記述は、これらのことが事実であることを示しています。

私たちは、イエス様ご自身がこの約束を与えてくださったことを知っています。ですからそこには疑問の余地がまったくありません。イエス様ご自身が真理そのものですから、主のお約束も真実です。目に見える現実私たちが失望させるかもしれませんが、主のみことばは必ず成就し

ます。この確信が新しい献身へと人を導くのです。

愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの靈肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしうではありませんか。

(Ⅱコリント 7・1)

そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもつて御前に出られるように、励みなさい。

(Ⅱペテロ 3・14)

ヨハネは、この素晴らしい将来を神からの啓示として見ることを許されました。ヨハネは自分の見たことに圧倒されて、これらを示してくれた御使いの足もとにひれ伏そうとしたのです。

そこで、私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると、彼は私に言った。「いけません。私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じしもべです。神を拝みなさい。イエスのあかしは預言の靈です。」

(黙示 19・10)

そのときヨハネは、御使いがまことの神のしもべであることを知りました。なぜなら、御使いはヨハネの礼拝を受けようとしなかったからです。御使いは、「私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じしもべです。」と言いました。神だけがあがめられる

べきだと言ったのです。実際は、御使いと人間とは大きな違いがあります。しかしこの違いも、神の偉大さの前では取るに足りない小さなことにすぎません。神は、創造者としてすべてのものの上におられます。神の偉大さ、そして、神と人間との違いが、礼拝のもとをなしています。礼拝は神のみにささげられるべきものです。これが御使いの知らせでした。

イエス様は地上におられた時、トマスの礼拝を受けられたことがあります。トマスは、「わが主。わが神。」と言ってイエス様の足もとにひれ伏しました。イエス様はトマスを祝福されました。イエス様は神だったので、礼拝を受けられたのです。いかなる人間も、御使いも、創られたものも、決して礼拝を受けるべきでないのはもちろんのことです。

主なる神は、ひとり子をお与えになつて私たちを救つてくださり、みそば近く引き寄せてくださいました。イエス様を通して救いを完成されました。イエス様だけが、ただ一人の仲介者です。ですから、イエスだけが礼拝されるべきです。

ヨハネも御使いと共に礼拝へと導かれました。そればかりでなく、御使いと共に奉仕へと導かれたのです。奉仕とは、イエス様のあかしをすることです。イエス様は、あらゆる預言の中心におられるお方です。イエス様を真にあかしする人々はすべて預言者であり、真の預言者はすべてイエス様あかしする人々です。預言者もイエス様のあかし人も、共にそのことばと生活とを通して、イエス様の救いの偉大さをあかしするのです。

もし私たちが、人々の救いや信じる人々の成長を見たいと思うなら、みことばを中心に据えて福音を伝えなければなりません。イエス様が中心におられなければ、すべてのことが空しいので

す。聖書の中心はイエス様であり、聖霊はイエス様に栄光を帰すと言っておられます。ですから、預言者もあかし人も、伝道とあかしをするにあたっては必ずイエス様のみ声に聞き従っていないければなりません。そうすれば聖霊は、みことばを宣べ伝えることができるよう、助けてくださいます。

ヨハネは御使いから「神をあがめよ」という命令を受けました。そして、疑うことなく直ちにその通り実行しました。ヨハネはイエス様の足もとにひれ伏して心から礼拝しました。ヨハネに与えられたのと同じ命令が、私たちにも与えられています。「神をあがめなさい」。

主だけが礼拝を受けるにふさわしいお方です。イエス様は、ご自身のいのちを犠牲にして私たちを救ってくださいました。イエス様は、毎日私たちのために祈ってくださいます。イエス様はまもなく来られて、ご自分に属する者たちを迎えてくださいます。

私たちもその場にいることができるでしょうか。

もしその確信がないなら、どうか今日、罪人としてイエス様のもとにいらしてください。罪を告白し、赦しを受けてください。

また、イエス様の血による救いを確信している人々に申しあげます。イエス様は、あなたをあかし人として、預言者として、用いようとしておられます。イエス様は、あなたに語られたそのみことばを、さらに多くの人々に述べ伝えるよう望んでおられます。聖霊はあなたを満たし、イエス様は、あなたをさらに大きく祝福しようとしておられるのです。

私たちの希望は、小羊の婚姻の時に主イエス様と一つにされることです。

32 開かれた天

黙示録19章11節から16節まで

- 1 イエス様の再臨
- 1 ご降誕と再臨の違い
- 2 「忠実また真実」な方
- 3 さばき主として来られる
- 4 すべてを見通す方
- 5 王の王、主の主
- 6 すでに成就した救い
- 7 口の鋭い剣
- 2 イエス様につき従う軍勢
- 1 花嫁
- 2 約束の民
- 3 大いなる苦しみの時代の殉教者
- 4 天にある軍勢
- 3 イエス様の御名
- 1 ご自身のほか誰も知らない名
(イエス様の本質)
- 2 神のことは
(イエス様の權威)
- 3 王の王、主の主
(イエス様の使命)

また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実。」¹¹と呼ばれる方であり、義をもつてさばきをし、戦いをされる。¹²その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。¹³その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。¹⁴天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従つた。¹⁵この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもつて彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。¹⁶その着物にも、もにも、「王の王、主の主。」という名が書かれていた。

黙示録の11節から16節までを学んでいきましょう。この箇所では、次の三つのことが述べられています。「イエス様の現われ」、「さばき主として来られるイエス様」、「イエス様の地上への再臨」。

小羊の婚姻の後で、黙示録の筆者であるヨハネは開かれた天を見ました。

また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実。」と呼ばれる方であり、義をもつてさばきをし、戦いをされる。
(黙示 19・11)

聖書には、この他にも「開かれた天」について書かれた箇所があります。まず、イエス様が洗礼を受けられる時に、天が開けました。

こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」

(マタイ 3・16)

また、ステパノも、開かれた天を見たのです。

しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、こう言った。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」

(使徒 7・55、56)

そして、黙示録19章11節にも「開かれた天」が出てきます。開かれた天に現われるイエス様は、10節までにあるような「花嫁を迎える花婿として」ではなく、天の軍勢を率いた「さばき主として」、御国を打ち建てて来られるのです。

この時ヨハネは、開かれた天だけでなく、イエス様ご自身を見たのです。ヨハネにとって、「開かれた天」とは何を意味しているのでしょうか。イエス様がおられる場所です。イエス様ご自身を見ることによって、ヨハネは深い満足を得ました。

私たちもまた、目に見えないものを見る必要があります。生活の中で霊的な闘いにさらされる時、天におられるイエス様を仰ぎ見る必要があります。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたら

すからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

(Ⅱコリント 4・17～18)

聖書の多くの箇所において、さばきの前に悔い改めるよう、神が警告しておられます。しかし、その結果はどうだったでしょう。人々は悔い改めることなく、心は頑なで、神への汚しごとが世にあふれました。人々はますます増長し、神なしに生きるだけでなく、意識的に神に逆らい、この世のことだけを思い煩うようになっていきます。このときに、次のみことばが成就します。

苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けます。その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の———そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです。———感嘆的となられます。

(Ⅱテサロニケ 1・7～10)

マタイの福音書には「花婿が賢い乙女たちを迎えた後で戸がしめられた」と記されています。

……花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚禮の祝宴に行き、戸がしめられた。
(マタイ 25・10)

しかし、小羊の婚姻の後、扉は再び開かれます。イエス様が天の軍勢を伴って、さばきを行なうため、また、御国を建てられるために来られるのです。

アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」
(ユダ 14・15)

「人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかになつて、葉が出てくると、夏の近いことがわかります。」
(マタイ 24・31・32)

黙示録 1章7・8節に記されていることが、黙示録 19章において実現されるのです。

見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかし、アーメン。神である主、常にいまし、昔いまし、

後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」

(黙示 1・7・8)

では、黙示録19章11節から16節までを「イエス様の再臨」、「イエス様につき従う軍勢」、「イエス様の御名」、の三つに分けて見ていきましょう。

1 イエス様の再臨

黙示録19章11節から16節には、再び来られるイエス様について七つのことが記されています。

1 ご降誕と再臨の違い

黙示録19章11節によると、イエス様は「白い馬に乗って」来られます。

中東の人々にとっては、人が何の上に座っているかということ、大切な意味を持ちます。エゼキエル書に「君主たちは地面に座るように」と記されています。

海辺の君主たちはみな、その王座をおり、上着を脱ぎ、あや織りの着物を脱ぎ、恐れを身にまとい、地面にすわり、身震いしながら、おまえのことでおののき、おまえについて、

哀歌を唱えて言う。

(エゼキエル 26・16)

また、「淫婦が獣の上に乗る」という表現も黙示録で見ることができます。

それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。

(黙示 17・3)

そして、聖書の中には多くの所で、「神が雲の上に座しておられる」と記されています。

さて、イエス様は何に乗られるのでしょうか。イエス様は、エルサレムに入城されたときは、ろばに乗られました。

イエスは、ろばの子を見つけて、それに乗られた。それは次のように書かれているとおりであった。「恐れるな。シオンの娘。見よ。あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。」

(ヨハネ 12・14、15)

つまり、最初に地上に来られた時、イエス様は、人の姿をとってへりくだって来られました。しかし、再び来られる時には、栄光につつまれて来られます。かつてはみどりごととして来られましたが、再び来られる時には、馬に乗って来られます。かつては貧しい人の姿で来られましたが、富と栄光に満ちた方として来られます。また、かつては罪をになう犠牲の小羊として来られましたが、罪のさばき主として、獅子のように来られます。かつてはほふり場に引かれて行く小羊として来られましたが、再び来られるときには、勝利者として、また権威あるお方として来られます。

かつて黙示録6章2節で学んだ時には、白い馬に乗る「者」という表現は、サタンの使いを示していました。彼はあらゆる平和を破壊し、すべての者を迷わせます。彼は、ただ血を流すために戦争を起こします。これに対して、黙示録19章に出てくる白い馬に乗る「お方」は、真の平和の君です。人間は、誰一人として真の平和をもたらすことはできません。

白い馬に乗って戦いから帰ることは、その当時、最大の名誉でした。イエス様もまた、大きな戦いに勝利して帰られるのです。十字架の上で、罪のないイエス様が身代わりの死を遂げてくださったことにより、私たちは、罪の問題から解放されました。自分の罪を告白する者は、今も、恵みによって罪の赦しを受けることができます。

小羊は近づいて、御座にすわる方の右の手から、巻き物を受け取った。∴彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」∴彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」

(黙示 5・7、9、10、12)

主イエス様は、ご自身の前にひざまずこうとしない者たちに向かって、さばきを下されます。

2 「忠実また真実」な方

黙示録19章11節に記されているように、イエス様の本質は「忠実また真実。」です。「忠実で真実」という言葉は、ヘブライ語で「アーメン」といいます。十字架の勝利の後、イエス様はこの名前を持たれました。

アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。
(黙示3・14)

イエス様は、ご自分の忠実さを証明なさいました。イエス様は、黙示録6章に出てくる「白い馬に乗る者」——破壊と欺きとを行なう反キリスト者——と、はつきり対立しておられます。イエス様は完全に忠実で真実な方です。ですから、人は主イエス様に信頼することができます。イエス様は決して失望させることのないお方です。イエス様は真実で、見せかけや偽善がないお方です。イエス様のみことばと行ないは、常に真実です。私たちは、イエス様を通して真実に会おうのです。

この忠実さと真実とが、黙示録19章において、無限の力と結びついているのです。イエス様は忠実であり、真実であり、また現実におられる方です。今こそ、あなたの人生を、このイエス様の支配の中に委ねてください。もう一度言いますが、イエス様は決して失望させることのない方なのです。

3 さばき主として来られる

黙示録19章11節において、イエス様は「義をもってさばきをし、戦いをされる。」と記されています。イエス様は、約二千年前、「人類に救いをもたらすために」来てくださいました。

神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。
(ヨハネ 3・17)

そしてイエス様は、「人類のさばき主として」まもなく再びおいでになるのです。

「また、父はさばきを行なう権を子に与えられました。子は人の子だからです。」

(ヨハネ5・27)

救い主が、さばき主とされるのです。救い主イエス様を拒むなら、もはや永遠に、人類には何の救いも残されません。さばき主としてイエス様をお迎えするのは、世の終わりの時です。それは、人々にとって何の望みもない時となる、と記されています。与えられた救いを拒む人は、イエス様からさばかれます。罪の「赦し」を受けようとしなない人は、罪の「さばき」を受けられません。

義をもって戦うことができるのは、イエス様だけです。イエス様ご自身が、義なる方だからです。ですから、イエス様の戦いにおいて、神の義が明らかにされるのです。

4 すべてを見通す方

黙示録19章12節に、「目は燃える炎である」と記されています。その目は人間の心の奥底を見通す目です。イエス様の前には、隠し通されるものは何一つとしてありません。

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

(ヘブル 4・12)

イエス様はすべてを知っておられ、その力によってひとりひとりに判断を下されます。イエス様はすべてを知っておられるので、正しくさばくことがおできるになるのです。人間が知りうることは限られています。したがって、人間の下すさばきは、ゆがめられています。

「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。また、なぜあなたは、兄弟の目のちりに目をつけるが、自分の目のちりの中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。」

(マタイ 7・1〜5)

私たちが人のことを知りうる範囲は、ごく限られています。その人の性格、環境、内側に持っている問題、また外に表れた言動などの、ごく一部を知ることができるとは過ぎません。しかしイエス様は、人の思いと動機をすべて知っておられます。ですから、ダビデのように「主よ。私を探ってください。」と言う者は幸いです。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

(詩篇 139・23、24)

このダビデのように願ひ、悔い改める人は、主の恵みと愛を体験します。しかし、このような態度を取らない人々もいます。神に対し、また神の愛と語りかけに對して、目も見えず、耳も聞こえなくなっている人々です。その結果、逃れようのないさばきが下されるのです。

5 王の王、主の主

黙示録19章12節には、イエス様の権威について記されています。イエス様は、頭に「多くの王冠」をかぶっておられます。イエス様は戦うお方だけでなく、王の王でもあるのです。

黙示録12章において、竜(サタン)は七つの冠をかぶっています。

また、別のしるしが天に現われた。見よ。大きな赤い竜である。七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。

(黙示 12・3)

また、13章において、獸（反キリスト）は十の冠をかぶっています。

また私は見た。海から一匹の獸が上ってきた。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があった。
（黙示 13・1）

しかし、イエス様は、さらに多くの冠をかぶっておられます。なぜなら、イエス様は、王の王、主の主だからです。天においても地においても、すべての権力と栄光が、イエス様に授けられます。多くの冠は、あらゆる権力の所有を意味しています。このことによって私たちは、イエス様が全知全能の権威を持つておられることを知ります。イエス様はあらゆることにおいて、最大にして最高のお方です。

私たちは、イエス様が自分にとってただひとりの支配者であるかどうか、今改めて考えてみましょう。私たちは、自分の意志や感情、考えを捨てて、イエス様だけに信頼し、従っているでしょうか。私たちは、何によって支配され、影響され、導かれているのでしょうか。

6 すでに成就した救い

黙示録19章13節に、イエス様は「血に染まった衣を着ていて」と記されています。これは、イエス様の十字架の犠牲を示しています。14節によると、イエス様とともに来る軍勢は、雪のように白い衣を着ています。イエス様お一人だけが、血に染まった衣を着ておられるのです。十字

架上で、人々の罪を贖うための代価として血を流されたのは、イエス様お一人だからです。十字架につかれる前、イエス様はペテロに「あなたはわたしについて来ることができない」と語られました。

シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ。どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」
(ヨハネ 13・36)

白い馬に乗った方の衣は、天から下られるとき、すでに血に染まっていました。地上で碎かれたから血に染まったものではありません。イエス様の衣は、戦いを経て敵の血に染まったのでもありません。罪から人々を贖うため、十字架上でご自身が流された血によって染まったのです。まもなくさばきのために来られるお方は、小羊として十字架でほふられたお方なのです。

7 口の鋭い剣

黙示録19章15節に、イエス様の「口からは鋭い剣が出ていた」と記されています。私たちは、このことから、次の聖句を思い出します。

彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。
(黙示 2・27)

正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、
 □のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。
 (イザヤ 11・4)

これらのみことばが、黙示録19章において成就します。世界のさばき主が、悔い改めない者と戦われるのです。剣とは、手に持つて戦う武器ではなく、□の剣を指しています。

右手に七つの星を持ち、□からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。
 (黙示 1・16)

鋭い、両刃の剣を持つ方がこう言われる。「…悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの□の剣をもって彼らと戦おう。」

(黙示 2・12、16)

それは人間が武器をもってする戦いではなく、全能なるイエス様のみことばによるさばきです。神のみことばには二つの働きがあります。一つめの働きとして、ひとたび神のみことばが受け入れられると、それは新しいのちとなります。

「このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。」
 (ルカ 8・11)

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生

ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。(Ⅰペテロ 1・23)

しかし、みことばが受け入れられない場合、二つめの働きとして、そのみことばが神との分離を引き起こします。みことばに対する私たちの態度は、主なる神に対する私たちの態度でもありません。みことばを通しての神の恵みを受け入れない人々は、さばかれるのです。

彼らは、「ナザレ人イエスを。」と答えた。イエスは彼らに「それはわたしです。」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らといっしょに立っていた。イエスが彼らに、「それはわたしです。」と言われたとき、彼らはあどずさりし、そして地に倒れた。

(ヨハネ 18・5〜6)

信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。(ヘブル 11・3)

「わたしのことばは火のようではないか。また、岩を砕く金槌のようではないか。」

(エレミヤ 23・29)

ここまでは、黙示録19章に記されている「再臨されるイエス様」について学んできました。

2 イエス様につき従う軍勢

次に、14節にある「イエス様につき従う軍勢」について考えてみましょう。

イエス様は、再臨なさるときには、天から多くの軍勢を引き連れて来られます。携挙のときには、イエス様は雲の上までしか来られません。この世の人々は、イエス様の御姿を拝することができないのです。しかし19章でイエス様が再び来られる時には、イエス様は地上まで下られます。すべての人が、その目でイエス様を見るのです。

アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」
(ユダ 14、15)

再臨なさるイエス様につき従う軍勢とは、どのような人々なのでしょうか。

1 花嫁

再臨のイエス様とともにいる軍勢のうち、第一にあげられるのは、イエス様の「花嫁」と呼ばれる信者たちです。「救われた者は、イエス様と永遠にともにいる」という預言が成就した結果です。小羊の婚姻のとき以来、花嫁（救われた人々）が花婿（イエス様）から離されることはありません。二者の間に分離が生じることは永遠にないのです。救いの必要性を認め、自分の罪を

告白し、イエス様の救いに身を委ねたのがこれらの人々です。彼らについて、聖書は次のように言っています。

彼（小羊）とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。

（黙示 17・14）

今やこれらの人々は、イエス様の栄光にあずかっているのです。

あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。

（コロサイ 3・3〜4）

2 約束の民

再臨の主とともにいる軍勢には「花嫁」と呼ばれるイエス様の信者たちだけでなく、古くからの「約束の民」も含まれています。これらの民は、旧約聖書の時代に救われました。イエス様が救い主として来てくださる以前の民でしたが、神の恵みを信頼しきって、メシア（救い主）を待ち望んでいたのです。これらの人々は、神がメシアを遣わしてくださることを、堅く信じて待ち望みました。アブラハムのように神の約束を信じた人々だったのです。

アブラハムは、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信

じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。

(ローマ 4・20〜22)

モーセは、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかつたのです。信仰によって、彼は、王の怒りを恐れないで、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見るようにして、忍び通したからです。信仰によって、初子を滅ぼす者が彼らに触れることのないように、彼は過越と血の注ぎとを行ないました。

(ヘブル 11・25〜28)

3 大いなる苦しみの時代の殉教者

「大いなる苦しみの時代の殉教者たち」も、再臨の主とともにいる軍勢の中に含まれています。大いなる苦しみの時代に、多くの人々がイエス様のために命をささげます。この妥協のない態度と堅い信仰とが、主の再臨の時に報われるのです。彼らは白い衣を着せられて、王の王、主の主であるイエス様とともに、この地上に下って来るのです。

4 天にある軍勢

さらに「天にある軍勢」(14節)も再臨のイエス様につき従っています。

「そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲し

みながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。」（マタイ 24・30、31）

「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。」（マタイ 25・31）

「もしだれでも、わたしとわたしのことばとを恥と思うなら、人の子も、自分と父と聖なる御使いとの栄光を帯びて来るときには、そのような人のことを恥とします。」

（ルカ 9・26）

「天にある軍勢」は、白い馬に乗ってイエス様の後につき従います。この馬については、旧約聖書に次のように記されています。

こうして、彼らがお進みながら話していると、なんと、一台の火の戦車と火の馬とが現われ、このふたりの間を分け隔て、エリヤは、たつまきに乗って天へ上って行った。

（Ⅱ列王記 2・11）

そして、エリシャは祈って主に願った。「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにして

ください。」主がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシヤを取り巻いて山に満ちていた。
(Ⅱ列王記 6・17)

イエス様が「みからだである教会」、「旧約時代の信者たち」、「殉教者たち」、「天の御使いたち」とともに天から下って来られるとき、地上のすべての者は、イエス様が全地の支配者であることを知ります。この世はイエス様を見て、震えおののくのです。

3 イエス様の御名

最後に、「イエス様の御名」について考えてみましょう。黙示録19章11節から16節までには、三つの御名が記されています。これらの御名は、イエス様の「本質」と「権威」と「使命」を表わしています。

1 ご自身のほか誰も知らない名(イエス様の本質)

まず第一に、イエス様は「ご自身のほかだれも知らない名」をもっておられます。

その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。
(黙示 19・12)

黙示録3章にも、この御名について記されています。

勝利を得るものを、わたしの神の聖所の柱としよう。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上にわたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下つて来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書きしるす。

(黙示 3・12)

イエス様の中にある神の本質は、だれにも理解することができません。

「すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません。」

(マタイ 11・27)

神の子としてのイエス様の本質は、私たち人間の理解をはるかに超えています。イエス様は、神のひとり子でありながらこの世に下ってくださいました。しかし、イエス様が本来持つておられる神としての本質を私たちがうかがい知ることなどとうてい不可能です。私たちは、イエス様の愛を体験し、イエス様の救いを自分のものとし、イエス様の助けを経験することができます。しかし、「受肉」、つまり神が人となられたことについては、神秘であり、私たちの知力で理解することは決してできません。そして、これこそが、私たちの礼拝の根底となるのです。

2 神のことは (イエス様の権威)

第二に、イエス様の御名は、13節に「神のことば」と呼ばれています。

その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。

(黙示 19・13)

ユダヤ人たちにとって「ことば」とは、気軽に発せられる単語をさすのではなく、いったん口に出して語られると決定的な約束となる重さを持つものです。エサウは、いったん口に出してヤコブに長子の権利を譲った後に、これを撤回することはできませんでした。このように、「ことば」がひとたび語られると、そのことばは生き続けます。まして、そのことばが「神のことば」であれば、なおさらです。聖書の中で神が語られた「ことば」はすべて、厳然として立ち、未来永劫、ゆるぐことはありません。

神のすべての約束は、イエス様において成就します。「神のことば」が、イエス様においてすべて成就されるのです。

「神のことば」という名前には、さらに二つの意味があります。まず、「創造主としての神」の意味しています。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。……すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。

(ヨハネ 1・1、3)

なぜなら、万物は御子にあつて造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も權威も、すべて御子によつて造られたのです。万物は、御子によつて造られ、御子のために造られたのです。(コロサイ 1・16)

信仰によつて、私たちは、この世界が神のことはで造られたことを悟り、したがつて、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。(ヘブル11・3)

そして、神のことは、「救い主としての神」を意味しています。

ことは人となつて、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

(ヨハネ 1・14)

これらのみことばを通して、「創造者」、また「救い主」としての神の本質と力が啓示されています。イエス様はこの天地を創造されただけでなく、罪ある人々を救い出されました。ですからイエス様は、地を治める権利を二重にもつておられるのです。

「神のことは」は、イエス様から離れることはありません。なぜなら、「神のことは」は、イエス様そのものだからです。「神のことは」を正しく読むことは、イエス様に聞き、イエス様に従うことを意味します。

神の創造の「みことば」によって、この世界が生まれました。神の創造の「みことば」によって、今も人々は暗闇から光に、霊的な死から永遠のいのちへと呼び出されるのです。黙示録の著者であるヨハネは、この「神のことば」の力を体験した人でした。ヨハネは、イエス様によって罪の赦しを受け、イエス様に従いました。それ以来、「神のことば」はヨハネのすべてとなったのです。

やがて、恵みの時が去り、さばきが始まることは、聖書の「みことば」によって明らかです。ですから今、恵みの時代に、ヨハネが啓示された神の「ことば」である黙示録が、勝利、愛、恵みの「ことば」として語られ、述べ伝えられています。人間にとって「神のことば」を聞き、受け入れ、人々に述べ伝えることほど重要なことはありません。

3 王の王、主の主（イエス様の使命）

第三の御名は、「王の王、主の主」です。

その着物にも、ももにも、「王の王、主の主。」という名が書かれていた。

（黙示 19・16）

この御名によって「王の王、主の主」というイエス様の使命がわかります。イエス様の使命は、この世において神の王国を打ち建てることです。主の目的は、イエス様による完全な支配です。主を信じる私たちの中に現わされている神のご支配が、そのとき、全地の民の上に及ぼされるの

です。

しかし、その前に「さばき」が行なわれなければなりません。この「さばき」は、「我々はイエスの支配など受けたくない」と言っているすべての人々に下されます。このような人々すべての頑なさが打ち碎かれるのです。イエス様は、鉄の杖をもって全地を治められます。

この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。

(黙示 19・15)

地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者と共に逆らう。「さあ、彼らのかせを打ち碎き、彼らの網を、解き捨てよう。」

(詩篇 2・2〜3)

血に報いる方は、彼らを心に留め、貧しい者の叫びをお忘れにならない。(詩篇9・12)

以上、見てきたように、イエス様は三つ御名をもっておられます。ここで簡単にまとめておきましょう。

まず、「イエス様ご自身のほか誰も知らない名」です。これは、イエス様と神との一致を示しています。イエス様は、永遠から永遠に至る神であると同時に、人の子でもあります。このこと

は、私たちの理解を超えています。

次に、「神のことば」。この御名は、イエス様が創造者であり、救い主であることを意味しています。

そして、「王の王、主の主」。イエス様には初めがなく、終わりがなく、永遠なるお方です。イエス様は、王の王、主の主として永遠に支配されるのです。

33

ハルマゲドンにおける戦いとさばき

黙示録19章17節から21節まで

七つの問い

- 1 戦いの時期
- 2 戦いの場所
- 3 戦いに参加する者たち
- 4 戦いの目的
- 5 さばきの現われ
- 6 さばきの対象
- 7 二つの宴会

黙示録19章17〜21節の主題は、「ハルマゲドンにおける戦いとさばき」です。この戦いは、言うまでもなく、「反キリスト」と「にせ預言者」に対する主の戦いです。そして、主は圧倒的に勝利されます。

黙示録17章から18章まで、終わりの時代に「不品行な女」である巨大な教会組織が、主によってさばかれる様子を見てきました。19章17節以降では、「反キリスト」と「にせ預言者」がたくらむ「世界征服」に対する主の戦いが行なわれます。

¹⁷ また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。「さあ、神の大宴会に集まり、王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬とそれに乗る者の肉、すべての自由人と奴隷、小さい者と大きい者の肉を食べよ。」

¹⁹ また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。²⁰ すると、獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拜む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたまままで投げ込まれた。

²¹ 残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。

(黙示 19・17〜21)

「反キリスト」と「にせ預言者」の特徴は、神を認めない頑なさ、イエス・キリストに対す

る憎しみです。悪魔は、この世に対するさばきの時が近づいたことを知ります。このため、大きな戦いに備えて、自らに仕える者たちを呼び集めます。この戦いについては、黙示録の次の箇所
で、すでに学びました。

そこで御使いは地にかまを入れ、地のおどろを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。 (黙示 14・19、20)

また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるような汚れた霊どもが三つ出てくるのを見た。彼らはしるしを行なう悪霊どもの霊である。彼らは全世界の王たちのところに出ていく。万物の支配者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。……こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。 (黙示 16・13、14、16)

あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獣とともに、一時だけ王の権威を受けます。この者どもは心一つにしており、自分たちの力と権威とをその獣に与えます。この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召

された者、選ばれた者、忠実な者だからです。

(黙示 17・12～14)

では、ハルマゲドンの戦いとさばきについて、七つの問いについて学んでいきましょう。

1 戦いの時期

この戦いは、「いつ」起こるのでしょうか。

黙示録11章ですでに学んだ通り、反キリストは七年の間、この世を支配します。反キリスト支配下の最後の三年半は、大きな苦難の時となります。戦いが始まるのは、この苦難が去った後です。イエス様が義と平和の国を打ち建てられる前の、最後の戦いです。

それでは、「ハルマゲドン」という言葉の意味をみましょう。「ハル」とは「山」や「丘」を意味し、「メギッド」は「踏みにつられ、殺され、捨てられる」ことを意味します。この言葉は、しばしば「絶望の山」と訳されます。また、「上からの崩壊」と訳すこともできます。

2 戦いの場所

この戦いは、「どこで」行なわれるのでしょうか。

ハルマゲドンは、カルメル山のふもとにある広い場所であると言われています。この平野は、長さ35キロメートル、幅25キロメートルあります。ここはかつて、ヨシユアがアマレク人を打ち破った場所です。

さて、エルサレムの王アドニ・ツエデクは、ヨシユアがアイを攻め取って、それを聖絶し、先にエリコとその王にしたようにアイとその王にもしたと、またギブオンの住民がイスラエルと和を講じて、彼らの中にいることを聞き、大いに恐れた。それは、ギブオンが大きな町であつて、王国の都の一つのようであり、またアイよりも大きくて、その人々はみな勇士たちであつたからである。それで、エルサレムの王アドニ・ツエデクは、ヘブロン^の王ホハム、ヤルムテの王ピルアム、ラキシユの王ヤフィア、エグロンの王デビルに使いをやつて言つた。「私のところの上つて来て、私を助けてください。私たちはギブオンを打ちましょう。ギブオンがヨシユア、イスラエル人と和を講じたから。」それで、エモリ人の五人の王たち、エルサレムの王、ヘブロン^の王、ヤルムテの王、ラキシユの王、エグロン^の王とその全陣営は、相集まり、上つて行つて、ギブオンに向かつて陣を敷き、それを攻めて戦つた。ギブオンの人々は、ギルガルの陣営のヨシユアのところ^に使いをやつて言つた。「あなたのしもべどもからあなたの手を引かないで、早く、私たちのところ^に上つて来て私たちを救い、助けてください。山地に住むエモリ人の王たちがみな集まつて、私たちに向かつているからです。」そこでヨシユアは、すべての戦う民と、すべての勇士たちとを率いて、ギルガルから上つて行つた。主はヨシユアに仰せられた。「彼らを恐れてはならない。わたしが彼らをあなたの手に渡したからだ。彼らのうち、ひとりとしてあなたの前に立ち向かうことのできる者はいない。」それで、ヨシユアは夜通しギルガルから上つて行つて、突然彼らを襲つた。主が彼らをイスラエルの前にかき乱したので、イスラ

エルはギブオンで彼らを激しく打ち殺し、ベテ・ホロンの上り坂を通つて彼らを追い、アゼカとマケダまで行つて彼らを打った。

(ヨシユア 10・1-10)

また、士師記7章において、ギデオオンがミデヤン人を打ち破つた場所でもあります。さらに、ヨシヤが死んだのも、この場所です。

そこで、家来たちは彼を戦車から降ろし、彼の持っていた第二の車に乗せた。そして、彼をエルサレムに連れ帰つた。彼は死んだので、その先祖たちの墓に葬られた。全ユダとエルサレムはヨシヤのために喪に服した。

(Ⅱ歴代誌 35・24)

最後の戦いは、イスラエルの全地で行われますが、その戦いの中心地が、ハルマゲドンなのです。

3 戦いに参加する者たち

この戦いには、「どのような人々が」参加するのでしょうか。

この地上のすべての軍勢が集められるのです。

ゼカリヤ書には、全地の民がエルサレムに集められることが記されています。

その日、わたしはエルサレムを、すべての国々の民にとって重い石とする。すべてそれをつぐ者は、ひどく傷を受ける。地のすべての国々は、それに向かつて集まって来よう。

(ゼカリヤ 12・3)

反キリストは、ヨーロッパ、北米、中南米、アフリカ、アラブ、ロシア、中国、インド、アジアなど世界中の軍事力を結集してエルサレムに向かつてきます。世界最大の軍勢が、キリストとユダヤ人とに戦いを挑んで集結するのです。

彼らは、あなたの民に対して悪賢いばかりごとを巡らし、あなたのかくまわれる者たちに悪だくみをしています。彼らは言っています。「さあ、彼らの国を消し去って、イスラエルの名がもはや覚えられないようにしよう。」彼らは心を一つにして悪だくみをし、あなたに逆らって、契約を結んでいます。

(詩篇 83・3〜5)

4 戦いの目的

「なぜ」、この戦いが行われるのでしょうか。

悪魔は、キリストがまもなく来られて地上を支配されることを知っています。ですから、神のご計画を妨げるため、あらゆることを試みます。

また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた霊どもが三つ出てくるのを見た。彼らはしるしを行なう悪霊どもの霊である。彼らは全世界の王たちのところに出ていく。万物の支配者である神の大きいなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。

(黙示 16・13〜14)

悪魔はキリストに対する憎しみに燃え、その攻撃対象としてユダヤ人を選びます。各国の司令官たちは、ともに集まって戦略を練ります。しかし彼らは、神のさばきのご計画により軍隊がそこに集められたということには、気づいていません。そして恐るべきさばきが彼らに下されるのです。イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書などにおいて、預言者たちは、このさばきがどのようなものであるかを詳細に描いています。ハルマゲドンのさばきは、一日で終わるではありません。

かつて、殉教者たちが、この日を待ち望んでいたことが、黙示録に示されています。

彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行なわず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」
(黙示 6・10)

ついに、その日が来ます。

5 さばきの現われ

このさばきは「どのようにして」現われるのでしょうか。
まず、自然の万象にさばきのしるしが現われます。

恐怖と、戦慄が、この国のうちにある。

(エレミヤ 5・30)

太陽も月も暗くなり、星もその光を失う。

(ヨエル 3・15)

闇がこの世を覆います。また天と地が揺り動かされます。

主はシオンから叫び、エルサレムから声を出される。天も地も震える。だが、主は、その民の避け所、イスラエルの子らのとりでである。

(ヨエル 3・16)

そして、日と月と星には、前兆が現われ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥って悩み、人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。

(ルカ 21・25～27)

大きな地震も起こります。

その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリブ山の上に立つ。オリブ山は、その真中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。山々の谷がアツアルにまで達するので、あなたがたは、わたしの山々の谷に逃げよう。ユダの王ウジヤの時、地震を避けて逃げたように、あなたがたは逃げよう。私の神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。(ゼカリヤ 14・4～5)

ソドムとゴモラとに天から火が下ったように、ハルマゲドンの戦いにおいても、天から火や雹

が下ります。

「わたしは疫病と流血で彼に罰を下し、彼と、彼の部隊と、彼の率いる多くの国々の民の上に、豪雨や雹や火や硫黄を降り注がせる。」
(エゼキエル 38・22)

また、一タラントほどの大きな雹が、人々の上に天から降って来た。人々は、この雹の災害のため、神にけがしごとを言った。その災害が非常に激しかったからである。

(黙示 16・21)

疫病がまきちらされます。

主は、エルサレムを攻めに来るすべての国々の民にこの災害を加えられる。彼らの肉をまだ足で立っているうちに腐らせる。彼らの目はまぶたの中で腐り、彼らの舌は口の中で腐る。
(ゼカリヤ 14・12)

人々は互いに殺しあいます。

「わたしは剣を呼び寄せて、わたしのすべての山々でゴグを攻めさせる。——神である主の御告げ。——彼らは剣で同士打ちをするようになる。」
(エゼキエル 38・21)

恐るべき戦いの背後には、厳然として、神の支配があります。

すべてのさばきは、罪に対するさばきです。主なる神は、ご自身の聖さのゆえに、さばかざるをえません。主なる神は、ご自身の王国を打ち建てられる前に、地上を聖められます。そしてこれらのさばきは、主なる神のみことばにしたがって下されるのです。

ハルマゲドンの戦いは、神に敵対するすべての者の完全な滅びを意味しています。18節にあるとおり、空の鳥は彼らの肉を飽きるほど食べることとなります。神とキリストなしにこの地上を欲望のパラダイスに作り変えようとした、すべての人間の努力は、空しくされます。人は蒔いたものを刈り取らなければならないのです。

6 さばきの対象

「誰の上に」さばきが下るのでしょうか。

言うまでもなく、さばきは「反キリスト」と「にせ預言者」に下されます。反キリストの権力の頂点に立つ者は、世界的な独裁者です。この独裁者は、にせ預言者の力によって、世界的な独裁者となったのです。

さて、反キリストとキリストとの戦いは、実際に始まってみると、すぐに終わってしまいました。というのは、イエス様が天の軍勢とともに下られるとき、すべての者が驚きのあまり身動きもできなくなるからです。反キリストの力も、再臨されるイエス様の前にはまったく無力です。イエス様は十字架の上で、悪魔と悪魔の軍勢に対して永遠に完全な勝利をおさめられました。そして、ハルマゲドンにおいては、その十字架の勝利が明らかにされます。

反キリストとにせ預言者とは、永遠の滅びに投げ込まれます。かつて旧約の時代、エノクとエリカは死を見ることなく天に上げられたとあります。これに対し、反キリストとにせ預言者は、生きたまま地獄に閉じ込められるのです。

最後の審判の時が来ても、反キリストとにせ預言者は、さばきの御座の前に現れることさえできません。二人は永遠に滅びの中に投げ込まれたからです。

7 二つの宴会

私たちは、「いかなる宴会に」招かれているのでしょうか。

黙示録19章では、はじめに「小羊の婚姻」について述べられています。9節にある「小羊の婚姻」については、そのすばらしい瞬間を言葉では表現できないので、ほとんど説明がなされていません。

いかなる罪人も、悔い改めてイエス様のみもとに来るなら、罪の赦しを受けます。イエス様のみもとに来てはじめて、人間は罪の赦しと永遠のいのちの確信を得ることができます。それと同時に、この「小羊の婚姻」にあずかる希望も与えられます。

しかし、イエス様を受け入れない人々は、神の「さばきの宴会」にあずかることとなります。

また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。「さあ、神の大宴会に集まり…。」

(黙示 19・17)

「神の大宴会」とは、ハルマゲドンの恐ろしいさばきにあうことを意味しています。イエス様に反抗する人々は最も愚かな人々です。反抗する人々、悔い改めをしようとしないう人々はすべて、滅びに終わるのです。

イエス様は、「わたしのところに来る者を、私は決して捨てない。」と言っておられます。イエス様のもとに来て、イエス様に受け入れられる者は、イエス様の婚姻に招かれます。

私たちは「小羊の婚宴」に招かれていますでしょうか。あるいは、「さばきの大宴会」に招かれていますでしょうか。いま、私たち自身の決心が問われています。私たちは決然として、イエス様の勝利の側に立つようではありませんか。

今日の科学と技術の世界は、いざれ神のさばきの下に入ります。しかし、そのさばきは、世界の滅亡ではなく、むしろ世界の聖めを意味しています。したがって、最後のさばきの意味するところは、最後の聖めです。さばきを通して聖められるのです。このさばき、すなわち聖めの後に、神の国が実現するのです。

34 サタンの影響の排除

黙示録20章1節から3節まで

- 1 縛られるサタン
 - 1 誰がサタンを縛るのか
 - 2 縛られるものの名前
 - 3 なぜサタンが縛られるのか
- 2 神の国の建設
 - 1 神の国とは何か
 - 2 神の国の基礎は何か
 - 3 神の国の建設はなぜ必要なのか

また私は¹、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から下って来るのを見た。彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛って、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放さなければならぬ。

(黙示 20・1-3)

1 縛られるサタン

この個所では「サタンの影響の排除」が主題となっていますが、その内容は「サタンが束縛されること」と「キリストの御国の建設」の二つに分けられています。

主イエス様はまもなく天に上られたときと同じ御姿をもって、再び地上に来てくださいます。その時はすべての人にわかるような姿で来てくださいます。しかし、主イエス様が再臨なさる前に、大きなさばきが来てこの世の悪を洗いきよめることをこれまで私たちは学んできました。黙示録18章では、悪の中心である「バビロン」がさばかれること、そして19章では、この地上を支配する「反キリスト」と「偽預言者」がさばかれることを見ってきました。反キリストと偽預言者は、生きたまま地獄に投げ込まれます。また、ハルマゲドンの戦いのために集められた大軍勢もさばかれます。

これから私たちが学ぼうとしている20章1節から3節には、サタンの束縛について記されています。聖書を見ると、サタンはもともと、「いと高き御使い」だったので、ごう慢になり神

に反抗したため神の怒りにあって、神にもっとも近い臨在の場から追放されてしまい、その時から「目に見える世界の君」となったことがわかります。このサタンは現在はおお、神に近づくとが許され、信者を訴えることができます。しかし教会の携拳の後、つまり大艱難が襲ってくるときに、サタンは神の臨在の場から追放され、もはや神に近づくことができなくなります。ところがそのような状態にあってもなお、サタンは反キリストや偽預言者を通して人間に影響力を及ぼそうと必死になるのです。そして、主イエス様が目に見える形をとって再臨してくださるとき、ついにサタンは束縛され、活動の自由を奪われます。

ここで「サタンの束縛」についての三つの問いを考えてみましょう。

第一の問いは「誰がサタンを束縛するのか」、第二の問いは「誰が束縛されるのか」、第三は「どうして束縛されるのか」というものです。

先ず、「誰がサタンを束縛するのか」という問いから始めましょう。

1 誰がサタンを縛るのか

2節には、神に仕える「御使い」がサタンを縛ることが示されています。サタンに対する勝利は、イエス様の十字架によって実現されました。ですから、イエス様ご自身でなくとも、御使いがサタンを束縛することができますようになったのです。

このとき、六つの段階を通じてサタンは完全に縛られます。第一段階で、地上に投げ込まれたサタンを御使いが「捕え」ます。第二段階で、サタンは「千年間縛」られ、自由を奪われた状態

になります。第三段階で、鎖につながれたままのサタンを御使いが「底知れぬ所に投げ込」み、第四段階で、御使いは「そこを閉じ」、かぎを閉めてしまいます。さらに第五段階で御使いがその上に「封印をして」しまいます。つまり、サタンは縛られ、閉じ込められ、封印された「底知れぬ所」の中でじっとしていなければならなくなるのです。もはや、サタンは世界に対していかなる影響力も發揮できない状態におかれます。しかし、千年経つた後に、第六段階として、しばらくの間、御使いはサタンを自由にしてやります。

サタンは「鎖につながれた神の犬」とも呼ばれています。その意味は、サタンは「目に見える世界の君」ではあっても、自分のしたいことが何でもできるという訳ではなく、ただ神の許された範囲内で限られたことしかできないということです。サタンは実際は束縛されているのですが、それにもかかわらずあなたも自分のしたいことは何でもできるかのようにさまざまなことをして見せます。今もお、サタンはほえたける獅子のように、また光の天使のように振る舞い、信仰者たちを惑わしたり訴えたりしようと必死になっています。

サタンはアダムとエバをだまし、ヨブを訴え、ダビデ王に対しては神によって厳しく戒められていたにもかかわらず民の数を数えるよう誘惑しました。

主イエス様が再臨なさるとき、サタンは鎖をさらにたぐり寄せられて、それまで鎖の届く範囲内では許されていた行動の自由も奪われます。そして千年の間、サタンは底知れぬ所に投げ込まれます。この底知れぬ所については、以前、聖書の次の箇所から学びました。

その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空

も、この穴の煙によって暗くなった。

(黙示 9・2)

彼らは、底知れぬ所の御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル語でアバドンとい
い、ギリシヤ語でアポリュオンという。

(黙示 9・11)

そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、
彼らを殺す。

(黙示 11・7)

あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来
ます。

(黙示 17・8)

主イエス様が地上で悪霊を追い出したとき、悪霊は底知れぬ所に自分を投げ込まないようと、
イエス様に泣いて叫びました。

悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願った。

(ルカ 8・31)

底知れぬ所には、さばきの時まで閉じ込められている御使いたち、つまり悪霊となった御使い
たちがいます。

神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。

(Ⅱペテロ 2・4)

また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。

(ユダ 6)

次に第二の問いに移ることにしましょう。

2 縛られるものの名前

ここで縛られるのはサタンです。そのサタンが、どんな名で呼ばれているかを見てください。サタンは人間が誕生して以来、人類の敵そのものでした。このサタンは聖書中でいろいろな呼び名を与えられて出てきますが、そのさまざまな名前はサタンの「本質」をよく表わしています。そのうち四つの名前が20章2節に出てきます。

第一の名前は「古い蛇」です。創世記3章を見るとわかりますが、蛇の特徴は「人を欺く才能」にあります。サタンはいつも人間を神から引き離そうと試みます。その結果は、反抗、高ぶり、反乱などです。蛇であるサタンは上手に人をだまして誘惑します。

第二の名前は「悪魔」です。サタンは始めに人間を「だまして」罪に至らせ、そのあとで罪を

犯した人間を訴えます。それによって人間を混乱させ、すべてをめちゃくちゃにさせようとしません。

第三の名前は「サタン」です。サタンは神によって愛されている人々を「憎み」ます。サタンはイエス様の十字架による救いのご計画をだめにしようとしようと必死になって働いています。サタンである悪魔は、いつも神と正反対のことをしようとしします。

第四の名前は「竜」です。竜の特徴は「滅ぼす力」です。竜はイエス様の体である教会を焼き尽くし、飲み尽くそうとします。竜は人を脅したり、殺害したりします。サタンは最初から「殺人者」、「人殺し」と呼ばれています。

では最後に第三の問いを考えてみましょう。

3 なぜサタンが縛られるのか

何千年もの間、サタンは全人類をだまし、惑わし、混乱させ、錯覚に陥らせてきました。また脅したり、殺したりもしてきました、神に反抗するよう仕向けたりもしてきました。人間はいつもサタンの嘘を信じ、神を無視して、神なしで自分の知恵や力によって、よりよい世界を築き上げようと努力して来ました。サタンは世界中の政治家たちを惑わし、戦争などの「力」によって、政治・経済・社会の問題を解決することができると思ひ込ませ、実際多くの戦争が引き起こされて来ました。さらにサタンは「よりよい教育」、「よりよい社会構造」、「新しい宗教」こそが、もっとすばらしい世の中を築きあげていくと人間に信じ込ませました。

サタンが縛られる理由は「千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのない」（黙示 20・3）ようにするためです。人類が欺かれることのないようにサタンが縛られてはじめて、約束された国、平和と真の正義が実現の可能性を持ちます。これこそが、サタンが縛られる理由です。

では次にイエス・キリストによる「神の国の建設」について見てみましょう。

2 神の国の建設

サタンは神の権威に徹底的に反抗する「敵対者」です。しかし、そのサタンが縛られたあととは、世界には神の権威だけが存在するようになります。これについて、第一に「神の国とは何か」、第二に「神の国の基礎は何か」、第三に「なぜ神の国の建設が必要なのか」ということを、ごいっしょに考えてみましょう。

1 神の国とは何か

まず「イエス・キリストの国とは何か」という問いから始めることにしましょう。「イエス・キリストの国」は、多くの人々によって「千年王国」と呼ばれています。千年という数字は、黙示録 20 章 1 節から 6 節までに五回出てきます。そこで「イエス・キリストの国」とは、まさにこの「地上」において「千年の間」、イエス・キリストを自分の主と信じる者たちが支配する国であることがわかります。

しかしこの「千年王国」については、それが聖書の中で明記されていない以上、現実には起こりえないと主張する人もいます。しかしそのような解釈は正しくありません。確かに「千年王国」という言葉そのものは聖書の中で見つけられませんが、イエス様が約束された「平和の国が千年間続く」ということは、聖書の中にはつきりと書かれています。同じように、例えば「三位一体」という表現も、その言葉それ自体は聖書の中に見当たりません。しかし、父なる神と御子イエスと聖霊という三つの人格が一つに統一されているという事実は聖書がはつきりと語っていることです。同じように「身代わり」という言葉にしても、それ自体は聖書の中で使われていませんが、御子イエス・キリストが全人類の身代わりとして十字架にかかってくださり、全人類の罪を贖ってくださったことは、歴然たる事実であり、このことを疑うキリスト者はいないはずで

また、「受肉」という特殊な用語も聖書の中には出てきませんが、それにもかかわらず、永遠なる神が御子イエス・キリストを通して「人間」の形をとってくださって、そこに神性と人間性が統一されたことは明らかです。

主イエス様の国は必ず到来し、主イエス様ご自身が建設なさり、王となられることは聖書の中の約束です。

2 神の国の基礎は何か

第二の問いは、この「イエス・キリストの国」の聖書的な土台は何かということですが、それはまず、旧約聖書の中に示されています。黙示録はもともと、「イエス・キリストの身体」である

教会への預言です。一方旧約聖書は、当時の預言者たちが「イスラエルの民」を中心とした「神の国」の約束を預言したものにほかなりません。この「キリストの国とその意義」は、神を信じるユダヤ人にとって旧約聖書の中で最も大事なものの一つとして預言されています。「メシヤ」なる「救世主」が将来必ずいらつしやるということ、そして、そのメシヤが神の国を建設し、ダビデの座に着くことは、旧約聖書の中ではっきりと約束されています。旧約聖書の預言者のほとんどすべてが、この「神の国の建設」をはっきりと予言しています。

さて、聖書が約束している「神の国」には三つの特徴があります。

第一の特徴は、王の王であるイエス様がダビデの座に着くということです。神の座は天上にあります。ダビデの座は地上にあります。ですから、キリストの国は「地上」にあるということです。

見よ。その日が来る。——主の御告げ。——その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行なう。その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、『主は私たちの正義。』と呼ばれよう。

(エレミヤ 23・5、6)

その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。

(ルカ 1・32)

第二の特徴は、「イスラエルの民」がキリストの国の中心を占めるといふことです。イスラエルは、世界の国々の避難所ともなります。

起きよ。光を放て。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に輝いているからだ。見よ。やみが地をおおい、暗やみが諸国の民をおおっている。しかし、あなたの上には主が輝き、その栄光があなたの上に現われる。国々はあなたの光のうちに歩み、王たちはあなたに輝きに照らされて歩む。目を上げて、あたりを見よ。彼らはみな集まって、あなたのもとに来る。あなたの息子たちは遠くから来、娘たちはわきに抱かれて来る。そのとき、あなたはこれを見て、晴れやかになり、心は震えて、喜ぶ。海の富はあなたのところに移され、国々の財宝はあなたのものとなるからだ。

(イザヤ 60・1-5)

あなたの門はいつも開かれ、昼も夜も閉じられない。国々の財宝があなたのところへ運ばれ、その王たちが導かれて来るためである。

(イザヤ 60・11)

第三の特徴は、その実現こそ、世界中の人々のあこがれに他ならないといふことです。実は、イスラエルだけでなく、その他のどの民族にもこの地上に神の国を建設するといふ憧れはありましたし、それを予感させる時代は「黄金時代」と呼ばれたりして来しました。私たちは哲学や宗教、政治、文学などの中に、そのような理想を見いだすことができます。しかし、これらの考えの源はみな聖書からきていると言えるのです。

終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かつて剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。

(イザヤ 2・1〜4)

エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによつてさばかず、その耳の聞くとこよによつて判決を下さず、正義をもつて寄るべのない者をさばき、公正をもつて国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。正義はその腰の帯となり、真実はその胸の帯となる。狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追つていく。雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れた子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。

(イザヤ 11・1〜9)

キリストの国、つまりキリストの支配される国は平和と正義と豊かさの国です。

千年王国については、もっぱら旧約聖書だけが語っているのではなく、もちろん新約聖書もそれを証しています。主イエス様が弟子たちに「御国が来ますように。」(マタイ6・10)と祈るように教えられたことも、その一つの例です。そしてそれに続く「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」という祈りは、神の国が地上においても実現することを表しています。

しかし、なぜ新約よりも旧約聖書の方にこれほど多く出てくるのでしょうか。黙示録というのは、そもそもイエス様の「身体なる教会」の預言的な書物です。新約聖書ではその中心テーマは「教会」です。したがって新約聖書は、先ず「永遠のいのち」、「福音」といった目には見えない世界のことながら強調しています。ですから新約聖書は千年王国についての詳しい説明を行なっていないのです。これに対して旧約聖書では、地上におけるイスラエルの民の将来、そしてまた諸国の民の将来について強調しています。しかし、旧約聖書ではまだ十分に説明し尽くされていない部分があり、それがヨハネの黙示録によって補われています。例えば「神の国が地上に存続する期間」、「サタンの束縛」、「千年王国前にある復活と千年王国後にある復活」、「神と対決するサタンの最後の抵抗」、「宇宙の没落」、「最後の審判」などについては黙示録に詳細に記されています。

3 神の国の建設はなぜ必要なのか

最後に、神の国の必要性、つまり、「なぜ神の国が建設されなければならないか」について学びましょう。旧約聖書は、「神の国」について繰り返し何度も語っています。しかし、まだ、多くの約束が果たされていないのです。

あなたの神、主は、あなたを捕われの身から帰らせ、あなたをあわれみ、あなたの神、主がそこへ散らしたすべての国々の民の中から、あなたを再び、集める。たとい、あなたが、天の果てに追いやられていても、あなたの神、主は、そこからあなたを集め、そこからあなたを連れ戻す。

(申命記 30・3～4)

恵みとまこととは、互いに出会い、義と平和とは、互いに口づけしています。まことは地から生えいで、義は天から見おろしています。まことに、主は、良いものを下さるので、私たちの国は、その産物を生じます。義は、主の御前に先立って行き、主の足跡を道とします。

(詩篇 85・10～13)

他にも多くの聖句を見ることができます。次の箇所をあげておきますので、お読みになることをおすすめします。

(イザヤ 12) (イザヤ 24・21～27) (イザヤ 25・6～9) (イザヤ 32) (イザヤ 35) (イザヤ 49) (イザヤ 52) (イザヤ 54) (イザヤ 55) (イザヤ 56) (イザヤ 59・16～21) (イザ

ヤ 60 (イザヤ 65・17 (25) (イザヤ 66・10 (24) (エレミヤ 16・14 (21) (エレミ
 ヤ 29・14) (エレミヤ 30) (エレミヤ 31) (エレミヤ 32・36 (44) (エレミヤ 33) (エゼ
 キエル 36) (エゼキエル 37・21 (28)

この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされるこ
 とがなく、その国は他の民に渡されず、かえてこれらの国々をことごとく打ち砕いて、
 絶滅してしまいます。しかし、この国は永遠に立ち続けます。 (ダニエル 2・44)

私がまた、夜の幻を見てみると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年
 を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、
 諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、
 過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。私、ダニエルの心は、私のうちで悩み、
 頭に浮かんだ幻は、私を脅かした。私は、かたわらに立つ者のひとり近づき、このこと
 のすべてについて、彼に願って確かめようとした。すると彼は、私に答え、そのことの解
 き明かしを知らせてくれた。『これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。
 しかし、いと高き方の聖徒たちが、国を受け継ぎ、永遠に、その国を保って世々限りなく
 続く。』 (ダニエル 7・13 (18))

(ホセア 2・14、23) (ホセア 3・4、5) (ヨエル 2・18、27) (ヨエル 3) (アモス 9・11、15) (オバデヤ 17、21) (ミカ 4) (ゼパニヤ 3・9、20) (ハガイ 2) (ゼカリヤ 2・4、13) (ゼカリヤ 10) (マラキ 3・4)

神の御心はこの地上に楽園を建設することです。ところが、現実はどうでしょうか。この世には憎しみ、戦争、悩み、墮落などが山のように満ちあふれているのが実情です。もしも千年王国がなかったならば、サタンは勝利をおさめることになるでしょう。しかし神のご計画は、この世を消滅させることではなく、清めることです。そしてこの清めの後で、イエス様はご自分の支配のもとで、この世界がまったく新しく造りかえられる様を示してくださいさるでしょう。

次の約束はこの地上に対して与えられたものです。

国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに任せ、服従する。
(ダニエル 7・27)

あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。
(黙示 5・9、10)

この地上におけるイエス様のご支配は、天上において続けられ、そのご支配は「永遠」です。

イエス様のご支配を通して世界的な武装解除が成就され、血が流されることはなくなり、こうして初めて、「真の平和」が実現されます。

主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。

(イザヤ 2・4)

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

(イザヤ 9・6、7)

そこでは、「愛」そのものが、政治や経済の上位に立つて治めるようになります。自分の利益だけを追求する考えや行ないはなくなり、もしそのようなことが行なわれたら厳しく罰せられるようになります。

イスラエルの民はもはや呪われた民ではなく、祝福された民となります。なぜなら、イスラエルの民はイエス・キリストを「メシヤ」、つまり「救い主」として受け入れるからです。主に選ばれた民イスラエルは祝福をもたらすものとなり、全世界に福音を伝える民族と変えられます。

イスラエルの中央、エルサレムには新しい宮が建設され、そこで主イエス様がご支配なさるようになります。

「ユダの家よ。イスラエルの家よ。あなたがたは諸国の民の間でのろいとなつたが、そのように、わたしはあなたがたを救つて、祝福とならせる。恐れるな。勇気を出せ。……多くの国々の民、強い国々がエルサレムで万軍の主を尋ね求め、主の恵みを請うために来よう。」

(ゼカリヤ 8・13、22)

「わたしはイスラエルには露のようになる。彼はゆりのように花咲き、ポプラのように根を張る。その若枝は伸び、その美しさはオリブの木のように、そのかおりはレバノンのようになる。彼らは帰つて来て、その陰に住み、穀物のように生き返り、ぶどうの木のように芽をふき、その名前はレバノンのぶどう酒のようになる。エフライムよ。もう、わたしは偶像と何のかかわりもない。わたしが答え、わたしが世話をする。わたしは緑の木の木のようにだ。あなたはわたしから実を得るのだ。」

(ホセア 14・5、8)

この神の王国は実際にはどのようなものとして現われるのでしょうか。あらゆる国の民が求めようとして得られなかったものが、その時はじめてイエス様によって与えられます。

まず、「正義」こそが神の国の特徴となります。今の世の中は至る所に罪と不義がはびこっており、それによってどれだけ多くの人々が苦しみの中に閉ざされていることでしょうか。しかし、

その時には、イエス・キリストを通して、「正義」が支配する神の国が実現されます。

あなたは義を愛し、悪を憎んだ。それゆえ、神よ。あなたの神は喜びの油をあなたのもとにまらして、あなたにそそがれた。あなたの着物はみな、没薬、アロエ、肉桂のかおりを放ち、象牙のやかたから聞こえる緒琴はあなたを喜ばせた。
(詩篇 45・7、8)

正義と平和がキリストの国の特徴となります。不義は人々を争いと戦争に導きますが、正義が支配するところでは、人々の間に真の平和が実現されます。この地上における偽りのない平和はただイエス・キリストを通してのみ実現されるのです。

正義、平和とならんで「喜び」もまたキリストの国の特徴となります。今の世の中においては、人生の中で涙や悲しみ、失望は当然のこととなっています。しかしキリストの国においては絶えることのない祝福が「喜び」の源となつてあらゆるところに充ち満ちています。

そしてキリストの国に住む人々の特徴は「健康」であることです。聖書には長生きと健康が約束されています。

そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命の満ちない老人もない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者はのろわれた者とされる。(イザヤ 65・20)

彼らが建てて他人が住むことはなく、彼らが植えて他人が食べることはない。わたしの民の寿命は、木の寿命に等しく、わたしの選んだ者は、自分の手で作った物を存分に用い

ることができぬからだ。彼らはむだに勞することもなく、子を産んで、突然その子が死ぬこともない。彼らは主に祝福された者のすえであり、その子孫たちは彼らとともにいるからだ。

(イザヤ 65・22、23)

そのとき、盲人の目は開かれ、耳しいた者の耳はあけられる。そのとき、足なえは鹿のようにとびはね、おしの舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ。

(イザヤ 35・5、6)

「罪」の結果である「死」はまれにしか起こらず、大部分の人々には千年もの寿命があります。また神の国の特徴は「幸せ」です。今この地上で呪われた状態にあるものすべてが、その時豊かに実を結ぶように変えられます。この地上は文字通り「樂園」へと変わります。この「幸せ」、つまり「豊かさ」は、文明や文化がもたらす結果ではなく、サタンが追放された後、イエス様のご臨在のもとに始めて実現されるものです。この地上には、もはや毒草や猛獸などは存在しなくなります。

狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れた子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そ

こなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。

(イザヤ 11・6-9)

これまで見てきたように、イエス様の御国の中心はイエス・キリストご自身であり、その王国を通して、イエス様はご自身がどのようなお方であるかを、私たちに明らかに示してくださいませるのです。

わたしのしもべダビデが彼らの王となり、彼ら全体のただひとりの牧者となる。彼らはわたしの定めに従って歩み、わたしのおきてを守り行なう。

(エゼキエル 37・24)

わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。これは彼らとのとこしえの契約となる。わたしは彼らをかばい、彼らをふやし、わたしの聖所を彼らのうちに永遠に置く。わたしの住まいは彼らとともにあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

(エゼキエル 37・26-27)

すでに今、この時代にあつてイエス様に目を向けている人は幸いです。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもとめせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを

考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

(ヘブル 12・2、3)

35 キリストによる支配の始まり

黙示録20章4節から6節まで

1 復活

1 三種類の復活

2 二つの異なった復活—信者の復活と未信者の復活

3 段階的な復活

2 よみがえった人々

1 二十四人の長老たち

2 殉教者たち

3 殉教者と同じしもべ、兄弟たち

また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう權威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかつた。これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。

(黙示 20・4〜6)

この箇所の主眼は「キリストによる支配の始まり」です。

私たちはこれまで、来るべき「キリストの国」について学んできました。主の弟子たちはイエス様に「今こそ、イスラエルのために国を再興してくださいださるのですか。」(使徒1・6)と尋ねました。弟子たちは「神の国」がこの地上に建設されるものと考えていたのです。しかし、その当時のユダヤ人たちは、イエス様がイスラエルの「メシヤ」、つまり「救世主」であることを決して認めようとしませんでした。ですから「神の国」はこの地上に建設されませんでした。

しかしまもなく、イスラエルは悔い改めるでしょう。そしてその時にこそ、「神の国」が到来します。ここにおける「神の国」とは、とりもなおさず、かつてはユダヤ人たちに拒まれ、捨てられたイエス・キリストによって始めて実現されるものに他なりません。この「神の国」が到来

した時、かつては拒絶されたイエス・キリストが、今度は「王の王」、「主の主」として崇められるのです。

このことと関連して、次に二つの点について簡単に見ることにします。一つは「復活」について、もう一つは「よみがえった人々」についてです。

1 復活

「復活」については、この世の多くの所で語られています。そのほとんどが、死んでも「魂」は生き続けると言われています。しかし、「肉体」については滅び去るものであり、何の希望もなく失われるものだと言っているのです。

しかし、聖書は「復活」について、別のことを語っています。聖書では、「復活」を三種類に分けて説明しています。

1 三種類の復活

まず、象徴的な意味での「復活」があります。これはイスラエル民族が「諸国の墓」から引き上げられて自分の国に帰り、悔い改めてまことの神に立ち返り、神に用いられるようになることを意味しています。これを第一の復活と呼びましょう。

主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨はイスラエルの全家である。ああ、彼らは、『私たちの骨は干からび、望みは消えうせ、私たちは断ち切られる。』と言っている。それ

ゆえ、預言して彼らに言え。神である主はこう仰せられる。わたしの民よ。見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く。……わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る。わたしは、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる。このとき、あなたがたは、主であるわたしがこれを語り、これを成し遂げたことを知ろう。」

(エゼキエル 37・11、12、14)

第二に、霊的なよみがえりを意味する「復活」があります。それは人間であれば誰もが経験しなければならぬ「回心」のことを意味しています。聖書は、「回心」して新しく生まれ変わらなければ、その人は「罪」と「罪過」によって死んでいる者だと言っています。つまりそのような人は、神に対しては死人同然であり、盲目で、見えない世界について語ることも、また聞くこともできない者だということです。

あなたがたは自分の罪過と罪の中に死んでいた者であつて、
(エペソ 2・1)

罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われ
たのは、ただ恵みによるのです。——
(エペソ 2・5)

ただ、神のことはと霊によつて新しく生まれ「回心」した人だけが、死からのちへと移され

ることを体験的に、確信することができるのです。

このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。
(ローマ 6・11)

第三に、すべての人間の肉体的なよみがえりを意味する「復活」があります。新約聖書では四十回以上も「復活」について語られていますが、そのほとんどすべてがこの肉体的、身体的な復活の意味で使われています。

このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。
(ヨハネ 5・28)

そして、すでに今から四千年も前に、ヨブはこの「復活」について語っています。

私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。

私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。(ヨブ 19・25、26)

以上、聖書に記されている三種類の「復活」について見てきましたが、「肉体的な復活」について、さらに、聖書は二種類あることを指摘しています。

2 二つの異なった復活——信仰者の復活と未信者の復活

聖書は肉体的な復活について、まず「信じる者」の復活があつて、次に「信じない者」の復活があると言っています。これについて三つの証しを紹介することにしましょう。

第一はイエス様ご自身の証しです。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

(ヨハネ 5・24)

その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。

(ルカ 14・14)

次の世にはいるのにふさわしく、死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる人たちは、めとることも、とづくこともありません。

(ルカ 20・35)

イエス様は、「肉体の復活」は、「死者の中から」の復活と、「死者」の復活の二種類があることを示しておられます。

第二の証しはパウロのものです。

また、義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神にあつ

て抱いております。

(使徒 24・15)

第三はペテロの証しです。

この人たちは、ペテロとヨハネが民を教え、イエスのことを例にあげて死者の復活を宣べ伝えているのに、困り果て、：

(使徒 4・2)

そこで、次に、死んだ人々が「どこに行くのか」という問いについて考えてみましょう。

「肉体」は土に戻りますが、「霊」と「魂」は肉体を離れても完全な意識をもっていると聖書は言います。人間の霊と魂は、イエス様と共にいるか、離れているかのどちらかです。人間をこのどちらかに決定づけるものは、創造主なる神と、犠牲となってくださった御子イエス・キリストを信じるか信じないかにかかっています。

イエス様の復活の前は、死んだ人の霊と魂は例外なく「死者の国」へ行きました。この「死者の国」は二つに分かれていて、一方の場所ともう一方の場所との間には超えることのできない淵が横たわっています。一方は「パラダイス」、あるいは「アブラハムのふところ」と呼ばれ、もう一つの場所は「苦しみの場」と呼ばれています。

十字架上での死のあと、イエス様は「死者の国」へ降りて行かれました。そこで主イエス様は信じる者に対しては、イエス・キリストによって成就された完全な救いのみわざを伝えられました。そして信じない者に対しては、ご自身の悪魔に対する勝利を伝えられました。少なくともそ

の時だけは、信じない者はイエス様に対して頭を下げたことでしよう。そして信じようとしなかったことが大変な間違いであり、悲劇的な過ちだったと知ったことでしよう。

その霊において、キリストは捕われの霊たちのところに行ってみことばを宣べられたのです。昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです。わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通って救われたのです。

(Iペテロ 3・19、20)

そのとき、悔い改めて信仰をもつても、もはや遅すぎるのです。主イエス様は墓からよみがえられたとき、パラダイスにいたすべての信者を共に引き連れて行かれました。

そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。」——この「上られた。」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです。——(エペソ 4・8、10)

イエス様は多くの捕虜を引き連れて天に行かれたとあります。「死者の国」で束縛され捕虜とされていたのは旧約時代の信仰者たちでした。

イエス様が復活なさってからは、信者の場合は死んで肉体が減びると同時に、霊と魂はただちに天上のイエス様のみもとに行きます。

私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。
(Ⅱコリント 5・8)

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。私は、その二つのもの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまざっています。
(ピリピ 1・21-23)

信じる者の滅びた肉体は、携挙が起こるときに栄光のからだに変えられ、イエス様のみもとに行った霊と魂と再び一つになります。

これに対して信じない者の場合は、肉体が死んでしまうと、生かされていない霊と魂は千年王国の終わるまで、苦しみの場にとどまらなければなりません。そして千年王国のあとで、長い間苦しみ続けた信じない者の魂は肉体と一つになり、いっしょにさばかれることになるのです。

2 段階的な復活

聖書を見ると復活は段階的に行われることがわかります。先ず、「復活」という言葉で理解されることからは、「イエス様を救い主と信じる人々の生かされた霊と魂が、栄光の体に変えられ

た肉体と一つにされること」です。これが「第一の復活」であり、これにあずかるのは主にあって死んだ信者だけです。「第一の復活」は主イエス様が十字架上で死んで、三日後によみがえったことと共に始まりました。

今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあつてすべての人が死んでいるように、キリストによつてすべての人が生かされるからです。しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。それから、終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。最後の敵である死も滅ぼされます。

(Iコリント 15・20～25)

主イエス様の死によつて「死」は力を失いました。これが第一段階です。

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によつて、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

(ヘブル 2・14、15)

しかし、イエス様はいわゆる「初穂」にすぎません。というのは、死に対するイエス様の勝利を通して、多くの人々が同じように「栄光のからだ」をもつようになり、肉体的に復活するからです。

「第一の復活」の第二段階は次のように聖書に記されています。

私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあつて眠った人々をイエスといっしよに連れて来られるはずで、私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下つて来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによりみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしよに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

(Iテサロニケ 4・14-17)

聞きなさい。私はあなたがたに與義を告げましょう。私たちはみな眠つてしまふのではなく、みな変えられるのです。終わりのラツパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラツパが鳴ると、死者は朽ちないものによりみがえり、私たちは変えられるのです。

(Iコリント 15・51、52)

これこそ、近い将来この地上に起こる大きなできごとです。このとき、主イエス様は、「小羊の婚姻」のために、この世の人々の目には見えないかたちで、主イエス様を信じる人々を迎えに来られます。その時、キリストにあつて死んだ人々は一瞬にしてよみがえらされます。死んだ後主イエス様のもとにあつた人々の霊と魂は、栄光のからだと結びつき、再臨なさるイエス様と共に、空中で地上の信者たちを迎えるのです。そのとき、まだ地上に生きている信者たちは瞬間的に「不死」のからだへと変えられてイエス様を出迎えるのです。

それから後の段階については、黙示録では簡単に記されているだけです。黙示録7章を見ると、御座の前に大勢の人々が群がっていることが記されています。

その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手を持って、御座と小羊との前に立っていた。

(黙示 7・9)

黙示録11章にも肉体の復活について書かれており、二人の証人が神の力によってよみがえらされます。

しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らにはいり、彼らが足で立ち上がつたので、それを見ていた人々は非常な恐怖に襲われた。

(黙示 11・11)

同じく黙示録14章1節を見ると、十四万四千人の人々が小羊と共にシオンの山にいたと記され

ています。

主イエス様が目に見えるかたちで再臨なさる時にも、多くの人々が復活し栄光のからだを持つようになります。「第一の復活」の最後の段階として、千年王国を経た、主をおそれ信じる人々も死ぬべきからだを脱ぎ捨てて栄光のからだを持つことでしょう。

ここまで「復活」の種類と段階について見てきましたが、次に「よみがえった人々」について考えて見ましよう。

2 よみがえった人々

聖書には、よみがえらされた人々はキリストと共に支配すると書かれています。千年王国における平和の世界は「主イエス様の勝利」そのものを物語っています。主イエス様は悪魔に対してお一人で勝利をおさめられました。支配なさる時はお一人ではなく多くの者と共になさることを望んでおられます。

勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。
(黙示 3・21)

主イエス様が再臨なさる時には、からだをもつて天上から地上におりていらっしゃる、ということは、聖書に明らかに記されています。千年王国に設けられる「座」(黙示20・4)とはこの地上における「座」に他なりません。しかし、もちろんこの「座」は最後の審判に設けられる座

(黙示 20・11)ではなく、千年王国の支配のための「座」です。

千年王国の「座」では三つの異なるグループがキリストと共に支配することになります。では、第一のグループに属する人々から見ていきましょう。

1 二十四人の長老たち

第一のグループに属するのは、黙示録 4章に記されている天上にいる二十四人の長老たちと、黙示録 19章に記されている花嫁と、婚宴に招かれた人々です。これらの人々は、旧約時代から携挙に至るまでの間の、すべての信者たちでしょう。

私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。

(黙示 5・10)

「あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるはずなのに、あなたがたは、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということを知らないのですか。」

(1コリント 6・2、3)

次の箇所を見ると、このグループに確かに旧約時代の人々も含まれていることがわかります。

「あなたがたに言いますが、たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓につきます。」
 (マタイ 8・11)

イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」
 (マタイ 19・28)

私の考えでは、もしかすると、千年王国を支配するのは、まず花婿なる主キリスト・イエス、そして五旬節から携挙までの間に救われた信者たちすべて、つまりこれらの人々は「キリストの花嫁」と呼ばれていますし、さらに旧約時代の信者たち、これは婚宴に招かれた客人たちではないでしょうか。

次のことばは信頼すべきことばです。「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。」
 (Ⅱテモテ 2・11〜12)

「勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。」
 (黙示 2・26、27)

「けれども、あなたがたこそ、わたしのさまざまの試練の時にも、わたしについて来てくれた人たちです。わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます。それであなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」（ルカ 22・28〜30）

聖書では、教会とイスラエルの民とを厳密に区別しています。つまり、教会とは「天上」における神の民、また「天上」におけるイエス・キリストの花嫁を意味しています。一方、イスラエルの民は、この「地上」において神が選ばれた民であり、また「地上」におけるイエス・キリストの花嫁のようなものでしょう。イスラエルの民の目標は千年王国ですが、真の教会の目標は千年王国ではなく天国にあります。私たちの切なる願いは千年王国に入ることではなく、主イエス様のみそばにいます。

次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

（一テサロニケ 4・17）

私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。

（コロサイ 3・4）

私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにま
さっています。
(ピリピ 1・23)

真の教会は、婚姻によって主イエス様との関係を密接不可分なものとして強くし、イエス様が
支配なさるときは花嫁も共に支配し、イエス様が御座にお着きになるときは花嫁も共に座に着
きます。

「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を
得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」
(黙示 3・21)

「私たちと共に」ということこそ、主イエス様の切なる願いです。教会に与えられる祝福は永
遠のものであり、決して千年間という限られた時間のものではありません。

ここで一つ注意するべきことは、主イエス様は花嫁と共に千年間この「地上にお住まいになる」
とは、聖書のどこにも書かれていません。小羊の婚姻のあと、「天」こそが小羊の住まいとなり、
そこから主イエス様は花嫁と共に支配なさるのです。

2 殉教者たち

よみがえらされた第二のグループは殉教者たちです。彼らは叫んでいます。

小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」

(黙示 6・9、10)

彼らは主の証しのために自分の命を捨てました。この人々こそ、千年王国を支配する第二の集団です。彼らは大きな艱難の時にイエス様に忠実に従った結果、命を失いました。そして次のように言い渡されています。

すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい。」と言い渡された。

(黙示 6・11)

3 殉教者と同じしもべ、兄弟たち

支配する者の第三のグループは、すぐ前の聖書引用箇所にてきた、殉教者と「同じしもべ、また兄弟たち」です。彼らも自分の命を犠牲にしてまでも、主イエス様への愛を貫き通した人々です。主イエス様はこの人々のからだもよみがえらせ、共に支配させようとなさっています。彼らは「獣」やその像を決して拝みませんでした(黙示20・4)。彼らは勝利を得、打ち勝った人々の群れです。

私は、火の混じった、ガラスの海のようなものを見た。獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々が、神の立琴を手にして、このガラスの海のほとりに立っていた。

(黙示 15・2)

キリストと共に千年王国を支配する三つのグループを見ましたが、これら三つのグループのうち、第二、第三のグループの人々の望みは、天上にあるというよりこの地上におけるものだと言えるでしょう。これらの人々はキリストのからだである教会の携挙のあと、信仰を持つようになります。それによってキリストの花嫁に属する者となり、キリストの共同相続人となり、キリストと共に支配するようになるのです。

ここで扱ってきた「第一の復活」にあずかった者に対しては、「第二の死」は何の力も持ちません。「第二の死」とは永遠に主イエス様から離れている状態を意味します。これに対して自然的な死である「第一の死」とは、罪の罰として魂と肉体が分離することを意味します。

この後、黙示録20章11節から15節の箇所で触れますが、「第二の復活」は千年王国のあとに起こるもので、さばかれるための復活であり、「第二の死」、つまり永遠の滅びに至るためのよみがえりを意味します。

36 本物かどうかの吟味

黙示録20章7節から10節まで

- 1 千年王国におけるイスラエルの位置
- 1 世界の中心
- 2 神の使者
- 3 世界の首都としてのエルサレム
- 2 千年王国の期間中の諸国民
- 1 メシヤから約束を与えられている
- 2 福音を受け入れるようになる
- 3 回心する
- 3 千年王国の暗い面
- 1 死の可能性は続く
- 2 主が鉄の杖をもって支配される
- 3 サタンと人間の性質は変わらない
 - ・サタンが解き放される理由
 - ・さばかれる人間

しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海べの砂のようである。彼らは、地上の広い平地に上つて来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降つて来て、彼らを焼き尽くした。そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

(黙示 20・7-10)

この箇所主題は「本物であるかどうかの吟味」です。千年王国の終わりにサタンがその牢から再び解き放たれます。そしてサタンに対する最後の審判がくだされ、それと同時に最後の戦いが始まります。

これから次の三つに分けてその内容を考えることにしましょう。第一に「千年王国におけるイスラエルの位置」、第二は「千年王国期間中の諸国の民」、そして最後に「千年王国の暗い面」です。まず、「千年王国におけるイスラエルの位置」について見ることにしましょう。

1 千年王国におけるイスラエルの位置

1 世界の中心

聖書はこの時、イスラエルが諸国民の中心に位置し、頂点に立つと言っています。申命記28章

1節「もし、あなたが、あなたの神、主の御声によく聞き従い、私が、きよう、あなたに命じる主のすべての命令を守り行なうなら、あなたの神、主は、地のすべての国々の上にあなたを高くあげられよう。」というみことばがこのとき成就されます。何千年もの間、ユダヤ人は迫害され、憎まれ、散らされてきました。しかし、この時状況は全く一変してしまいます。聖書はそのことをはっきりと約束しています。

時が来れば、ヤコブは根を張り、イスラエルは芽を出し、花を咲かせ、世界の面に実を満たす。
(イザヤ 27・6)

外国人もあなたの城壁を建て直し、その王たちもあなたに仕える。実に、わたしは怒って、あなたを打ったが、恵みをもって、あなたをあわれんだ。あなたの門はいつも開かれ、昼も夜も閉じられない。国々の財宝があなたのところに運ばれ、その王たちが導かれて来るためである。
(イザヤ 60・10、11)

しかし、あなたがたは主の祭司となえられ、われわれの神に仕える者と呼ばれる。あなたがたは国々の力を食い尽くし、その富を誇る。
(イザヤ 61・6)

主はこう仰せられる。「見よ。わたしは川のように繁栄を彼女に与え、あふれる流れのように国々の富を与える。あなたがたは乳を飲み、わきに抱かれ、ひざの上でかわいがら

れる。」

(イザヤ 66・12)

2 神の使者

次にイスラエルは「神の使者」として、諸国に祝福を伝える役割を果たすようになります。イスラエルを通して、神の祝福は他の国々に届けられるのです。これこそがあらゆる時代を通して神が目標とされていたことでした。

シオンに残された者、エルサレムに残った者は、聖と呼ばれるようになる。みなエルサレムでいのちの書にしるされた者である。

(イザヤ 4・3)

わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちののがれた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、ルデ、メシエク、ロシユ、トバル、ヤワン、遠い島々に。これらはわたしのうわさを聞いたこともなく、わたしの栄光を見たこともない。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせよう。彼らは、すべての国々から、あなたがたの同胞をみな、主への贈り物として、馬、車、かご、騾馬、らくだに乗せて、わたしの聖なる山、エルサレムに連れて来る。」と主は仰せられる。「それはちようど、イスラエル人がささげ物をきよい器に入れて主の宮に携えて来るのと同じである。

(イザヤ 66・19、20)

万軍の主はこう仰せられる。「その日には、外国語を話すあらゆる民のうちの十人が、

ひとりのユダヤ人のすそを堅くつかみ、『私たちもあなたがたといっしょに行きたい。神があなたがたともにおられる、と聞いたからだ。』と言う。」
(ゼカリヤ 8・23)

見よ。やみが地をおおい、暗やみが諸国の民をおおっている。しかし、あなたの上には主が輝き、その栄光があなたの上に現われる。国々はあなたの光のうちに歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。
(イザヤ 60・2、3)

パウロが異邦人のための伝道者として福音を宣べ伝えたと同じように、千年王国の時には、イスラエルの民がこぞって救いの福音を宣べ伝えるようになります。

3 世界の首都としてのエルサレム

第三に、この時、エルサレムが世界の首都となります。地理的に見るとイスラエルは世界の中心に位置しており、千年王国の時に主の光はエルサレムから出てきます。

主は、聖なる地で、ユダに割り当て地を分け与え、エルサレムを再び選ばれる。

(ゼカリヤ 2・12)

主はこう仰せられる。「わたしはシオンに帰り、エルサレムのただ中に住もう。エルサレムは真実の町と呼ばれ、万軍の主の山は聖なる山と呼ばれよう。…多くの国々の民、強

い国々がエルサレムで万軍の主を尋ね求め、主の恵みを請うために来よう。」

(ゼカリヤ 8・3、22)

エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。

(ゼカリヤ 14・16)

終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、国々の民はそこに流れて来る。多くの異邦の民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に行こう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。(ミカ 4・1、2)

その方は私に言われた。「人の子よ。ここはわたしの玉座のある所、わたしの足の踏む所、わたしが永遠にイスラエルの子らの中で住む所である。イスラエルの家は、その民もその王たちも、もう二度と、淫行や高き所の王たちの死体で、わたしの聖なる名を汚さない。」

(エゼキエル 43・7)

イスラエルの首都であるエルサレムはその時、全世界の首都となります。一言で言えば、千年王国においてイスラエルは全世界の中心に位置するようになるということです。

次に千年王国の期間中の諸国民について考えてみることにしましょう。

2 千年王国の期間中の諸国民

1 メシヤから約束を与えられている

第一に言えることは、諸国民がメシヤからの約束を与えられているということです。それは旧約聖書に明らかにされています。

「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらず。」 (イザヤ 42・1)

「わたし、主は、義をもつてあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。」 (イザヤ 42・6)

主は仰せられる。「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。」 (イザヤ 49・6)

この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びる

ことがない。

(ダニエル 7・14)

主イエス様は、イスラエルの国を建てるだけでなく、イエス様に諸国民が治められるようになることも約束しておられるのです。

今日、主イエス様はすでに異邦人の光となっておられますが、完全に主イエス様が支配なさっている国民というのには地上にまだ存在していません。その多くはサタンによって惑わされ、支配されているからです。イエス様は依然として拒まれ、イエス様の前に身をかがめることを潔しとしない人々が大勢います。

しかし千年王国の時には、個人だけでなく国々が主イエス様を信じ受け入れるようになります。主イエス様が諸国のメシヤになるという約束が、始めて成就するのです。

2 福音を受け入れるようになる

第二に言えることは、その時、あらゆる国の人々が真の意味で「福音」を受け入れるようになるということです。

現在においても、聖書が多くの国々の国語や民族語に訳され、福音が広められている事実がありますが、イエス・キリストを救い主として受け入れていない未信者の数は、それ以上に増えています。しかし、次のような約束が、千年王国の時には成就されます。

「わたしは、彼らのわざと、思い計りとを知っている。わたしは、すべての国々と種族

とを集めに来る。彼らは来て、わたしの栄光を見る。わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちののがれた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、ルデ、メシエク、ロシユ、トバル、ヤワン、遠い島々に。これらはわたしのうわさを聞いたこともなく、わたしの栄光を見たこともない。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせよう。」

(イザヤ 66・18、19)

「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。……彼は衰えず、くじけない。ついには、地に公義を打ち立てる。鳥々も、そのおしえを待ち望む。」

(イザヤ 42・1、4)

「見よ。わたしは彼を諸国の民への証人とし、諸国の民の君主とし、司令官とした。見よ。あなたの知らない国民をあなたが呼び寄せると、あなたを知らなかつた国民が、あなたのところに走つて来る。これは、あなたの神、主のため、また、あなたを輝かせたイスラエルの聖なる方のためである。」

(イザヤ 55・4、5)

3 回心する

第三に言えることは、あらゆる国民がその時「回心する」ということです。イザヤ書17章7節

に書かれているみことばがその時成就します。

その日、人は自分を造られた方に目を向け、その目はイスラエルの聖なる方を見、：

(イザヤ 17・7)

「そのとき、わたしは、国々の民のくちびるを変えてきよくする。彼らはみな主の御名によつて祈り、一つになって主に仕える。」

(ゼパニヤ 3・9)

その日、耳しいた者が書物のことばを聞き、盲人の目が暗黒とやみの中から物を見る。

(イザヤ 29・18)

見る者は目を堅く閉ざさず、聞く者は耳を傾ける。気短な者の心も知識を悟り、どもりの舌も、はつきりと早口で語ることができる。

(イザヤ 32・3、4)

「こうして、盲人の目を開き、囚人を牢獄から、やみの中に住む者を獄屋から連れ出す。……わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。」

(イザヤ 42・7、16)

今の世の中は、真理に対して目をふさがれてしまった人々や、かたくなになつてゐる人々によつて占められ、それらの人々に支配されています。しかし、千年王国の時には、主イエス様とそのご支配を、すべての人々が認めるようになります。

また、主に連なつて主に仕え、主の名を愛して、そのしもべとなつた外国人がみな、安息日を守つてこれを汚さず、わたしの契約を堅く保つなら、わたしは彼らを、わたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のいけにえやその他のいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるからだ。

(イザヤ 56・6、7)

「毎月の新月の祭りに、毎週の安息日に、すべての人が、わたしの前に礼拝に来る。」と主は仰せられる。

(イザヤ 66・23)

その時、確かにすべての人々が全面的に「回心」ということは起こらないにしても、主イエス様に仕える人々の数はおびただしく増え、数え切れないほどになります。

そのとき、エルサレムは『主の御座』と呼ばれ、万国の民はこの御座、主の名のあるエルサレムに集められ、二度と彼らは悪いかたくな心のままに歩むことはない。

(エレミヤ 3・17)

万軍の主はこう仰せられる。「再び、国々の民と多くの町々の住民がやって来る。一つの町の住民は他の町の住民のところへ行き、『さあ、行って、主の恵みを請い、万軍の主を尋ね求めよう。私も行く。』と言う。多くの国々の民、強い国々がエルサレムで万軍の主を尋ね求め、主の恵みを請うために来よう。」万軍の主はこう仰せられる。「その日には、外国語を話すあらゆる民のうち十人が、ひとりのユダヤ人のすそを堅くつかみ、『私たちもあなたがたといっしょに行きたい。神があなたがたとともにおられる、と聞いたからだ。』と言う。」

(ゼカリヤ 8・20―23)

千年王国では諸国の代表者たちがエルサレムに来て、主イエス様を礼拝するようになります。

「わたしは自分にかけて誓った。わたしの口から出ることは正しく、取り消すことはできない。すべてのひざはわたしに向かってかがみ、すべての舌は誓い、わたしについて、『ただ、主にだけ、正義と力がある。』と言う。主に向かっていきりたつ者はみな、主のもとに来て恥じ入る。」

(イザヤ 45・23、24)

これまで、千年王国の二つの中心的な事柄を見てきました。はじめに「千年王国でのイスラエルの位置」、そして「千年王国の期間中の諸国民」についてでした。最後に「千年王国の暗い面」について見ることにしましょう。

3 千年王国の暗い面

これから千年王国の暗い面に触れるのですが、三つの事柄について聖書から取り上げてみたいと思います。

1 死の可能性は続く

第一は「千年王国」を迎えても、なお、人間の「罪を犯す傾向」はなくならないということですから、「死」も当然の可能性として残っています。聖書には次のようにあります。

正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。
(イザヤ 11・4)

「わたしはあなた方を剣に渡す。それであなたがたはみな、虐殺されて倒れる。わたしが呼んでも答えず、わたしが語りかけても聞かず、わたしの目の前に悪を行ない、わたしの喜ばない事を選んだからだ。」
(イザヤ 65・12)

千年王国の期間中でも罪は罰せられます。そして、罪を悔い改めたくない人には、悔い改めをするために百年という長さの時間が与えられています。その間に悔い改められなかった人は「呪い」に投げ込まれます。その時の人間の寿命は、人類の創造の始めのときと同じように長いもの

となります。例えば、アダムは九百三十歳、メトセラは九百六十九歳というような具合にです。しかも、多くの人は千年王国の全期間中、つまり千年間死なずに生き続けます。

2 主が鉄の杖をもって支配される

第二は、イエス様のご支配が權威に満ちており、不法の者に対しては「鉄の杖」をふるわれるということです。人類はそれまで長い間与えられていた自由を、自分勝手に乱用していました。そのことが歴史によって証明され、それを認めざるを得なくなります。自由の乱用が不正と戦争を招くのです。

これらに対して、人類に「正義」と「平和」をもたらすために、主イエス様が自身が答えられることとなります。

「わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、今にも燃えようとしている。」

(詩篇 2・8～12)

主イエス様を礼拝するためにエルサレムに來ない者は、罰せられます。その罰として雨が降らなくなると聖書は語っています。

地上の諸氏族のうち、万軍の主である王を礼拝しにエルサレムへ上つて来ない氏族の上には、雨が降らない。

(ゼカリヤ 14・17)

3 サタンと人間の性質は変わらない

千年王国の暗い側面として第三にあげられることは、サタンが相変わらず神の敵対者として登場し、また人間の性質も相変わらず罪の性質を持ち続けるということです。黙示録20章3節の続きが7節にあります。千年が経過した後、サタンはその「牢から解き放され」ます。しかしサタンは自分の力で自由になるのではなく、神の命令を受けた御使いがサタンを解放するのです。ですからサタンは自由の身にされたとはいえ、自分の意思通りにやりたいことをすべて行なうことが出来るよう許されているわけではありません。つまり、サタンが行なっていることではあっても、それらは神の御心に従った範囲内にとどめられているにすぎないのです。

・サタンが解き放される理由

千年王国の間、人間を取り巻く周囲の環境は完全なものです。しかし、完全な環境によってさえも、人間はその心を変えることができません。ただ、全能なる神お一人だけが、人間を新しく造り変えることがおできになるのです。

イエス様のご支配に逆らう少数の反逆者は、千年王国の時に「死」を味わうこととなります。そして大多数の人々は主イエス様の前に身をかがめますが、その人々の服従は上辺だけのものに

すぎません。彼らはただ罰せられることが恐ろしく、それから逃れたいために従順を装っているのです。それは決してイエス様に対する「純粹な愛」からでているものではありません。

主イエス様は永遠なる真実の愛をもって全人類を愛してくださいましたが、それにもかかわらず、そのイエス様に対してまことの愛を捧げる者はごく少数の者たちにとどまります。

神に申し上げよ。「あなたのみわざは、なんと恐ろしいことでしょう。偉大な御力のために、あなたの敵は、御前にへつらい服します。」
(詩篇 66・3)

千年王国はまだ神の目標の完成した姿ではありません。完成の前に、すべての悪と、神に向かって反抗する心は取り除かれなければなりません。隠されているすべてのものが光の中に出されることがさばきの土台です。

サタンは千年の間牢につながれていた間もその本性を改めようとはせず、少しも悔いることをしません。牢から解き放たれるとすぐに、人間が戦争に向かうよう準備を始めます。それによって悪魔の正体ははっきりと暴かれます。この悪魔の恐ろしい正体は、永久にさばかれる前に明らかにされなければなりません。悪魔の本性は「悪のかたまり」以外のなものでもありません。この神の判断が正しいということが証明されるために、サタンは牢から解き放たれてその本性をあらわにさせられるのです。

さらにサタンは諸国民を惑わすことも許されますが、それによって人間自身の内側に何が存在するかということもまたあらわにさせられます。本来、神にとっては、この世の何が本物である

か、また何が偽りであるかを試す必要はないはず。神は全知全能の方であり、すべてを見通されているからです。しかし、人間は自分の内側に良いと言えるものは何一つないということを知りません。ですから、自分自身が救い主イエス・キリストを必要とすることを知らないのです。人間は最終的にさばかれる前に、人間の本性を正しく知る必要があります。つまり主なる神は、下されるさばきの正しさを全世界の前に明らかにしてお示しになるのです。そのためにサタンが使われるようになります。もちろん、サタンは主なる神に仕えたいとは毛頭思っておりませんが、結果的には神の御心を実現されるために使われることになるのです。

・さばかれる人間

おそらく千年王国の始めには、ただ主を信じ、主を恐れる人々だけが、このご栄光を体験することでしょう。千年王国で行なわれる諸国民へのさばきを、次の聖書箇所から読みとることができます。

「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たちが世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ま

せ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』

それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。』そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渴き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話をしなかつたのでしょうか。』すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小さい者たちのひとりにしなかつたのは、わたしにしなかつたのです。』

こうして、この人たちは永遠の刑罰には入り、正しい人たちは永遠のいのちにはいるのです。」
(マタイ 25・31〜46)

主イエス様が公けにわかるかたちで再臨なさって、ご自身の国をお建てになるとき、地上にいる「異邦人」に対するさばきが行なわれます。

そのとき人々は、三種類のグループに分けられます。

第一のグループは「羊」、つまり救われた異邦人です。彼らは教会の携挙と主イエス様の二回目の再臨との間に救われた人々です。

第二は「山羊」、つまり救われていない異邦人です。

そして、最後のグループは「兄弟たち」と呼ばれる群れで、これはイスラエルの民を意味しています。

すべて私たち被造物にとつては、最後の時に「平和の国」、「主イエス・キリストの国」にあずかれるかどうかが大切な問題です。その際、イスラエルの民に対して、どのような態度をとるかが決定的な手がかりとなります。

では、キリストに逆らうように悪魔に惑わされる人々、その数が「海辺の砂のよう」(黙示 20・8)に多いと言われる諸国の民とは、一体どこから来るのでしょうか。それは間違いなく信者たちの子どもとその子孫たちです。外側から見ると、共に行動しているように見えますが、実際は「新生」をまだ体験していない人々が大勢いるのです。これは聖書がはっきりと語っている

事実です。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だが、それを知ることができよう。

(エレミヤ 17・9)

すでに見てきたように、千年王国の時には荒地にも花が咲きます。そして地上の人口が驚くほど増加することも確かです。というのも、呪いは解かれ、死は滅多に見られなくなるために、人口は恐るべき勢いで増えるに違いありません。しかも食糧は十分にあり、数え切れないほどの人間のためにも十分用意されます。大部分の人々がしっかりと主イエス様につながっていることは確かですが、その一方で悪魔に惑わされる人の数も急激に増加することでしょう。

そこでサタンの反逆を通して、人々の愛が本物かどうか、見せかけだけの信仰であるかないかが試され明らかになります。悪魔は依然として「嘘つき」であり、「人殺し」の本性をもち、人間もまた完全な環境の中に生きていくにも関わらず、生まれつきの「反逆者」としての性質を持ち続けています。ただ神がなしてくださる真の「新生」を通してのみ、霊的な死から「永遠のいのち」へ変えられると聖書は言っています。いつの時代でも救いの道は唯一です。神の霊と神のみことばによって回心する以外に、救いの道は存在しません。

私たちは、人間のどこかが「正常ではない」ことを知っています。心理学者や社会学者など多くの知識人や学者たちが、そのことを何とか理由づけようとして、いろいろな議論をします。しかし神は、本当の原因は「罪」であるとおっしゃっています。医者が診断を誤れば治療方法も当

然間違つてしまいます。私たちも自分を含め人間を正しく診断しなければなりません。「罪」によつて人間が神から離れてしまった、これこそが根本的な問題なのです。

黙示録20章8節には、ゴグとマゴグのことが述べられています。マゴグは創世記10章2節によると、ヤベテの二番目の息子であり、おそらくコーカサス地域に住んでいたと思われる。「ゴグ」というのは一つの名称であり、「君主」という意味を持っています。今日、ゴグとマゴグに相当するものとしてロシアが考えられます。

エゼキエル書38章、39章にも「メシエクとトバルの大首長であるマゴグの地のゴグに顔を向け、彼に預言して、……」とあり、それに続いて千年王国の前に戦争が起こることが語られています。これは北の国々がイスラエルの富を略奪するために起こす戦いです。しかし黙示録20章に示されているのは、世界的な規模で起こされる戦争であり、その火付け役としてロシアが介在していることが大いに考えられます。

ここで注意したいことは、ゴグとマゴグが引き起こす戦争が、エゼキエル書では「千年王国の前」であるのに対して、黙示録20章においては「千年王国の終り」にあるということです。二つの記述の間に時間的な相違があるのです。ただいずれにしても、結局ゴグとマゴグの起こした戦争は彼らの敗北に終わります。千年王国の前と後に大きな反乱が起こされるといふことは、千年王国の期間中も牢に閉じ込められていたサタンが少しも変わらないこと、そしてまた豊かに祝福され恵みを受けているにもかかわらず、人間もその本性を改めようとしないうことを明らかに示しています。

千年王国の終りに、靈的な新生を経験していない人は、すべて神を否定するようになります。そして神のさばきが突然下されます。その時は、あたかもソドムとゴモラの場合と同じように火と硫黄が天から降ってきます。これが最終的なさばきとなります。

サタンは極めて短い時間だけ自由にされ、サタンの誘惑により人間の心の最も奥底に潜んでいるものがあらわにされます。しかし、黙示録20章9、10節にあるように、神との戦いが生まれる前に、神はさばきをくだされます。この日は、新約聖書の他の箇所にも記されている「さばきの日」に他なりません。

しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。

(Ⅱペテロ 3・10)

黙示録20章10節に記されている「火と硫黄の池に投げ込まれ」とは、神から永久に分離されること(マタイ25・41)であり、絶え間ない苦しみを受けることを意味します。

悪魔が火と硫黄の池に投げ込まれた時、反キリストと偽預言者はすでに千年前に投げ込まれていたにもかかわらず、そのままの状態で苦しみ続けており、まだ焼き尽くされてはいません。「死にたい」と願っても死ぬことができません。「彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける」(黙示20・10)のです。これこそが「第二の死」です。「永遠に」という表現は黙示録の中に十三回出てきます。それは限りがない、終りがなく、ということ。例えば神を言い表す時に使われています。

永遠に生きておられる、御座に着いている方に：

(黙示 4・9)

二十四人の長老は御座についている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を
拝み：

(黙示 4・10)

永遠に生き、天とそこの中にあるもの、地とそこの中にあるもの、海とそこの中にあるものを
創造された方：

(黙示 10・6)

永遠に生きておられる神：

(黙示 15・7)

また、神と小羊の栄光を賛美するのにも用いられています。

御座に座る方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。

(黙示 5・13)

アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるよう
に。アーメン。

(黙示 7・12)

キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン

(黙示 1・6)

また、神と小羊の支配も「永遠に」続くことが記されています。

この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。

(黙示 11・15)

そして、神のしもべたちが祭司として支配することも「永遠」です。

神と小羊との御座が都の中にあつて、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。

また、彼らの額には神の名がついている。もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは永遠に王である。

(黙示 22・3〜5)

また、聖書の中に出てくる「永遠」ということは、サタン、つまり悪魔、反キリスト、偽預言者、獣とその像を拜む者に対して、神が最終的に下されるさばきについても使われています。

彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獣とその像とを拜む者、まただれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。

(黙示 14・11)

神が永遠に生きておられるように、また神が永遠に支配しておられるように、そしてまた神のしもべたちによって神がとこしえにほめたたえられるように、彼らの火の池の中での苦しみは永

遠に続くのです。聖書は語っています。三種類のグループがこの恐ろしい場所にやってくることを。第一のグループは、反キリストと偽預言者たちです。第二のグループは、サタンとそれに仕える者、つまり悪霊たちです。そして第三のグループは、救われていないすべての人間です。

最も恐ろしいことは、罪の中にとどまること、神の贖いを拒むことです。その結果、神の御手に落ちてさばかれることは何という悲劇でしょうか。

それとは反対に、最もすばらしいことは、悔い改めたいという心をもった罪人が、神の腕の中に、今、この時、自らを投げ出すことです。そうすれば、「罪の赦し」、「神との平和」、「永遠のいのち」が与えられます。

37 人間に対する最後の審判

黙示録20章11節から15節まで

- 1 第二の復活
- 2 さばきの時はいつか
- 3 さばく方
- 4 さばかれる者
- 5 さばきの根拠
- 6 さばきの結果
- 7 唯一の逃れ道

また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなつた。また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であつた。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従つて、自分の行ないに應じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおの自分の行ないに應じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

(黙示 20・11～15)

黙示録20章11節から15節は、最も恐ろしい箇所だと言えます。ここに記されていることは真理であり、確かなことです。主題は「人間に対する最後の審判」であり、内容的には「永遠の滅び」、「第二の復活」、「世界審判」、「死者に対するさばきと終末」、「白い御座の大審判」などです。

サタンに対するさばきのあと、聖書は「死者」に対するさばきについて私たちに語っています。それは、主が公に認められるかたちで再臨されたあと、主がなされる第三のさばきです。第一のさばきは戦争というかたちで行なわれます(黙示 19・11、15)。第二のさばきは神の国建設のため、千年王国の始めに行なわれるさばきです(黙示 20・4)、(マタイ 25・31～33)。そして千年王国の終りに行なわれるのが、最後の審判となる第三のさばきです。これからそのことを

七つの点に分けて考えてみましょう。

1 第二の復活

はじめに「第二の復活」について見てみます。実は聖書の中には「第一の復活」という記述はありますが、「第二の復活」という記述は出てきません。千年王国の前に、すでに救われた信者の復活がありますが、これは「第一の復活」と呼ばれるもので、千年王国をキリストと共に支配するためのいのちへのよみがえりです。これに対して、未信者の復活は千年王国のあとで起こりますが（黙示20・5）、これを私たちは「第一の復活」と区別して「第二の復活」と呼んでいます。ただしこの復活は、いのちへのよみがえりではなく、さばかれるためのものです。

このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けます。

（ヨハネ 5・28、29）

第一の復活にあずかる者は、アダムの時以来、主なる神様の御前にへりくだり、哀れみと恵みを請うた人々すべてが含まれます。そして第二の復活に属するのは、神を無視し、悔い改めを拒み、永遠への望みもなく死んでいった人々です。

次に、さばきの時について見てみましょう。

2 さばきの時はいつか

この「さばきの時」は、聖書では新しい天地が出現する直前とされています。このさばきは、主イエス様が裁判官としてなされる最後の行為です。

前に学んできたように、千年王国では、キリストがどういってお方であるか、また人間の信仰と従順の結果として何がなされるのかが明らかになります。また、サタンが本質的にどうい存在であるか、つまり、その本性を決して変えない者であり、変わりたいとも望んでいないことも明らかになります。そして人間を滅びへ、つまり間違つた道へと導いていくことこそがサタンの目的であることが明らかになります。さらに千年王国は、私たち人間がどうい者であるか、その心の深奥には神様に対する反抗心がいかに深く根付いているかという事実をも示してくれます。たとえ人間として成功する条件をすべて備え持ったとしても、社会的・経済的・文化的な環境が完全に整えられたとしても、正しい政府が確立されずばらしい法律が制定されたとしても、また平和が実現したとしても、それらは人間を罪から救い出す真の救いのためには何の役にも立たないことが明らかになります。人は聖霊によって新しく生まれ変わらな限り、生まれながら神に對する反逆の心を抱いた者、反逆者であり続け、最終的にはさばかれなければならないのです。

3 さばく方

黙示録20章11節にさばきの御座について書かれています。その御座はまぶしいほどに真つ白で、罪と不義の汚れは少しもありません。「神は光であり」(1ヨハネ1・5)とある、その神が

ここに明らかになります。それは隠されていることができません。

イザヤがこの御座を見たとき、彼は叫びました。

「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」 (イザヤ 6・5)

イザヤは当時、まったく神に忠実な神を恐れる人格者で、非の打ち所のない預言者でした。そのようなイザヤでさえ、神の前で「私はけがれた者だ」と叫ばざるをえなかったとしたら、ましてや意識的にイエス様を拒み、受け容れようとしなかった人々はどういうことになるでしょうか。

御座に座っている裁判官は主イエス・キリストです。

父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。(ヨハネ 5・22)

また、父はさばきを行なう権を子に与えられました。子は人の子だからです。

(ヨハネ 5・27)

神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。(ローマ 2・16)

なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもつてこの世界をさばくため、
日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによつ
て、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。

(使徒 17・31)

ご自身、人間の姿をとつて地上に下られた主イエス様は、裁判官としてふさわしいお方です。
神の被造物である人間が、主イエス様を救い主として受け入れないことは、最も大きな罪です。
私たちの罪の贖いのためにご自身をお与えになったほどに愛に富んだお方が、ここでは極めて厳
格な裁判官となつて、ご自身を拒んだ者たちに対されます。

神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、
その現われとその御国を思つて、私はおごそかに命じます。

(Ⅱテモテ 4・1)

4 さばかれる者

第四番目の問題に入りましょう。さばかれるのは誰か。それは肉体的な死者だけでなく、霊的
にも死んだ者たちです。カインの時代から千年王国の時代に至るまで、主イエス様の御前に心か
ら悔い改めて身をかがめることをしないで、神に反抗し続けたすべての人間がさばかれます。

贖われた信者たちは、すでに千年王国の前に復活しました。ですから、この箇所に記載されてい
る死者たちが救われていない死者であることは明らかです。ノアの時代に洪水によってすべての
ものが呑み尽くされてしまったように、ここでも人々のする計算はすべて無意味になり、最後の

厳しい決算が行なわれます。

神を否定する者、イエス・キリストの神性を認めない者、天国と地獄の存在を認めない者たちすべてが、さばき主の前に引き出されることになります。逃げようとするあらゆる試みは役に立ちません。聖なる神の御前では罪人はどうすることもできません。逃げ道も、護ってくれる者も、弁護する者も存在しません。

イエス様の贖いの血潮を信じ、主に信頼することによって「義」と認められた人々だけが、さばきを免れることができます。それ以外の人々、つまりそれまでの絶え間ない主の呼びかけにも関わらず、意識的に罪の赦しを拒み、悔い改めなかった人々のすべてが弁解の余地なくさばかれます。罪を犯せば罰せられるということを知っていながら、意識的に罪を犯し、主の救いを拒んだ者は、必ずさばかれ罰せられます。

前に、神からの赦しを受け入れたくない魂のすべてが、死んでから「苦しみの場」に行かなければならないということを見ました。しかもこの「苦しみの場」でも人間の魂は相変わらず考え、欲し、感じるすることができます。

その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。彼は叫んで言った。「父アブラハムさま。

私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。」
(ルカ 16・23、24)

主イエス様は次のようにおっしゃいました。「御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の名を信じなかったので、すでにさばかれています。」(ヨハネ3・18)と。しかし、信じたくない者は「すでにさばかれています」のなら、どうして最後の審判が必要なのでしょう。それは、すべての未信者は自分たちがなぜ第二の死を経験しなければならぬのか、どうして永遠に主なる神から離されなければならないのかをはっきりと知るべきだからです。

全宇宙はいつかなくなります。しかし、神も人間も永遠に生き続けます。人はしばしば「この人は死んだ」、「あの人も死んだ」と言いますが、すべて死んだ人は死後もなおイエス様のみそばか、あるいは「苦しみの場」か、いずれかの場所で生き続けます。天国の主イエス様のみそばに行つた者はいのちに満ち溢れており、他方、「苦しみの場」に行つた者はすべてそこからさばき主の御前に出て行かなければなりません。

さて、ここから第五番目の問題に移りましょう。

5 さばきの根拠

さばきの根拠になるものは「天にある書物」であることが黙示録20章12節に示されています。

この書物について、詳しいことは必ずしも明らかではありませんが、「神の戒めの書」、「行ないの書」、「いのちの書」であると考えられます。

・ 神の戒めの書

先ず、「神の戒めの書」について見てみましょう。神のみことばである聖書は、しばしば「律

法の書」とも呼ばれます。神のみことばを聞いた者は、それに従うよう義務づけられています。従わない者はさばかれています。

というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」

(ガラテヤ 3・10)

「このみおしえのことばを守ろうとせず、これを実行しない者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。

(申命 27・26)

たとえ神のみことばを知らない人であっても、良心による基準を持っています。つまり良心に従うよう、人間は義務づけられているのです。ですから良心に従わない者も、またさばかれるようになります。

神にはえこひいきなどはないからです。律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれます。それは、律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行なう者が正しいと認められるからです。

——律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょ

になつてあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合つたり、また、弁明し合つたりして
います。——
(ローマ 2・11、15)

・行ないの書

第二は「行ないの書」です。これにはその人に真理を見出す機会があつた時のことがすべて記録されており、また拒んだ場合もすべて記録されています。この書によつて、すべての悪の行ないが明らかにされ、隠されていた動機も明るみに出されます。

神は、善であれ、悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。
(伝道者 12・14)

私たちのすべての考え、ことば、行ない、怠慢はこの書の中に記録されます。多くの人々はさばかれることなどないと思つてこの地上の生活を営んでいます。人々は富と楽しみを求め、嘘をつき、だましたあとで誰にも知られなければ「ああ、よかつた」と胸をなでおろします。しかし天においてはすべてのが正確に記録されています。神はすべてを見ておられ、すべてをご存知です。誰一人、神の前で隠しとおせる人はいません。この地上では、人間は主なる神と贖い主なるイエス様の前から逃げる事ができると思い、そう試みます。多くの人の人生を一言で言い表わすと、それは「神からの逃避」と言えるでしょう。しかし、主イエス・キリストの贖いの十字架を受け入れ、主イエス様に信頼する者こそ幸いです。

「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」
(ヨハネ 6・37)

あなたは、すでにイエス・キリストの贖いによる「罪の赦し」を受けておられるでしょうか。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。
(Iヨハネ 1・9)

もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(Iヨハネ 1・7)

もうすでに贖い主としての主イエス・キリストを受け入れているなら、もはやさばかれることはありません。主イエス様がすでに私たちの罪に対する代価を支払い、神様の怒りをその身に受けてくださったからです。イエス様を信じている者なら、行ないのリストがさばき主の前に提出されることはありません。なぜなら、主イエス・キリストがその罪と債務のリストを十字架に釘付けにしてください、葬り去ってくださいだからです。

いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書は無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。

(コロサイ 2・14)

「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」
(イザヤ 43・25)

「そのようにして、人々はもはや「主を知れ。」と言って、おのおの互いに教ええない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。——主の御げ——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」(エレミヤ 31・34)

神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていただくのです。私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、その

ほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。
 (ローマ 8・33-39)

「さばかれる」ということは、「神から永遠に引き離される」ことを意味しています。

・いのちの書

主イエス・キリストを受け入れた者は、罪を赦されており、その名前は「いのちの書」に記されています。

心から罪を悔い改め、主イエス様をあがない主として受け入れた者はみな、次のように告白することができます。「神の恵みとイエス・キリストの血潮によって、どのような罪人であっても新しく造り変えられるのです」と。

人間は誰でも生まれた時にその名前を「いのちの書」に記録されます。しかし生きている間にイエス様を拒み続けて救いを受け入れなかった者の名前は「いのちの書」から消されてしまうのです。大難難の時、獣や獣の像を拝んだ者の名前も即刻「いのちの書」から抹消されます。さばきの時、神が御座で「いのちの書」を開きますが、新しく生まれ変わった者の名前は必ずそこに記録が載っています。その人が、主イエス様の血潮の代価として買い取られた者であるからこそ、「いのちの書」に名前が記されているのです。「いのちの書」が「小羊の書」(黙示21・27)とも呼ばれる理由がここにあります。

さて、これまで見てきたことをまとめてみましょう。主イエス様はまず、さばき主として「律法の書」をお開きになり、それを手がかりにして一人一人の人間に何が要求されていたのかを示しになります。神様の完全な愛、聖さ、真実というものは、人間がどんなに努力しても決して到達することのできないものであって、そのことを主イエス様は人間一人一人にわかるように示してくださいます。しかしそれと同時に、主なる神は、これらの事柄、人間の力によって不可能なことを、御子イエス・キリストを遣わしてくださいましたことにより、そしてイエス・キリストを信じ受け入れる者にイエス様が内住することにより、可能にしてくださいましたことを明らかにしてくださいます。

それから「行ないの書」が開かれます。この書には、訴えられた人の名前が記録されており、神の律法によって吟味された一人一人の行ないも記録されています。神の要求に照らせばどのような人の行ないといえども、不完全であり的是はずれです。人間が自分の良心の声を消そうとしたり、それから逃れようとしたりしたこと、また神が悔い改めと立ち返るための機会を与えた時に拒んだ人たちの様子も明らかに示しになります。

そして最後に「いのちの書」が開かれます。さばきに定められた者たちの名前はどこにも見出されず、それこそが永遠の滅びを意味するのです。

6 さばきの結果

これから六番目の点、「さばきの結果」がどんなものか見てみましょう。

人間はおののき始め、次の様に叫ぶことでしよう。

その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なつたではありませんか。』
(マタイ 7・22)

人々はこう言うかもしれませんが。「私たちは教会に行き、聖書を読み、洗礼も受けました」、「あれもこれも、いろいろやりました」と。しかし、それがイエス様への愛と信仰からでなく、形だけのもの、または不純な動機から出たものである場合、さばき主は「わたしはあなたがたをぜんぜん知らない」(マタイ7・23)とはっきり答えられるのです。彼らは結局、サタンや反キリストや偽預言者と同じ末路を引き受けなければなりません。この末路は「第二の死」と呼ばれます。それは人間が神から永遠に引き離されることであり、地獄と永遠の滅びを意味します。(黙示14・11) 神は永遠に生きておられる神(黙示15・7)であり、さばかれた人々の苦しみも神が生きておられる間、つまり永遠に続くのです。「永遠に失われた状態」が存在するということは恐ろしい事実です。人間は誰でもよみがえります。一つのグループは永遠のいのちのためによみがえり、別のグループは永遠の恥と汚れのためによみがえりません。

地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。
(ダニエル 12・2)

誰がどちらの道に行くかは、結局その人と主との間の個人的関係であり、他人のあずかり知らないところですが、自分がどちらの道に行くべきかは知っておかなければなりません。

罰の程度はいろいろな状態に応じて異なります。例えば、悪の程度に応じて、また債務の程度に応じて、主から与えられた光に応じても違ってきます。神様のことは聞きながら意識的にそれを拒み、罪の状態にとどまったまま真理の光に来ようとしなない人々に対する罰は大きいのです。

「火の池」または「永遠の死」におちるということは、その人がもはや存在しなくなることではなく、まことの神、主からの永遠の決別を意味します。それは比べるもののないほどひどい苦しみとなることでしょう。

7 唯一の逃れ道

さて最後にここで、さばかれないための唯一の逃れ道について考えてみましょう。

聖書は今の天と地は過ぎ行くと言っています。

あなたははるか以前に地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。これらのものは滅びるでしょう。しかし、あなたはながらえられます。すべてのものは衣のようになり切れます。あなたが着物のように取り替えられると、それらは変わってしまいます。

(詩篇 102・25、26)

目を天に上げよ。また下の地を見よ。天は煙のように散りうせ、地も衣のように古びて、その上に住む者は、ぶよのように死ぬ。

(イザヤ 51・6)

この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことは決して滅びることがありません。

(マタイ 24・35)

しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。……しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。……そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。

(II ペテロ 3・7、10、12)

今まで見てきたように、黙示録19章17節から21節には反キリストに対するさばきが記され、黙示録20章7節から10節にはサタンに対するさばき、最後に黙示録20章11節から15節には主イエス・キリストを救い主と信じない人々に対するさばきが記されています。さばかれた人々については、彼らが主イエス様の前に何も語らず何も答えず、ただ立ち尽くしているだけであることが

聖書から読み取れます。彼らは言い訳によってさばかれるのではなく、天の書物に書かれている事実に基づいてさばかれるのです。

ここで一つの大切な問いは、イエス様の恵みの御座と「白い御座」(黙示 20・11)との間の違いは何かと言うことです。イエス様の恵みの御座はイエス様ご自身の血潮によって覆われています。この恵みの御座は、主イエス様の身代わりの苦しみについて、また提供された罪の赦しについて語っています。イエス様のもとに来る罪人は、受け入れられ、義とされます。

神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

(ローマ 3・25、26)

それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。(ヘブル 9・22)

これに対して「白い御座」は、イエス様の血潮に覆われている状態ではありません。「白い御座」は、血潮で覆われていませんから罪の赦しはありません。赤い色は身代わりとして注ぎだされたキリストの血潮を表わします。白い色は神様の聖さと義を表わします。

もう一つ大切な点は、人間は自分のわざに応じてさばかれたとき、神の前に義とされ得るのかという問題です。その答えは「否」です。絶対に、誰一人としてそのようなことはありえません。

「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」「彼らのどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。また、彼らは平和の道を知らない。」「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によつては、かえつて罪の意識が生じるのです。

(ローマ 3・10～20)

神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもつて見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

(ローマ 3・25, 26)

人間が義とされるのは、ただイエス・キリストの贖いの血潮の赦しによってのみ、可能です。もし人間が、自分のわざによって天国に入ることができるとしたら、十字架における犠牲の死はまったく不必要だということになってしまいます。さばきから逃れる唯一つの道は、イエス・キリストのもとに行つて罪を悔い改め、赦しを受けることです。

こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちようど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わつて、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。 (Ⅱコリント5・20、21)

神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。なぜなら、神は、お立てになつたひとりの人により義をもつてこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになつたのです。 (使徒 17・30、31)

新しく生まれ変わつていない人は、さばきの場に行かなければなりません。そしてそれは神からの永遠の分離へとつながります。よく言われるように、「一度しか生まれていない者は二度死ななければ」なりません。二度生まれられた者、つまり回心したものは一度だけしか死に」ません。

人間はまことの神に仕えるために神によって創られました。神により頼まないで行なうことはすべて罪として公にさばかれるようになります。神を無視した自分勝手は、どのような考えも行ないもわざも非難されます。イエス様に従順に従って行なうことだけが、永遠の実を結びます。誰でも心から望めば、きょう、神の約束のみことばに基づいて信仰に至り、信仰を通して救いの確信を持つことができるようになります。

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。
(ヨハネ 3・36)

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです。
(ヨハネ 5・24)

38 新しい神の世界

黙示録21章1節から8節まで

1 最後の場面に見られる事柄

1 最後の場面に見られるもの

・ 外側の区域——新しい天地

・ 中間の区域——天から下る都エルサレム

・ 内側の区域——神の幕屋

・ イエスの血潮
・ 神のみことば

2 最後の場面に見られない「偽る者」

・ 臆病者
・ 不信仰の者

・ 憎むべき者
・ 人を殺す者

・ 不品行の者
・ 魔術を行う者

・ 偶像を拝む者
・ 偽りを言う者

2 最後の場面に見られないもの

・ 涙
・ 死
・ 悲しみ

・ 叫び
・ 苦しみ

2 最後の場面に見られる人々

1 最後の場面に見られる「勝利を得る者」

・ 勝利を得る秘訣

・ 信仰

これから学ぶ箇所のテーマは「将来の新しい世界」です。または「新しい神の世界」、「新しい創造」ということもできます。また「神の都と永遠」、あるいは「最後の場面」などとも言えます。まず、聖書を見てみましょう。

また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渴く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。しかし、おくびよう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拜む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」

(黙示 21・1〜8)

私たちの人生には、病氣、悩み、涙などがつきまといまいます。自然は、地震、噴火、旱魃、飢饉、疫病などの脅威をもって人間に迫ります。しかし、もしそのようなことがいつまでも続くなら、それらは創造主にとって恥となることでしょう。なぜなら、創造主である神は、「すべての力は私のもとにある」とおっしゃっておられるからです。聖書は、心配や苦しみ、あるいはさばきや死についてだけ語っているわけではありません。黙示録21、22章において、私たちは「新しい創造」という神の栄光を見ることが出来ます。

最初に反キリストと偽預言者が滅ぼされます。続いて千年王国、世界の没落、死者の復活、それから最後の審判が起こります。そのあとで、新しい神の世界が登場するのです。この新しい世界とは天と地の統一であり、神と人間との純粋な曇りなき交わりを意味します。

私たちは面白い本を読み始めると、途中でやめることができなくなります。読み続けたい衝動に駆られ、いつときも待てなくなり、最後の結末を知りたいために途中を飛ばして最後の2、3ページだけを開いて読むことがあります。この21、22章もそれと同じようなもので、ここには最後の場面が描かれています。私たちは、最後の結末がどうなるのか、それを通して知ることが出来ます。

黙示録21章1節を見ると、そこではいろいろな経過説明に終止符が打たれ、それに続いてすべてのものが過ぎ去ったあとに登場する「新しい神の世界」が描かれています。これから、そこに描かれている世界を二つに分けて見ることにしましょう。第一は、この最後の場面に見られる

ものは何か、見られないものは何かということであり、第二は、この最後の場面で見られるのは誰で、見られなくなるのは誰かという問題です。

1 最後の場面に見られる事柄

1 最後の場面に見られるもの

早速、聖書の説明を見てみましょう。聖書では最後の場面は三つの区域に分けて説明されていると言えます。一番外側は「新しい地と新しい天」です。第二の区域は中間区域で、天からくだって来る「新しい聖なる都エルサレム」です。そして最後に第三の区域は一番内側の区域で人と共にある「神の幕屋」です。

・ 外側の区域——新しい天地

まず、一番外側の区域から見いきましょう。創世記1章31節を見ると、地上の始めの状態は「非常によかった」ことがわかります。ところが黙示録21章1節を見ると、ここに展開される世界は元の状態ではなく、永遠に完成された地上の新しい状態です。

どのようにして、その完成された状態が到来するのでしょうか。それについてペテロが第二の手紙3章10節から11節に記しています。「天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けて」しまうところのように、火による恐るべき破局の後に「新しい天と新しい地」が到来するのです。ペテロはこのことを理解していたわけではありませんが、神が命令なさったことを忠実に書き記していま

す。こういう事態は、たとえば原子の融合を考えると、よくわかります。現代に生きる私たちは、「原子」が全宇宙の構成要素であることを知っています。「原子核」には「陽子」と「中性子」とが恐ろしい力によって結び付けられています。そして「中性子」が連鎖反応によって解き放たれると、大変な爆発が生じ、それは地球全体を火の塊に変えてしまうほどです。全宇宙が爆発することもあるでしょう。このような恐ろしい破壊力によって確かに大変な崩壊がおこるでしょう。他にも、天体の異変など多くのことが考えられるでしょう。

しかし、このような崩壊の後で、すべてが無になつてしまうものではありません。その中から結果として「神の新しい創造」が生まれるのです。ただ創造主である神によって、「新しいもの」が生まれます。それは決して私たち人間の努力やわざによるものではありません。

イザヤ書の次の箇所にも、今存在している地球が素晴らしいものとされるといふこと、つまり、古い地上に新しい状態が現われてくると記されています。

見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。

(イザヤ 65・17)

「新しい天と新しい地」、それは黙示録21章によると、それまで存在していた地球の改善や改良では決してなく、古い宇宙の崩壊の後に生まれる「新しい創造」です。

・ 中間の区域——天から下る都エルサレム

二番目に中間の区域を見てみましょう。天から下ってくる「新しい聖なる都」、エルサレムです。「新しい聖なる都」エルサレムは、旧約時代のバベルの塔のように下から築きあげられていくものではなく、反対に天から下ってくるのです。それは人間の功績によって生まれるものではなく、主なる神が備えてくださるものです。

主イエス様がこの世を去るときに、弟子たちに向かって「新しい場所を備えておく」と約束してくださいましたが、それは新しいエルサレムのことに他なりません。おそらく千年王国の間中、新しいエルサレムは地球のはるか上に存在し、そこにはよみがえりの身体を持った信者たちが住まい、この地上においてはまだ死ぬべき身体をもった人々が住むことになるでしょう。

千年王国の時期が終わると、新しい地の創造の後で新しいエルサレムが地上に下ってきてとどまります。この新しいエルサレムは宇宙の中心点に一致するようになるでしょう。新しいエルサレムはあらゆる時代の信者たちにとって「永遠の住まい」であり、アブラハムの望みの成就でもあります。

彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。……しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥とさいます。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

(ヘブル 11・10、16)

・内側の区域——神の幕屋

第三番目は内側の区域、人と共にある神の幕屋です。創世記3章に記されている「原罪」と「墮落」以来、生けるまことの神は身を退けられました。しかしいまや、その神は目に見えるかたちで臨在してくださり、すべてのいのちの泉として存在を明らかにされます。

小羊についてはここでは特に述べられていません。というのは、ここでは永遠の状態が問題となつてゐるからです。千年王国の期間中、イエス様が支配なさり、最後の審判のときにもイエス様がさばき主となられます。しかしその後では、神がすべてのすべてとなられます。それは、神が「父」としてだけの神ではなく、「父と子と聖霊」としての神だからです。

人間と共にいることは、神の心からの望み、また目的です。すでに旧約聖書の時代に、神は荒野に設営された幕屋とソロモンの宮で、ご自身を人間に現わしてくださいました。続いて主イエス様の到来によつて、「神は私たちとともにおられる」ようになりました。

「見よ、処女がみごもつてゐる。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」
(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)
(マタイ 1:23)

ことばは人となつて、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

(ヨハネ 1:14)

五旬節以来、神は聖霊を通して、罪を悔い改めた信者一人一人の中に内住して下さつています。

このキリストにあつて、あなたがたともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。
(エペソ 2・22)

千年王国が来ると、神の御座は明らかにされ、その後で神は永遠に人と共に住んでくださいます。

これまで、最後の場面に「見られるもの」について聖書を見てきましたが、次に最後の場面「見られなくなるもの」について考えてみましょう。

2 最後の場面に見られないもの

最後の場面で、もはや見ることのできなくなるものとは、何でしょうか。

すでに述べられたように、そこには以前の天と以前の地、また海も存在しません。そして他にも五つの事柄が存在しないことが21章4節に記されています。

・涙

第一に、涙はもはや見られなくなります。

この地上ではどれだけ多くの涙が流されていることでしょうか。ダビデも、パウロも、そしてまた主イエス様も血のような涙を流されました。

私の涙は、昼も夜も、私の食べ物でした。人が一日中、「おまえの神はどこにいるのか。」と私に言う間。
(詩篇 42・3)

私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。

(使徒 20・19)

ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。

(使徒 20・31)

キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かつて、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。

(ヘブル 5・7)

今も地上のいたるところで涙、悲しみ、苦しみが見られます。心配のために、また失望のゆえに、あるいは人に裏切られたことにより、あるいは強い憧れゆえに、そして悔い改めの時に涙が流されます。しかし最後の場面では、もう涙は見られないのです。

・死

第二に、もはや死もありません。死は罪の支払う報酬です。新しい地においては罪がないので、当然死も存在しません。千年王国の時代には、まだ死の可能性が存在していましたが、新しい地においてはもはや死は存在しなくなります。

・悲しみ

第三に悲しみも、もうありません。

いかなる死も罪も存在しないのですから、悲しみも存在しなくなります。神の喜びがすべての人間に満ち溢れます。「あなたの御前には喜びが満ち」とダビデは言いました。新しい地では人間はいつも神と共にいますから、「喜び」が満ちています。私たちが「常に神と共にいる」ことができるというのは、何と幸いなことでしょうか。

・叫び

第四に、もはや叫びも存在しません。アベルがカインによって殺された時、アベルの血は「叫んだ」（創世4・10）と聖書は言っています。ヨセフは兄弟たちによって穴に放り込まれた時、心の中で叫んだことでしょう。しかし、そのようなことはもう新しい地においては存在しないのです。

・苦しみ

第五に苦しみも、もうありません。肉体的、精神的苦しみはもう存在しません。仕事や家族、病氣、人間関係などで人々はどれだけ苦しみ、悩んできたことでしょうか。しかし、新しい地においては、曇りのない幸せがすべての中に息づくのです。

来るべき栄光については具体的には記されていません。パウロもヨハネもそれは書き記すことができませんでした。ですから、「もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。」としか表現することができなかつたのです。

21章5節に「御座についておられる方が言われた。『見よ、わたしは、すべてを新しくする。』」とあります。第一の創造は神の全能なるみことばを通して行なわれました。新しい世界の創造もまた、神はみことばを用いて成就なさいます。

6節に「ことは成就した。」と書いてあります。神のみことばは必ず実現します。創世記を見ると、「神は語られた。するとそのようになった。」と記されています。十字架の上で主イエス様もまた、「完了した。」と叫ばれました。主イエス様はアルファでありオメガです。はじめであり、終りです。主イエス様は全能のお方であり、ご自身の計画を間違ひなく遂行なさいます。人間の努力によってではなく、神の御手のわざによって新しい始まりが出現します。

新しい始まりは、すでに今、自分の罪を悔い改めて個人的にイエス様を受け入れる人は誰でも、経験することができます。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

(Ⅱコリント 5・17)

彼(アブラハム)は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。

(ローマ 4・20、21)

アブラハムだけではなく、黙示録の著者ヨハネもまた、この確信を持っていました。ヨハネは、

現実には自分の目の前に死んだもの、枯れたもの、希望のないものしか見ることができませんでしたが、神のみことばを聞くことにより、神がご自身のみことばの約束を必ず成就し、まったく新しいものを創造なさるということを確信しました。

これまで、最後の場面に見られるもの、見られないものを見てきました。次に、この最後の場面に見られる人と見られない人について考えてみましょう。

2 最後の場面に見られる人々

1 最後の場面に見られる「勝利を得る者」

この最後の場面に見られるのは、「勝利を得る者」(7節)です。

主はもはや「わたしのところに来なさい。わたしがいのちの水をあげよう」と言って私たちを招くことはなさいません。代わりに最後の場面、黙示録21章6節では「渇く者にはいのちの水の泉から、価なしに飲ませる」とおっしゃいます。現在この地上においては、人間は神から離れてしまっていますから、主は「わたしのところに来なさい」とおっしゃるのです。しかし、新しい地においては主と人間は共にいるので「来なさい」という主の招きは必要なくなります。主ご自身が泉そのものなのです。人間は泉そのものである主と共にいることが許されています。主ご自身すでにこの地上において、人間は渇き、つまり神に対する飢え渇きをもっています。

鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。

(詩篇 42・1)

パウロもまたこの飢え渴きをもっていました。

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かつて進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

(ピリピ 3・12～14)

しかし、この飢え渴きは黙示録21章において完全に満たされました。目標は到達されました。勝利者は永遠に神と共にあり、すべての願いは満たされ、あらゆる憧れは満たされました。

これは人間の功績ではなく、神の恵みによるものです。「価なしに」ただで飲ませると主がおっしゃっておられます。他の聖書の箇所にも、主によって「価なしに与えられる」事実が記されています。この世界では、「ただで」与えられるものは、まったく価値の無いものか、あるいはお金で買うことのできないものかのどちらかです。しかし、「価なしに、ただで与えられる」ということばは、福音全体を通して表現されているすばらしいみことばです。私たちはいくら努力しても、自分の力によっては救われません。

ああ。渴いている者はみな、水を求めて出て来い。金のない者も。さあ、穀物を買って

食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買ひ、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。

(イザヤ 55・1)

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

(ローマ 3・24)

ところで7節にある「勝利を得る」とはどういうことでしょうか。「勝利を得る」ということは黙示録2、3章の中に出てくることばですが、それは決して罪のない状態を意味するものではありません。罪と無縁の状態は21章においてはじめて実現します。「勝利を得る」とはイエス様から引き離されないこと、つまりすべての罪と悩みをもってイエスのもとに避難することです。「勝利を得る」とはイエス様の導きを疑わず、自分の考え、感情、意欲のすべてを否定し、すべてを主イエス様に明け渡し、ゆだねることです。いずれにしても「勝利を得る」ことは、人間が自分の力や功績によってできることではなく、ただ神の恵みのみによるのです。ですから、7節には「相続する」ということばが使われているのです。人は罪人として、「罪の赦し」という恵みの贈り物を受け取ることによって、「相続人」となるのです。「勝利を得る」者についての約束は黙示録2、3章に記されていますが、それらのすべてが、ここの7節に集約され記されています。

「勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」

(黙示 2・7)

「勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。」（黙示 2・11）

「わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」（黙示 2・17）

「勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。」（黙示 2・26）

「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表わす。」（黙示 3・5）

「勝利を得る者を、わたしの神の聖所の柱としよう。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上にわたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書きしるす。」（黙示 3・12）

「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」
(黙示 3・21)

これらがすべて黙示録21章7節に要約され、まとめられています。「相続する」とは、主なる神のご性質と財産にあずかること、そして主なる神と共に働くことです。

もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光とともに受けるために苦難をともししているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。
(ローマ 8・17)

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありますか。
(ローマ 8・32)

主は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。
(詩篇 16・5、6)

私たちは主イエス様を自分自身の、また世界の救い主として受け入れていますから、神の子ど

もです。そして神の子どもとは、とりもなおさず神の「相続人」であることを意味します。

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

(ヨハネ 1・12)

私たちが神の子どもと呼ばれるために、——事実、いま私たちは神の子どもです。——御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょうか。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

(Iヨハネ 3・1〜3)

・勝利を得る秘訣

では、一体いかにして「神の相続人」、つまり「勝利を得る者」となることができるのでしょうか。その秘訣は何でしょうか。それは、「信仰」、「イエス・キリストの血潮」、「神のみことば」の三つが鍵となります。

・信仰

なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、

世に打ち勝った勝利です。

(Iヨハネ 5・4)

私たちの信仰こそが、世に打ち勝った証拠なのです。しかし信仰は神様からの贈り物に他なりません。私たちが信仰を持つことができるのは、神様の恵みを受け、世に勝利したからこそです。

・ イエスの血潮

兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。

(黙示 12・11)

兄弟たちは小羊の血のゆえに悪魔に打ち勝ちました。つまり、人間の努力によってではなく、主の恵みによって、イエス様の血潮によって、悪魔に打ち勝つことができるのです。

・ 神のみことば

黙示録12章11節にはまた、「あかしのことばのゆえに」兄弟たちは打ち勝ったと記されています。神のみことばに信頼する者は勝利を経験します。

意識して眼差しを主イエス様に向け、主イエス様に従う人、その人こそが勝利を得る者です。また日常生活において何があっても、主イエス様と結びついて主イエス様に頼る人です。従って勝利を得るとは「激しい戦い」を伴うものです。主イエス様を見上げるといふことは、みこと

ばと約束だけに信頼し、自分の考え、感情、意欲を頼みとしないことです。勝利を得る者もはや自分の力で勝利を得ようと試みることはしません。勝利を得る者とは主イエス様のみこころを自分の思いとする者です。

2 最後の場面に見られない者「偽る者」

さて、最後の場面に登場するのは「勝利を得る者」であることを見ましたが、ここからは「最後の場面には登場しない者」のことを考えてみましょう。

主イエス様に背を向け、相変わらず罪の中に生活し、結局は悔い改めることなしに死んでいく人々は一切ここに登場しません。前に見た黙示録2、3章に記された七通りの勝利を得る人々に対立するものとして、21章8節に七通りの敗北者のグループが記されていますが、これらの人々は最後の場面に登場することができません。

私たちもまたここで一つの分かれ道の前に立つこととなります。永遠に神と共にいることが許されるか、あるいは永遠に神から離された状態にとどまらなければならないかのどちらかです。ではここでその七種類の敗北者たちを見てみましょう。

・臆病者

するとアグリッパはパウロに、「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている。」と言った。

(使徒 26・28)

「臆病者」とはアグリッパ王のような人間です。救いの道を知っており、「あなたはわずかなことばで私をキリスト者にしようとしている」と言いながら、信者になったあとで出てくるいろいろな問題や困難を思い、決断しないような人間です。優柔不断な臆病者はいつもあいまいな態度をとり、はっきりとした決断をくだすことができませんし、またしたいとも思いません。

エリヤはみなの前に進み出て言った。「あなたがたは、いつまでどっちつかずによるめていているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。」しかし、民は一言も彼に答えなかつた。

(I列王 18・21)

これらの人々は臆病の霊をもっていましたので救いを拒みました。このような人々は、この世を恐れ人の目を恐れます。そして目に見えるものに縛られて、目に見える世界によって動かされ支配されます。主なる神は自分に属する者に恐怖の霊をお与えになることはありません。

苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。

(IIテサロニケ 1・7)

主イエス様を救い主として、また主として告白することを恐れる者は災いです。

・不信仰の者

第二は不信仰の者たちです。例えばエジプトのパロは神の力と恵みを知ってはいましたが、神を信じ従おうとはしませんでした。神のことは聞きながら、それを自分のものとして受け取らない者は救いを経験することができません。

ノアの時代にいたような人々は、救いの福音を聞きながらそれをあざ笑い、自分勝手な道へ行っ
てしまいます。そのような人々は、ロトの妻のように信仰の道を歩み始めても長続きしません。
確かに同じようなことを行なっても、それが本物ではなく、心からの回心に基づいたものでない
限り長続きしないことは明らかです。

・憎むべき者

第三は憎むべき者、あるいは汚れている者と言ってもいいでしょう。主イエス様の血潮によっ
て聖められていない汚れた者は最後の場面に現われません。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、…

(ローマ 3・23)

怠慢な者もまた汚れた者に属します。

こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人
の罪です。
(ヤコブ 4・17)

「私の罪は赦され、私の汚い過去は消されている」と言うことのできる人は幸いです。

・人を殺す者

第四は人を殺す者です。罪は文字通り積み重なってますます大きなものとなります。臆病者は不信仰の者となり、かつては真理であると認めていたことを拒絶し、その結果いろいろな罪を犯し汚れた者となります。そして置かれた環境しだいでは人をも殺してしまいます。

カインはかつては神を信じていました。そして神に捧げ物を捧げていましたが、結局殺人を犯してしまいました。墮胎、つまりお腹の子どもをおろすこともまた殺人です。また、結婚していながら自分のことしか考えず、自分勝手な道を行く者もまた人を殺す者のグループに属します。人を憎む者もまた人殺しです。

兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。

(Iヨハネ 3・15)

・不品行の者

第五は不品行の者です。これは情欲に支配された者すべてです。結婚生活以外の性交は罪であり、罰せられます。そして主に対してはつきりとした態度をとらない者もこの群れに属します。

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。

世の友になりたいと思つたら、その人は自分を神の敵としているのです。

しかし聖書の中には、かつては不品行だった者が主なる神の恵みによってまったく新しい者へと創りかえられた多くの例があります。例えば旧約聖書ではタマル(創世記38章)やラハブ(ヨシヤ2章)がそうです。また主イエス様の足に口づけした罪深い女(ルカ7・37)や、ヤコブの井戸のそばで主イエス様に声をかけられたサマリアの女(ヨハネ4・7)などもあります。これらの人々は、主のあわれみにより、罪を赦され、主にあつてまったく新しい者になりました。

・魔術を行なう者

第六は魔術を行なう者です。先祖崇拜も、結局は悪霊崇拜になりますから、これに含まれます。下からの悪霊の力の助けを借りる者も、このグループに属します。

・偶像を拜む者

第七のグループは偶像を礼拝する者です。ただ一人のお方、天地創造の神様以外を拜むことは、偶像を崇拜することです。

ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。

(コロサイ 3・5)

「むさぼり」もまた、偶像崇拜です。心から主なる神を愛さない者は偶像を拜む者です。

そこで、イエスは彼に言われた。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなた
の神である主を愛せよ。」
(マタイ 22・37)

・偽りを言う者

これら七つの種類に属する人々は、一言で言えば、「すべて偽りを言う者」です。主なる神様の前に、へりくだって頭を下げたくない者たちです。こういう人々は本当のもの、基準となるもののすべてを逆さまにして、ただ単に嘘をつくだけでなく、行なうことも偽りそのものです。なぜなら、彼らは神の真理を受け入れたくないからです。百パーセント真理でないものはすべて嘘です。たとえそれが方便や困った状況などのために使われたのだとしても、それは偽りです。すべての欺瞞、偽善は罪であり、欺きです。聖書はすべての人間は偽り者である、と言っています。ですから、神はすべての人が立ち返って真理を認めるに至るよう望んでおられるのです。

私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのことはばを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。
(1テサロニケ 2・4、5)

確かに滅びに至る道はたくさんありますが、救いに至る道は一つだけです。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

(使徒 4:12)

愛の神はきょうもなお罪人に呼びかけておられます。「罪を悔い改めて福音を信じ、主イエス様を受け入れ救われなさい」と。

すべての人が、一体どういう人が新しいエルサレムに入り、どういう人が入れないかを知るべきです。私たちはこの事実、つまり「救われたい者が救われ」、「救いの必要を認めない者は救われない」という事実を恐れることなく、すべての人に宣べ伝えなければなりません。主なる神との和解をし、主のみことばと救いを自分のものとした人々は、永遠に神と共にいることを許されます。しかし、主イエス様とその救いのみわざを受け入れずに拒む者は、つまり自分の罪を告白したくないと思っているすべての人は、「第二の死」を経験することになります。

「第一の死」はアダムが罪を犯した結果、与えられたものでした。全人類にとつてそれは肉体的な死と神から離れた状態を意味しています。

「第二の死」は自分の罪の結果として与えられるものです。その人自身が主イエス様の贖いを拒んだことの結果です。その結果は神様から「永遠に」離されたままで、本当に恐ろしい状態と

なります。

こうして主イエス・キリストに対する人々の態度によって、あらゆる人間の運命が決定されます。だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

(Ⅱコリント 5・17)

割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なものは新しい創造です。

(ガラテヤ 6・15)

「古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」。これこそが、真の喜びの根拠です。私たちは黙示録の中で非常に恐ろしい場面、戦い、苦しみ、破局を見てきました。しかし、今ここでは、最後の最後、つまり主が「見よ、わたしはすべてを新しくする」という場面を見ることができます。世界はまったく新しくなり、主が人と共におられ、世界には死や苦しみがなく、いのちが満ち溢れています。これはヨハネの熱狂的な幻想では決してありません。全地全能なる神にしてはじめてすべてを新しくすることが出来るのです。主はただ単に創造者であるばかりではなく、「完成者」でもあられます。

39 小羊の妻である花嫁、新しいエルサレム

黙示録21章9節から22章5節まで

1 聖なる都

2 聖なる都の記述

1 神の栄光の輝き

2 高い城壁と門

3 大きさと形

4 都の材料

3 聖なる都での生活

1 神殿がないこと

2 太陽、月がないこと

3 地の王たちの礼拝

4 都にはいれる者

4 約束の楽園

1 いのち

2 都の市民

この章の主題は、「小羊の妻である花嫁」あるいは「新しいエルサレム」です。これを「聖なる都」、「聖なる都の記述」、「聖なる都での生活」の三つの点に分けて考えていくことにしましょう。まず、聖書の箇所を見ましょう。

また、最後の七つの災害の満ちているあの七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりが来た。彼は私に話して、こう言った。「ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。」¹⁰そして、御使いは御霊によつて私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下つて来るのを見せた。

都¹¹には神の栄光があつた。その輝きは高価な寶石に似ており、透き通つた碧玉のようであつた。都には大きな高い城壁と十二の門があつて、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあつた。東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があつた。また、都の城壁には十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の十二の名が書いてあつた。また、私と話していた者は都とその門とその城壁とを測る金の測りざおを持っていた。都は四角で、その長さと同幅である。彼がそのさおで都を測ると、一万二千スタディオンあつた。長さも幅も高さも同じである。また、彼がその城壁を測ると、人間の尺度で百四十四ペーキウスあつた。これが御使いの尺度でもあつた。その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサ

ファイヤ、第三は玉髓、第四は緑玉、第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髓、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。また、十二の門は十二の真珠であつた。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通つたガラスのような純金であつた。

私は、この都の中に神殿を見なかつた。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。都には、これを照らす太陽も月もいらぬ。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。諸国の民が、都の光によつて歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。こうして、人々は諸国の民の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りとを行なう者は、決して都にはいれない。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、はいることができる。

22 御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の兩岸には、いのちの木があつて、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあつて、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは永遠に王である。

1 聖なる都

私たちはこの前の21章1節から8節までの箇所で「新しい神の世界」の「永遠の状態」を見ました。つまり、「神がすべてのすべてである」ということです。ここ9節からは「永久に続く聖なる都」について記されています。しかもそれは黙示録17章と対立したものとして記されています。17章5節でヨハネは「大バビロン」を見せられました。ここでは「新しいエルサレム」を見せられています。

バビロンは一つの都ですが、一人の女にたとえられており、それは「淫婦」に他なりません。この都にいるのは、獣である「反キリスト」を拜む人々すべてです。一方エルサレムもまた一つの都で、同じく一人の女にたとえられています。それは「小羊の妻である花嫁」、つまり主イエス様に属するすべての人々です。このことについては、すでに21章2節に述べられています。

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

(黙示 21・2)

2 聖なる都の記述

黙示録21章11節から21節にこの都についての記述があります。

この都はすべての時代を通して、あがなわれた者の「永遠の故郷」です。あらゆる時代の信仰者は、このような都を霊において見ていました。

彼（アブラハム）は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。
（ヘブル 11・10）

しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。
（ヘブル 11・16）

私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。
（ヘブル 13・14）

「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」
（ヨハネ 14・1〜3）

1 神の栄光の輝き

この都には神の栄光が満ちています。旧約時代の信者たちすべて、そして携拳によって天に引

き上げられた人々すべてがこの都に住みます。神のご臨在を示すものは栄光です。旧約時代に神はしばしば雲の中に、ご自身を現わされましたが、この都では表現することのできないほど明るい光の中に、ご自身を現わされます。この都が天から下ってくるということは、神によって実現されるのですから、神こそがこの都の建設者です。この都は聖なる天的な都です。

旧約時代、至聖所には灯りがなかったので信仰者たちは見通すことができませんでした。しかし聖なる都は光に満ちていて、すみずみまでも見通すことができます。旧約時代には神は姿を隠しておられましたが、聖なる都ではご自身を現わしてくださいませ。何と幸いなことでしょう。

2 高い城壁と門

都の城壁は七十メートルの高さがあります。この城壁によって全ての悪は閉め出されています。それはとりもなおさず悪からの絶対的な分離と絶対的な安全を意味しています。

都には東西南北の四方向に三つずつ、あわせて十二の門があります。つまり、すべての方向に向かつて、この都から「光といのち」、「義と平和」が出ています。都の名前は「エルサレム」であり、ここにこそ平和の場、「神の御座」、「神の住まい」があります。十二の門には十二人の御使いが、都の聖なる天的な性質を護るため、またそこに住む人々を護るためにいます。

14節を見ると、城壁には十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の名前が書いてあることがわかります。これは、この都に住む人々が主イエス様の血潮によって洗い聖められていることを意味しています。

3 大きさと形

この都の規模を私たちは想像することが出来ません。エゼキエル書によるとこの都の大きさ、縦、横、高さ、(深さ)はそれぞれ二千二百二十キロメートルあり、それは巨大な立方体をなしています。

このうち、縦横五百キュビトの正方形を聖所に当て、その回りを五十キュビトの空地にしなければならぬ。

(エゼキエル 45・2)

その大きさは次のとおりである。北側は四千五百キュビト、南側は四千五百キュビト、東側は四千五百キュビト、西側は四千五百キュビトである。

(エゼキエル 48・16)

ソロモン王が建てた至聖所も立方体をしていました。

内堂の内部は、長さ二十キュビト、幅二十キュビト、高さ二十キュビトで、純金をこれに着せた。さらに杉材の祭壇にも純金を着せた。

(I列王 6・20)

この聖なる都の立方体は、完全な形をしています。

その高さは世界最高峰エベレスト山(八千八百四十八メートル)の約二百五十倍もの高さを持ち、それは私たちの想像を絶する大きさです。もちろんここではどのくらいの数字の大きさであ

るかを知ることが問題なのではありません。私たちの想像を遙かに超えた、神の栄光と神聖さを持つた大宇宙が存在するのを知ることが大切です。

4 都の材料

都に使われている材料の輝きは、私たちがかつて見たことがないほど燦然とした輝きです。例えば、城壁は七十メートルの高さがあり、全部で八千八百八十キロメートルの長さがありますが、その全体はすべて寶石で出来ています。あまりにも輝かしくて、その美しさはほとんど想像不能です。都の大通りは純金でできており、ガラスのように透き通っています。そのような金は、今日まで発見されていません。このことは私たちにとって、次のことを意味しているのではないのでしょうか。私たちもまた純金のように聖められなければならず、私たちの信仰が一層精錬されなければならぬということです。

見よ。わたしはあなたを練ったが、銀の場合とは違う。わたしは悩みの炉であなたを試みた。
(イザヤ 48・10)

信仰の試練は、火を通して精練されてもお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と栄光と栄誉に至るものであることがわかります。

(一ペテロ 1・7)

「聖くなければ、だれも主を見ることができません」(ヘブル12・14)と聖書に記されています。ところが私たち信仰を持つ者の間にも、なんと多くの間違い、不寛容、さばき、不純、どん欲、心配、不信仰、恨みなどがあることでしょうか。

どのような罪も光の下に出されなければなりません。そうでなければ聖められることもなく、主との交わりもありません。

もちろん、主を信ずる者は誰でも神の子どもであり、イエス様にあつて義とされています。そして永遠のいのちをもっています。しかし私たちの内側には、まだ罪の性質が残っており、私たちを取り巻く環境は悪魔の支配下に置かれています。それによつて主との交わり、ほかの信者との交わりがどれほどしばしば断たれてしまったことでしょうか。ですから私たちは自分自身を吟味し、日々、主に明け渡すことのできない自分を聖めていただくことが必要です。

「新しいエルサレム」の道が、透き通つたガラスのような純金でできていることが意味するのは、「交わり」です。つまり、新しいエルサレムにおいては神と人との、また、信者同士の完全な交わりがあり、決して妨げられることがなく、中断されることもない、従つて終わることのない交わりが実現されます。

都が寶石でできているという記述は、神の栄光に満ちた都の輝かしい美しさについて、その一部を私たちに想像させてくれます。そして、尺度の一致と材料の多様性の記述は、実際の姿を示唆するものにすぎませんが、「統一」と「多様性」という、神の誉れ、神の栄光を反映するものです。

3 聖なる都での生活

最後に黙示録21章22節から22章5節に記されている第三の点、「都の中での生活」を見ることにしましょう。

1 神殿がないこと

21章22節を見ると、この都には神を礼拝する場所としての神殿がありません。地上でのように、祭壇のある宮を通つて神に間接的に近づくことはもはや必要がなくなつたからです。というのは、贖われた者たちは神へ直接接する道が開かれ、それを許されているからです。全能なる神と小羊なるキリストは、彼らと共に住んでくださいます。

贖われた者たちは、地上において神の住みたもう「神殿」であり「聖霊の宮」でしたが、「新しいエルサレム」においては「至聖所」のような存在であり、神ご自身がここに住みたもうからです。

「小羊の花嫁」こそ、神の宮、つまり神殿です。神は幕屋も覆いもなしに神殿の中心におられます。神ご自身が神殿です。この都の聖所はイエス・キリストを通して明らかにされた神であり、霊とまことをもって礼拝されるお方です。

この「新しいエルサレム」こそが、すべてのすべてであられる神がご自身を啓示してくださる場であり、ここだけが啓示の場です。そして、次のみことばが成就します。

しかし、万物が御子に従うとき、御子自身も、ご自分に万物を従わせた方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。 (Iコリント 15・28)

まことに、水が海をおおうように、地は主の栄光を知ること満たされる。

(ハバクク 2・14)

「新しいエルサレム」において完全に一致した人類は、たゆまず贖い主と創造主を賛美し、心から主を愛し、絶えず主を仰ぎ見つめています。ですから神殿はもはや必要ありません。

2 太陽、月がないこと

都には光の源としての太陽も月も要りません。太陽と月はこの世界にとつては、現在のところ昼と夜の支配者であり、間接的な神の秩序を護るしもべです。しかしこの状態はなくなりません。なぜなら、神ご自身が光としてすべてを照らされるからです。そして、主が中心におられる新しい都から、千年王国の期間中の地上もまた照らされ、いたる所に神の栄光が照り渡ります。

3 地の王たちの礼拝

24節の光景は前に見た17章と対比することができます。17章では「大バビロン」に支配される王たちがいましましたが、ここ21章には、真心から主なる神を拝む地の王たちが記されています。す

べては主なる神の栄光を誉めたたえるために行なわれます。神の權威があがめられ、賛美されるのです。

また「新しいエルサレム」の門は閉められる必要がありません。というのは、敵はすべて滅ぼされたからです。主なる神は永遠に人間と結びついておられます。

新しい都においては、キリストにあつて一つにされた人々のみが存在し、彼らは自由の身とされ、喜んで救い主に仕えます。

4 都にはいれる者

27節を見ると、小羊のいのちの書に名前が書かれている者だけが、この新しい聖なる都エルサレムに入ることができる、と再び書かれています。

私たちは世の罪を取り除くために来られた「小羊なるイエス・キリスト」のことを思い起こします。この小羊にこそ、礼拝が捧げられるべきです。主イエス様はご自身を捧げることによって、私たちが人間の罪を取り去ってくださいました。

主なる神が遣わされた「小羊なるイエス・キリスト」を救い主として信じ、十字架で行なわれた救いのみわざを信頼するものはすべて、自分の名前が小羊のいのちの書に書き記されているという確信を持つことができます。このことは、彼らに新しいエルサレムで栄光の座に着く権利を与えます。

主なる神は絶対に罪と関係を持つことができません。しかし、主なる神は、罪人を赦したいと

願っておられます。ただ、罪から離れ、罪を去り、罪を憎むことだけが条件とされます。罪は「新しいエルサレム」の外におかれます。

私たちは罪から離れて新しいエルサレムへの入口を見いだすことができるでしょうか。それとも罪の中にとどまり、聖なる都から閉め出されてしまうことになるのでしょうか。

今日、罪を告白して主イエス様を受け入れる人は、自分の名前が小羊のいのちの書に記録されており、決して消されることがないのを知ることができます。

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。
(ヨハネ 1・12)

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からのちに移っているのです。
(ヨハネ 5・24)

4 約束の楽園

22章1節から5節は、最後の場面の描写です。「新しい都」において、主なる神の目的が達せられたのであり、人間は生ける神のもとに立ち返ったのです。その神は今や人間と共に住んでくださいます。失われた楽園に対する人々の郷愁は、今や全く満たされています。

1 いのち

「新しい都」の特徴が「光」と「神聖」であることは今まで見てきたとおりです。ここにもうひとつ付け加えられる特徴は「いのち」、つまり永遠のいのち、神のいのち、新しいいのちです。「光」と「いのち」はいっしょになっています。

この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。(ヨハネ 1・4)

1、2節には「いのちの水」と「いのちの木」について記されています。神が約束された楽園は、実は千年王国ではなく、「新しい都」です。「新しい都」とは、神と人間との完全な交わり、そして、人が妨げられることなく神と共にいることを意味します。

主イエス様は、来べき聖霊のことを「いのちの水」にたとえられました。

「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」(ヨハネ 7・38)

ですから私たちはここで、「三位一体」なる神が前面に出てこられるのを見ることが出来ます。つまり「神」と「小羊」と、いのちの泉である「聖霊」です。

黙示録4章5節に、神の「御座からいなずまと声と雷鳴が起こった。」と記されていますが、それはとりもおさず、さばきのことを意味しています。しかし、それはもはや過去のこととなり、さばきは終わりました。今からは、「絶えることのないいのち」が神の御座から流れ出るので

「原罪と墮落」以来、人間は樂園から追放されました。そして、「いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣が置かれ」（創世記3・24）ました。

しかもこの剣は、主イエス様の心を刺し通しました。そのことよって、主イエス様は、全人類の罪の債務をご自身の上に負ってくださり、十字架の上でいのちを捨ててくださいました。主イエス様の贖いの死によつて、へだてとなつていた幕が裂かれ、御座に近づく道が開かれ、いのちの水が、つまり、罪の赦し、神との平和、永遠のいのちが、提供されるようになったのです。

「その木の葉は諸国の民をいやした」（黙示22・2）と言う表現は何を意味しているのでしょうか。ヨハネが見たのは、全く新しくされた創造であり、そこにはもはや古い物がないことは明らかです。もう、死も、嘆きも、苦しみ、叫びも、呪い、涙、飢え渇きも不自由も、病氣も夜も存在しません。

諸国民は新しい都の光を享受します。諸国民は喜びながら、新しい都の与える光の内を歩み、新しい都のいのちを持ちます。

しかし、「永遠のいのち」は人間が自分の所有物として受け取り、神から離れて享受できるものではありません。「永遠のいのち」はいのちの泉そのものに対する絶えることのないより頼みです。ですから大切なことは、神と小羊の御座から出てくるいのちの水を、絶えず恵みにつぐ恵みとして受け取ることです。

聖書の中には、「健全な」教え、「健全な」ことば、「健全な」信仰という表現が出てきます。諸国民がいやされたということは、諸国民が「健全に」なったということです。もはや神から離

れている人間は一人もなく、すべてが神との調和の中におかれています。ここに私たちは、楽園が回復されたことを見いだすことができます。実際私たちは、楽園以上のものを持っているのです。というのは、そこにはもはや、誘惑してくる蛇や死ぬ可能性、神の神聖さを損なうものは何も存在しないからです。

黙示録 21、22 章と創世記 1、2 章は、驚くほどよく似ています。ここにおける人間は、罪を知らない人間であり、いのちの木やいのちの水があり、人間が支配し、神が人間と共に住みたくもうと記されています。しかし、異なる点もあります。創世記には、罪の危険、悪魔の攻撃、神の戒めと禁止がありますが、黙示録 21、22 章には、人間が罪から守られていること、悪魔は火の池に投げ込まれてしまったこと、救われた人々が喜んで神に仕えていることなどが記されています。創世記における楽園が確かなものであったと同じように、黙示録の楽園も同じ確かさをもって現実となります。もはや、罪も呪いも存在しません。新しいエルサレムは、新しい地へと天から下ってきて神の御座の場となるのです。

2 都の市民

聖なる都の市民について、五つの特徴が述べられています。

・ 神に仕える

3 節に「そのしもべたちは神に仕え、」とあります。つまり、彼らはただ神にだけ仕えるのです。これは大切なことです。私たちの心も、今、すでに、ただ主イエス様だけに向けられているべき

です。

いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。

(ガラテヤ 1・10)

何をするにも、人に対してではなく、主に對してするように、心からしなさい。

(コロサイ 3・23)

祭司として仕える役目は大切ですが、最も重要なことは、主なる神を心から崇拜することです。神様だけを主としてあがめる時、人間は罪と自我と悪魔の支配から完全に解放された状態におかれます。主にだけ仕えることができる特権を持つとは、何というすばらしい生き甲斐でしょうか。それによつて人間は初めて、本当に人間らしいものとなり、全身全霊を尽くして神に仕えることができます。これが「ヘブル人への手紙」4章に約束されている「安息」であり、何の心配もなく、主に仕えることが許されている状態です。

その奉仕は神と小羊に対してなされるものですが、仕える対象の「神」が単数形になっていることに注意しましょう。つまり、神と小羊とは密接不可分の関係にあつて、神の御座はとりもなおさず小羊の御座であり、そこで一つとなつて支配しておられるのです。

・御顔を仰ぎ見る

4節に、しもべたちは「神の御顔を仰ぎ見る。」とあります。今の世の中で、目に見えるものではなく、目に見えないものに目を留めることはなんと難しいことでしょうか。「主だけを見る」ということは、すべての真の信者が抱く心からの願いです。今、私たちは主につながり、主と同じいのちを持ちながら生きることが許されており、それはこの世の何物とも比べようもないほどの喜びです。

しかし、私は、正しい訴えで、御顔を仰ぎ見、目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう。
(詩篇 17・15)

その時、主なる神との交わりはすこしも妨げられることはありません。黙示録20章11節によると、先に創造されたものは「地も天もその御前から逃げ去つてあとかたもなくなり」ます。そして、新しく創造されたものが主なる神の御顔を仰ぎ見ます。

・額に神の名がついている

4節後半には、「彼らの額には神の名がついている。」と書かれています。

今、私たちの周囲にいる多くの人々の顔は心配と罪の影を宿しています。至る所で、望みがなく喜びのない顔に出会います。しかし、聖なる都の市民の顔には神の栄光が反映しています。今日も、そのように信者の顔を通して神の栄光を見ることができはります。私たち信者から、言葉においても、行ないにおいても、イエス様が明らかに読みとられなければなりません。イエス様がお考へになるように考え、イエス様がお信じになるように信じ、イエス様が望まれるように

望む信者であるべきです。神の名前が私たちの額につけられているということは、深い意味をもっています。というのは、名前は本質を現わすものだからです。私たちは主の似姿に変えられるのです。

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

(Iヨハネ 3・2)

ここで、この聖句と創世記3章5節とを対比させて見てみましょう。創世記3章5節では、蛇である悪魔が女をそのかして、「あなたがたが神のようになる」と言ったことが記されています。悪魔の言葉は、「被造物なる人間が神になり、神の御座に着く」ことを意味しています。これは悪魔の惑わしであり、偽りでした。

一方、第1ヨハネ3章2節のほうは、「私たちはキリストに似た者となる」と告げています。これこそが神のご目的です。「キリストに似た者となる」というのは、私たちが神にふさわしい相手となること、主と交わりを持ち、主イエス様と一つになることを意味します。

悪魔の誘惑と偽りの言葉は、神の目的と似ていますが、本質的に正反対のものであることに注意しなければなりません。

・主が彼らを照らされる

5節を見ると、「神である主が彼らを照らされる」とあります。もはや夜は存在しません。神の都には夜がありませんし、神のしもべたちを見て暗い面がありません。

今の時代は聖書で次のように言われています。

夜はふけて、昼が近づきました。

(ローマ 13・12)

まもなく、神のしもべたちは神の御顔を拝し、神の御顔が彼らを照らされるのです。これは次の聖書のみことが成就することを意味しています。

それで、主は、私たちがこのすべてのおきてを行ない、私たちの神、主を恐れるように命じられた。それは、今日のように、いつまでも私たちがしあわせであり、生き残るためである。私たちの神、主が命じられたように、御前でこのすべての命令を守り行なうことは、私たちの義となるのである。

(申命記 6・24、25)

主イエス様との永遠の純粋な交わり。それは何という幸いでしょうか。

・永遠の王

5節の終わりに、「彼らは永遠に王である」と記されています。つまり神のしもべたちは永遠に主と共に支配するのです。

また、私たちが王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。

キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。

(黙示 1・6)

私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。

(黙示 5・10)

彼らは地上を治めるというのは、人間に対する支配ではなく、自然に対する支配であり、これが常に神の目的でした。罪によってアダムはこの権利を失いましたが、それはいつか実現されるものです。その条件は、人が救われて神の御姿に似た者とされることです。

21、22章で、私たちは新しい自然法則を持った新しい世界を見ます。夜と闇はすべてなくなり、主イエス様がいのちを与え、それを豊かにするために来られたことが、このとき明らかにされます。もはや反抗や苦勞、虚しさはありません。主を見ること、主に仕えることは、自らを主に捧げ、喜んで主に仕えるしもべに永久に与えられる特権です。「永遠のいのち」は、光の中を歩む人生、また本当の幸せに満ちた生涯、そして、神との交わりの中にある人生です。

ここで、今まで見てきた「新しい都」について、もう一度まとめてみることにしましょう。

第一に、「新しい都」は、人類が願って止まない、一致と交わりに対する憧れの実現です。人間は一致と交わりに憧れています。すでにバベルの塔の建設の歴史が、そのことを語っています。しかし、人間のあらゆる努力は呪いと分裂に終わりました。今日に至るまで、人類は不一致と分裂の歴史を克服できていません。

第二に、人間は公明正大さに憧れています。しかし今日、すべては曖昧であり、嘘と偽善が人間を支配しています。教会でさえ、多くの場合は、救いの道を人間に指し示す山の上の光ではなくなってしまうています。これに対して「新しい都」ではすべてが神聖で主に捧げられており、すべては公明正大です。というのは、神ご自身がその中に住んでおられるからです。

第三に、人間は神の栄光をほめ賛えることに憧れています。しかし、私たちの自己追求によって主の栄光は覆い隠されてしまっています。「新しい都」には、暗い物や、隠されたり秘密にされている物はありません。宝石で作られた城壁は光りを通すことができ、都是大通りも透き通ったガラスのような純金できています。つまり、すべてが露わにされています。「新しい都」の住民はもはや主を悲しませることをせず、主から出てくる光を反映させながら神様の栄光を表わします。彼らは本物であり、光の中を歩む者です。

今、私たちもそれを望んでいるでしょうか。透き通っていて、私たちの考えが明らかにされ、隠されているものは一つもないような状態を望んでいるでしょうか。

一体、そこに至る道はどのようなものでしょうか。どのようにしてダイヤモンドはあのように硬くなるのでしょうか。また宝石類はどうしてあのように色とりどりの輝きを放つのでしょうか。どうやって金は純粹なものとなるのでしょうか。真珠の美しさはどこから生まれるのでしょうか。それはこうです。ダイヤモンドは恐ろしいほどの圧力によって硬くされ、宝石は削られることにより輝きを生じ、金は火によって精錬され、真珠は傷つけられることによって美しさを身につけます。つまり、悩み、戦い、辱められ、憎まれることに耐え抜いて、私たちは透き通ったもの

になるのです。これらのことを通して、私たちは神の公明正大さ、恵み、栄光の証人となるのです。現在の悩み苦しみを、やがて主のみ姿に変えられる手段と見なし、それらのものを感謝しつつ主の御手から受け取る人は幸いです。

私たちの濁った状態にある自我と不純そのものは、否定されなければなりません。そうでなければイエス様と共に暮らす生活はありません。

イエス様は、小羊として私たちのために虐げられ、傷つけられ、火で精錬されるような経験をなさり、神に見捨てられる絶望の深みにまでも行つてくださいました。なぜなら、それによって私たちが永久に「新しい聖なる都」で主と共に住まうようにという目的をイエス様が持つていてくださったからです。ですから、イエス様なしに楽な道を行くよりは、イエス様と共に悩みと攻撃を受けることの方が望ましいのです。もっとも恐れるべきは、現在イエス様なしに生きることです。そして「新しい聖なる都」の外にとどめられてしまうことです。

40 高く引き上げられた方のあとがき

黙示録第22章6節から21節まで

- 1 啓示されたみことばの信頼性
 - 2 啓示されたみことばを宣べ伝えよという命令
 - 3 啓示されたみことばの成就のあかし
- 1 再臨の備え
 - 1 イエス、ダビデの根、
また子孫、輝く明けの明星
- 2 アルファであり、オメガである主
 - 2 「来てください。」
- ・ 主の地位
 - ・ 主の創造性
 - ・ 主の贖い
 - ・ 主の身体である教会
 - ・ 主の比べるもののない卓越性
 - ・ 主と信仰
 - ・ 主の栄光
- 3 啓示、約束、警告
 - 3 みことばを変更することへの禁止
- 4 内と外
 - 4 「しかり。わたしはすぐに来る。」

黙示録の最終章は、天から下ってくる神の「聖なる都、新しいエルサレム」についての描写で締めくくられています。しかし、私たちが将来のことだけでなく、現在についてもよく注意するように、最後にもう一度呼びかけられています。私たちは黙示録を通して、新しい展望、新しい力づけ、新たな慰め、戦いのための装備、あらゆる混乱の中での正しい導きについて、よく知るべきです。

黙示録が書かれた目的の一つは、「すぐに起こるべきことを、そのしもべたちに示すこと（黙示22・6）でした。黙示録は、夢想家や迷信家が自分たちの空想をたくましくするために書かれたものでは決してありません。神がご自分のしもべたちを力づけ、喜びに満たすために書かれたものです。つまり、永久に闇を知らない将来の世界、キリストとそのしもべたちによる永遠の支配が、多くの戦いと苦難の後に必ずやって来ることを告げているのです。

イエス・キリストの勝利のすばらしさと偉大さを、これほど明らかに記述した文書は他にないと言つていいでしょう。しかし大切なことは、将来起こるべき事柄だけではなく、今日、主は私たちにご自身を啓示したいと願つていらつしやるということです。すべてのものが帰着する中心点は神と小羊の御座ですが、まず、この地上における神と御子イエス・キリストのご支配を明らかにすること、神が人と共に住みたもうということを明らかにしたいと願つておられるのです。

黙示録22章6節から始まる聖書の主題は、次のように言うことができます。 「高く引き上げられた方のあとがき」、あるいは「再臨なさる主の啓示に対する証印」、または「主の三回にわたるみことば。私はすぐに来る。」、あるいは「終わりにあたってのあかし」です。

これから、その部分を三つに分けて考えてみましょう。はじめは、6節から9節までで、「啓示されたみことばの信頼性、または権威」についてです。言いかえるなら、黙示録のみことばを聞き、それを守る者は祝福される、という内容です。次に、10節から15節で「啓示のみことばを宣べ伝えよという命令」、あるいは「決心して再臨の備えをする者は祝福される」ということです。三つ目は、16節から21節で「啓示されたみことばの成就のあかし」についてです。これは「再臨なさる主を待ち望むようにとの招き」でもあり、「主のみことばを偽って伝える者に対する呪い」についても言及されています。

それでは本文に入って行くことにしましょう。

御使いはまた私に、「これらのことばは、信すべきものであり、真実なのです。」⁶と言った。預言者たちのたましいの神である主は、その御使いを遣わし、すぐに起こるべき事を、そのしもべたちに示そうとされたのである。⁷「見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。」

⁸これらのことを聞き、また見たのは私ヨハネである。私が聞き、また見たとき、それらのことを示してくれた御使いの足もとに、ひれ伏して拝もうとした。⁹すると、彼は私に言った。「やめなさい。私は、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書のことばを堅く守る人々と同じしもべです。神を拝みなさい。」

¹⁰また、彼は私に言った。「この書の預言のことばを封じてはいけぬ。時が近づいてい

るからである。不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。正しい者はいよいよ正しいことを行ない、聖徒はいよいよ聖なるものとされなす。

「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。犬ども、魔術を行なう者、不品行の者、人殺し、偶像を拜む者、好んで偽りを行なう者はみな、外に出される。¹⁶「わたし、イエスは御使いを遣わして、諸教会について、これらのことをあなたがたにあかした。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」¹⁷御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかしする。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。また、この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。²⁰これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。²¹

1 啓示されたみことばの信頼性

はじめに啓示の信頼性について見ましょう。黙示録のみことばが「真実で確かである」ことは6節の他に、21章5節、19章9節にも述べられています。それは神のみことばです。そこで決定的なことは、聞いて救われるか、救われないかということです。すべての預言者を導かれた主なる神が、ヨハネをもお導きになってこの黙示録を書かせたのです。

預言者モーセ、サムエル、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ゼカリヤの内に働かれた同じ神が、ここでご自身を啓示なさっておられます。預言者は自分が望んでいることではなく、御霊を通して神が預言者に語られたこと、つまり、預言者が語らなければならぬことを語っています。

黙示録で取り扱われていることは幻想や偽りではなく、神の厳粛なみことばです。そして神のみことばであることこそ、記されたことが真実であるただ一つの確実な根拠です。もし神のみことばを信じない者は、偽りを信じ主を否定することになります。神のみことばに対する態度は、すなわち主イエス様のみことばに対する態度です。ですから、みことばはただ単に読むだけで済むものではなく、自分のものにし、守るべきです。

6節の後半に出てくるみことば、「すぐに起こるべき事を、そのしもべたちに示そうとされた」は、ここに啓示されたことが必ず起こる、という必然を表わしていますが、それはとても大切な事柄を示しています。というのは、黙示録の中では、目的が重要な意味を持つというよりは、「神のご計画の成就」が主題とされているからです。

主は、「わたしはすぐに来る。」(7、12、20節) 言っておられます。このみことばへの確信が、奉仕するための慰めと勇氣となり、再臨を準備するための支えになります。私たちが今、どんな行動をとるかはそれによつて決められます。

キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。
(Iヨハネ 3・3)

主の再臨を待ち望み、自分の生涯をそこに向け、そのための備えをしている人は幸いです。みことばに頼ることは、イエス様に頼ることを意味します。フィラデルフィヤの教会はこの点で模範的でした。

「あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。」
(黙示 3・10、11)

7節の後半「この書の預言のことばを堅く守る者は幸いである。」の「幸いである」ということばは、黙示録の中には全部で7回出てきますが、ここが6回目になります。この箇所以外に次のところに書かれています。(黙示 1・3、14・13、16・15、19・9、20・6、22・14)
さて、8節で、ヨハネはこの書が正しいものだということをもう一度あかししています。

彼は自分が見たこと、聞いたことを書き記しているのであり、他の人の力を借りて黙示録を書いたわけではありません。ヨハネが見せられたこと、聞かされたことの前にひれ伏し、御使いを拝もうとしたとき、そうすることを禁じられました。なぜなら、主なる神お一人だけが礼拝されるべきだからです。被造物を崇拜したり礼拝したりすることは、結局、創造主を侮辱することになります。カトリック教会はマリアや聖徒たちの像を作つて拝み、モルモン教はヨセフ・スミスを崇拜し、統一教会は文鮮明を拝み、そして何と多くの人々が祖先崇拜をしていることでしょうか。こういうことはすべて、聖書を通して厳しく禁じられています。主なる神の第一の戒めは「わたしのほかにほかの神々を拜んではならない」(出エジプト20・3、4)というものです。神以外の被造物が拜まれるとき、たとえ御使いといえども拜まれるとき、この神の戒めが破られることとなります。礼拝されるべきは神お一人だけからです。この戒めを否定するものは悪魔に利用されることとなります。この方以外を対象にして、礼拝や崇拜を認めたり進めたりする者は決して神に仕える人ではありません。

黙示録の中に出てくる御使いは、自分が礼拝されることを拒み、それによつて神の真の使者であることを証明しました。神お一人だけが礼拝されるべきであるという態度をとり続ける者こそ真のしもべです。神を心から礼拝する人々を、主なる神は求めておられます。

しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによつて父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによつて礼拝しなければなりません。」(ヨハネ 4・23、24)

ヘロデは自分を崇拜することを許したために、神のさばきが下りました。つまり、彼は死ななければならなかったのです。

そこで民衆は、「神の声だ。人間の声ではない。」と叫び続けた。するとたちまち、主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫にかまれて息が絶えた。

(使徒 12・22、23)

2 啓示されたみことばを宣べ伝えよという命令

さて、10節以降に進む前に、ダニエル書に記されているみことばを見てみましょう。

「ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと探り回ろう。」

(ダニエル 12・4)

彼(主)は言った。「ダニエルよ。行け。このことばは、終わりの時まで、秘められ、封じられているからだ。」

(ダニエル 12・9)

かつてダニエルに示された事柄は、封じられなければなりませんでしたが、黙示録においては、みことばは「封じてはいけない」ものとして、宣べ伝えるように命令されています。この命令は緊急命令です。なぜなら、終りの時が近づいているからです。

小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現われています。それによって、今が終わりの時であることがわかります。

(Iヨハネ 2・18)

ペテロやヤコブもこのことをはっきりと語っています。

万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。

(Iペテロ 4・7)

兄弟たち。互いにつぶやき合ってははいけません。さばかれないためです。見なさい。さばきの主が、戸口のところに立つておられます。

(ヤコブ 5・9)

1 再臨の備え

私たちの主は、もうすぐ再臨なさいます。主の再臨は、明確に宣べ伝えられなければなりません。そうしなかったら、それは主への不従順です。私たちは意識的にはっきりとした態度をとることが大切です。

11節には恐ろしいほど、厳しいみことばが記されています。恵みの時は終わりに近づき、その後ではもはや回心の可能性はなくなりません。終わりが近づけば近づくほど、人間が回心することは困難になります。そして恵みの時が終わると、人間は永遠にそのままの状態にとどまります。

つまり「永遠のさばき」か、「永遠のいのち」かの、どちらかの状態にとどまることになります。もはや闇から光へ、あるいは悪魔の支配から神の支配へと移れる可能性はまったく存在しません。主の再臨の後は、私たちの状態と性質は、永遠にそのままです。伝道者の書11章3節のみことば「木が南風や北風で倒されると、その木は倒された場所にそのままにある。」の通りです。

死後にはもはや救いの機会はありません。カトリック教会がいうように「煉獄」というものを通って救われる可能性は決してありません。死後に来るものはさばき以外の何物でもありません。

人間には一度死ぬことと死後にさばきを受けることが決まっている…（ヘブル 9・27）

この地上に生きている間に、人間は回心と聖めとを経験しなければなりません。死んでから報いを受けるか、あるいはさばきを受けるかのいずれかであるということは、永久に不変の事実であり、このことは世界中の人々に、はっきりと、至急、宣べ伝えられなければなりません。

「だが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。」（ヨハネ 12・47、48）

黙示録全体は一時間半もあれば読むことができます。重要なのは、そこから一つの結論を引き出すことです。

「あなたが冷たいか、熱いかであつてほしい。」(黙示3・15)、「不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。」(黙示22・11)という聖書のことばは一体何を語ろうとしているのでしょうか。それは、「この黙示録を通して与えられる警告を受け入れたくないならば、悔い改めをせず、不従順な生き方を続けなさい」ということです。その結果は滅びです。

もちろんすべての背後に、「回心」と「悔い改め」をすすめる心からの訴えがあります。悔い改めて神に立ち返る勇氣を与えるために、主は「わたしはすぐに来る。」、少しの時も無駄にすることはできないと叫んでおられます。

ギリシヤ語には「時間」を意味するために二つのことばが用いられます。一つは「クロノス」であり、もう一つは「カイロス」です。「クロノス」というギリシヤ語は、私たちが日常普通に使用している意味での「時間」を表わします。つまり、主は「すぐに来る」とおっしゃったのに、なぜまだいらつしやらないのか、どうしてその時を延ばしておられるのかという意味での時間を表わしています。この問いに対しては、ペテロが次のように言っています。

主は、ある人たちがおそいと思つているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえつて、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであつて、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

(Ⅱペテロ3・9)

一方、「カイロス」というギリシヤ語は「神によって定められた時」を意味します。つまり、神のご計画の成就と実現の時を意味します。

今日こそ、決断のときです。

悔い改めたくない人はますます心をかたくなにしています。しかし、悔い改めの備えがある人は、回心と主を受け入れる恵みを経験することができます。

主イエス様に背を向ける人は、ますます汚れに入っていきます。しかし、主イエス様に従う人は、さらにイエス様に似た者へと造り変えられていきます。

黙示録のみことばを宣べ伝えることによって、はっきりとした線が引かれます。善と悪の二つが明確にされ、それぞれが成長していくのです。

「再臨の主」が宣べ伝えられると、その結果、主に反対の態度をとり、ますます不義を行なうようになるか、あるいは主にすべてを明け渡し、主なる神の義と栄光をますます表わすようになるか、いずれかに分かれます。

12節には、「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えてくる。」とあります。主イエス様はすぐに来られます。そして人々に報おうとしておられます。「報い」とは手柄ではなく、恵みです。「報い」とは人が何かをもらって、それから後は自分勝手な道を行くことではなく、とこしえに神と共にあること、そして神との深い交わりに入ることを意味しています。いつも主と共にいられることこそ、最も大きな報いです。主との交わりは「恵み」によって与えられる贈り物です。そのために支払わなければならないも

のは何もなく、またそれは自らの力で獲得されるものではありません。イエス様ご自身が報いてくださるのです。

なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けることになるからです。

(Ⅱコリント 5・10)

というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることとはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。

(Ⅰコリント 3・11、15)

競技場で走る人たちは、みな走つても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。ですから、私は決勝点が

どこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはいません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせませす。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。(Iコリント 9・24〜27)

2 アルファであり、オメガである主

13節に「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終りである。」とありますが、そのすべてが神の名称です。イエス・キリストは主であり、神であつて、すべての前にあつたものであり、すべての後に存在するお方です。そして今もおすべてを導いておられます。「神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこゝういわれる。『わたしはアルファであり、オメガである。』(黙示録1・8)、「また言われた。『事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。』(黙示21・6)にも同じみことばが記されています。

主イエス様と父なる神とは一つです。主イエス様は創造主であり、救い主であり、完成者です。主イエス様は永遠に神です。このことについて、さらに七つの点に分けて考えてみましょう。

・主の地位

聖書はイエス・キリストの地位について何と語っているのでしょうか。主イエス様はすべての前に存在しておられ、すべてはイエス様によって造られました。

この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。

(コロサイ 1:6)

イエス様の御座は永遠から永遠に至ります。

御子については、こう言われます。「神よ。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。」

(ヘブル 1:8)

主イエス様は「人間」としては完全なお方であり、「預言者」としてはすべての預言者にまさる預言者であり、「祭司」としては比類なき祭司、つまり永遠に臨在したもう祭司であり、「王」としては王の王です。

このようなイエス様が、私たち人間のために、人の姿をとり、いのちを捨て、「苦しみの人」となってくださったとは何という慰め、何という恵みでしょうか。

・主の創造性

聖書はイエス・キリストの創造のわざについて次のように言っています。

主よ。あなたは、初めに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。

(ヘブル 1:10)

すべては主イエス様によって、主イエス様のために創造されました。主イエス様は初めも終わりもない、偉大なる創造主です。

・主の贖い

聖書はイエス・キリストの「贖い」のわざについて何と云っているでしょうか。

地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされて
いない者はみな、彼を拝むようになる。
(黙示 13・8)

主イエス様は世が造られる前から、「ほふられた小羊」と呼ばれています。創世記3章15節は
イエス・キリストの贖いと救いについての最初の預言です。また旧約時代に行なわれた、すべて
の全焼のいけにえ(燔祭)は主イエス様の犠牲の象徴です。

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。
彼は、おまえの頭を踏み碎き、おまえは、彼のかかとかみつく。」
(創世記 3・15)

世の造られる前から、主イエス様は「贖いのはじめ」であり、そして、十字架の上で「完了し
た」と叫ばれたとき、主イエス様は「贖いの終わり」となりました。

・主の身体である教会

聖書はイエス・キリストの「身体である教会」について何と云っているでしょうか。

主イエス様は教会の「土台」です。

というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。

(1コリント 3・11)

あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

(エペソ 2・20)

主イエス様はご自分の血潮によって教会を贖ってくださいました。それは主の身体である教会が「新しい都」であり、とこしえにイエス様と共にいるようになるためです。教会という「真珠」をご自分のものとなさるために、主イエス様はすべてを捧げてくださいました。主イエス様は教会の「礎の石」です。

「あなたがた家を建ててる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。」というのはこの方のことです。

(使徒 4・11)

・主の比べるもののない卓越性

聖書はイエス・キリストの「比べるもののない卓越性」について何と云っているでしょうか。

イエス様は聖書全体の中心点です。イエス様を無視すれば、聖書はまったく無意味なものとなります。聖書を通して私たちは主イエス様の偉大さを知ることができます。

イエス・キリストは十字架につかれたあと、エマオに向かう弟子たちに対して、いかにして聖書の約束がご自身を通して成就されたかを明らかにしてくださいました。イエス様は聖書のみことばを通して、ご自身を現わしてくださいました。ですから、イエス・キリストを求める者は誰でも、聖書を通して主を見いだすことができますのです。

・主と信仰

聖書は「信仰」について何と言っているでしょうか。

主イエス様がただお一人、信仰を与えてくださるお方であり、信仰を完成させてくださるお方です。

あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。
(ピリピ 1・6)

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。
(ヘブル 12・2)

主イエス様は、ただ単に信仰の「創始者」であるだけではなく、「完成者」でもあります。主

イエス様は私たちを赦してください、いやしてください、勇気づけてください、完成してください。
います。

・ 主の栄光

聖書は「主の栄光」について何と言っているのでしょうか。

主は世が造られる前からおられ、栄光を持っておられました。そして、新しい聖なる都の栄光の創造主でもあられます。すべてにおいて主イエス・キリストは初めであり、終わりです。そして、このすばらしいイエス・キリストは私たちのものであり、私たちの「主」です。

「私はイエス様のもの、主は私のもの」と心から主を賛美できる人は幸いです。

3 啓示、約束、警告

21章の6節には「神の啓示」が記され、次の7節に「神の約束」、それから8節に「神の警告」という順で続いています。22章13節から15節も同じ順序で「神の啓示」、「神の約束」、「神の警告」が記されています。

啓示としての主のみことばは、ご自身が「アルファであり、オメガである」（13節）ということとです。次に「自分の着物を洗って」（14節）とありますが、このギリシャ語は現在形と進行形が使われています。つまり、一度だけ聖められるのでは不十分であり、絶えず聖められて、光の中を歩むことが大切だということを意味しています。最後に至るまで主イエス様と結びついていることが重要です。罪を赦され主イエス・キリストとだけ結びついている者が、いのちの木の

実を食べる権利を与えられ、新しいエルサレムに入ることを許されます。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3・16)

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることはないためです。

(エペソ 2・8、9)

私たちには幼子のような信仰だけが要求されています。そして主に頼り続けることが必要です。主と共にある幸いを得る人々に対して、15節には不幸な結果を招く人々のことが描かれています。これらの人々は主と主のみことばを受けいれず、主に従わなかった人々です。彼らは永遠に外に出されると警告されています。これらの人々は「犬ども、魔術を行なう者、不品行の者、人殺し、偶像を拜む者、好んで偽りを行なう者」と呼ばれています。

これらの「幸いを得る人」と「不幸な運命に陥る人」との間には、何という大きな違いがあることでしょうか。一方はいのちの木の実を食べる権利が与えられ、新しい聖なる都に入ることが許され、他方は外に出なければならず、火の池に投げ込まれることが決まっています。ここですべての罪人は、もう一度自分の罪のこと、自分の結末を思い起こして悔い改めるように呼びかけ

られています。

4 内と外

最後に、聖書に出てくる「内」と「外」が意味するものについて、七つの実例から考えてみたいと思います。「外」は暗やみです。

「役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯きしりするのです。」

(マタイ 25・30)

第一の実例は「ノアの箱舟」です。

信仰によって、ノアは、まだ見ていない事ながらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。

(ヘブル 11・7)

ノアは近づいてくる神のさばきについて教えられたみことばを信じ、箱舟を造りました。ノアとノアの家族は神の命令に従って箱舟の「内」に入って救われました。しかし、箱舟の「外」にいた人々は皆滅びました。

「そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。」

(マタイ 24・39)

主イエス様はまことの救いの箱舟であり、イエス・キリストと共にいる者だけが救われます。

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに來ます。そしてわたしのところに來る者を、わたしは決して捨てません。

(ヨハネ 6・37)

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。

(ヨハネ 3・36)

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

(ローマ 8・1)

二番目の实例は「ソドム」です。創世記19章を見ると、さばきはすでに決定されていました。そこでアブラハムは祈り、御使いが救いのために遣わされました。それは本當に救いを求める人々のためでした。人々は、どうしてもソドムにとどまりたいか、そこから離れて救われたいと思うかのどちらかでした。他の人々も警告を受けましたが、救われたいとは思わず滅びました。

そこでロトは出て行き、娘たちをめぐった婿たちに告げて言った。「立ってこの場所から出て行きなさい。主がこの町を滅ぼそうとしておられるから。」しかし、彼の婿たちには、それは冗談のように思われた。

(創世記 19・14)

信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。

(マルコ 16・16)

第三の実例は「過越の祭り」です。出エジプト記12章を見ると、どの家の門柱にも小羊の血が塗られていなければ救われることはありませんでした。救いと安全はただ、ほふられた過越の羊の血によって与えられました。血が塗られた家の「内」にいた者は皆救われ、その「外」にいた者は皆さばきと死を味わわなければなりませんでした。

第四の実例は「ラハブの家」です。

あなたの家の戸口から外へ出る者があれば、その血はその者自身のこうべに帰する。私たちは誓いから解かれる。しかし、あなたといっしょに家の中にいる者に手をかけるなら、その血は私たちのこうべに帰する。

(ヨシユア 2・19)

このときエリコに対する神のさばきが近づいていました。しかし、遊女ラハブは神から遣わされた者たちが告げた神のことは信じて救われました。彼女は確かに罪深い女性でしたが、信仰によって救われました。

信仰によって、遊女ラハブは、偵察に来た人たちを穏やかに受け入れたので、不従順な人たちといっしょに滅びることを免れました。

(ヘブル 11・31)

彼女は神のことばを信じ、多くの人に向かつて彼女の家に入るよう呼びかけました。そして彼女と共に彼女の家の「内」にいた者は救われました。

ヨシユアはこの地を偵察したふたりの者に言った。「あなたがたがあの遊女に誓ったとおり、あの女の家に行つて、その女とその女に属するすべての者を連れ出しなさい。」斥候になったその若者たちは、行つて、ラハブとその父、母、兄弟、そのほか彼女に属するすべての者を連れ出し、また、彼女の親族をみな連れ出して、イスラエルの宿営の外にとどめておいた。

(ヨシユア 6・22、23)

ラハブといっしょにいる者以外は、皆、さばきによつて滅びました。

第五の実例は「十人の乙女たち」です。マタイ25章を見ると、五人の乙女たちは賢く、他の五人は愚かでした。それによつて花婿であるイエス・キリストを「内」で待つか、あるいは「外」で齒がみしなればなくなるかのどちらかが決まったのです。そうなるからいくら泣き叫んでも、戸を叩いても、何の役にも立ちません。

外側の形式だけの信仰では十分ではありませんでした。愚かな五人の乙女たちも、賢い五人の乙女たちと同様にランプを持っており、小羊の婚宴に招かれないと待っていました。ランプの中には油、つまり聖霊が入っていませんでした。「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。」(ローマ8・9)と書いてあります。あなたは小羊の婚宴のとき、出席で

きるでしょうか。

第六の実例は「いのちの書」です。

「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではありません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」 (ルカ 10・20)

いのちの書に名前が書かれているということは、まことの喜びの根拠です。いのちの書に名前が記されている人は「新しい聖なる都」の市民となります。しかし、このいのちの書に名前が記されていない人は「火の池」に投げ込まれます。

いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

(黙示 20・15)

「永遠の幸せ」か、「永遠の滅び」かは、いのちの書に名前が書かれているかいないかによって決まります。あなたの名前は、いのちの書に記されているでしょうか。

第七の実例は「新しい聖なる都」です。

その「新しい聖なる都」にいるのは、小羊の血潮によって洗い聖められた人々です。

彼は私にこう言った。「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。」 (黙示 7・14)

イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、……

(黙示 1・5)

ペテロはイエスに言った。「決して私の足をお洗いにしないでください。」イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」

(ヨハネ 13・8)

あなたは、ご自分の罪がイエス・キリストの血潮によって赦されていることを知っておられるでしょうか。

3 啓示されたみことばの成就のあかし

次に、黙示録22章最後の部分、16節から21節の内容について見ていきましょう。ここに別の題名をつけるとしたら「再臨なさる主を待ち望むようにとの招き」、そして「主のみことばを変更することへの禁止」とすることができましょう。

1 イエス、ダビデの根、また子孫、輝く明けの明星

黙示録の重要性は、この書を書かせようとしてヨハネに御使いを遣わしたお方が、ご自分を三つの呼び名で明らかにしたことによって、確かなものとなります。その第一は「イエス」であり、

第二は「ダビデの根、また子孫」、第三は「輝く明けの明星」です。

イエス様は神の御子としてマリヤから生まれる以前に、すでに「イエス」という名を与えられていました。

マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。
(マタイ 1:21)

「イエス」という名前の中には私たちの罪の赦しがあります。「イエス」こそ私たちの救い主であり、私たちの崇拜する方としてふさわしいお方です。

第二の呼び名「ダビデの根、また子孫」は、次のことを意味しています。主イエス・キリストは全宇宙が造られる前から存在しておられ、当然ダビデが生まれる前からおられました。それでダビデはイエス・キリストを「主」と呼んだのです。

また、主イエス様は「ダビデの根」であるだけではなく「ダビデの子孫」でもあります。

「ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるのに、どういうわけでキリストがダビデの子なのでしょう。」
(マルコ 12:37)

イエス様は、ダビデにつながる家にお生まれになりました。そしてイエス様は、ユダヤ人の王でもありました。

ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東の

ほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。

(マタイ 2・2)

また、イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである。」と書いた罪状書きを掲げた。

(マタイ 27・37)

シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。

(ゼカリヤ 9・9)

次に「輝く明けの明星」と呼ばれるイエス・キリストについて考えたいと思います。

「明けの明星」は新しい一日が始まる前に見られるものですが、それと同じようにイエス・キリストは人類に夜の無い日を与えるためにまもなく来られます。

都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。

(黙示 21・25)

もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは永遠に王である。

(黙示 22・5)

「輝く明けの明星」である主イエス・キリストは、一日の始まる前に、花婿として花嫁である教会を迎えるために来てくださいます。空中で主と教会は相まみえることとなります。

「また、彼に明けの明星を与えよう。」

(黙示 2・28)

そのあとで主イエス様はまことの王として来てくださいます。恐ろしいさばきの後、目に見える形で、今度は花婿としてではなく、「義の太陽」として、千年王国を建てるためにこの地上に来てくださいます。

2 「来てください。」

17節に「花嫁」ということばが出てきますが、それは一体誰のことでしょうか。それはイエス様の御霊を持っている人すべてのことです。

けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

(ローマ 8・9)

「花嫁」の特徴は、「花婿」であるイエス・キリストを慕い、待ち焦がれていることです。花嫁は目に見えるものには満足せず、それに惑わされることはありません。主お一人だけが花嫁の愛と憧れの対象です。

主からいただいた霊は希望の霊であり、イエス様を待ち望む霊です。イエス様に対する愛は、私たちが主を意識的に待ち望む者へと変え、イエス・キリストの再臨に備えるようにさせてください。イエス様に対して「来てください。」と、聖書に何度も重ねて書いてあるのは、大きな福音です。

イエス様も人間を招いておられます。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあな
たがたを休ませてあげます。
(マタイ 11・28)

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところ
に来る者を、わたしは決して捨てません。
(ヨハネ 6・37)

この招きに気づいたとき、17節にある次の三つの大切なことばを心に留める必要があります。
第一に「これを聞く者」、第二に「渴く者」、第三に「求める者」です。

ある人々は聞き、ある人々は聞きません。主の御声に耳を傾けることは私たちが当然すべきこと
とです。しかし、福音をさらに宣べ伝えることも、私たちの責任です。というのは、まだ、今は
「恵みの時」だからです。

ある人は永遠なるものを渴望し、ある人は過ぎゆくこの世のものを求めます。みことばを聞く
ことよって、飢え渴きが生じます。渴いている者は、イエス様の元に来て渴きをいやすことが

できます。

イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。

(ヨハネ 6・35)

何というすばらしい招きでしょうか。

御霊と「花嫁」は、つまり、つまり神の霊と救われた人々は、「イエス様、来てください」と天に向かって叫びます。パン裂きのたびごとにいつもこの叫びが心の底からあふれ出てきます。

ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。

(1コリント 11・26)

いつも主と共におり、主と結びついているということこそ「花嫁」の憧れです。しかし、その一方で、御霊と「花嫁」は滅び行く人々に向かって、「イエス様のみもとに来てください」と心からすすめます。

いつの時代でも恵みの神を信じる人は、受け入れられ、解放され、満たされます。

イエス様は一体、誰に呼びかけておられるのでしょうか。飢え渴いている人、罪にあえぎ苦しんでいる人、罪人、そして「罪の赦しと平安とを持ちたい」と思っているすべての人に向かって呼びかけておられます。「花嫁」もまた主と同じ願いをもつ者です。

いままで「聞く者」、「渴く者」について見てきましたが、最後に「求める者」について見ることにしましょう。救われるかどうかは、人間の意志が決定的な意味をもっています。「求める者」は来て飲むことを許されています。主イエス様の救いは無償であり、これこそ、恵みによる贈り物です。

ああ。渴いている者はみな、水を求めて出て来い。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買ひ、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。

(イザヤ 55・1)

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

(ローマ 3・24)

「飲むこと」はまた、信じることを意味します。サマリヤの女は自分の持っていた桶をそのまま置いて、イエス様が提供してくださったものを受けました。ルカの福音書第7章、ヨハネの福音書第8章に出てくる罪人の女も、ニコデモも、「飲んで」新しい人間になりました。

「いのちの水」は、イエス様による完全な救いです。きょう、まだそれを受け入れていない人は、ルカの福音書16章19節以下に出てくる金持ちのように、永遠に渴かなければなりません。

あなたは、もうすでに神の招きに答えられたでしょうか。

あなたは、罪人としてイエス様のみもとにひれ伏したでしょうか。

あなたは、自分の罪が赦されているという確信を持つておられるでしょうか。

あなたは、永遠のいのちを持つておられるでしょうか。

永遠のいのちを持つている人は、聖霊に押し出され、まずイエス様に向かって「来てください」と叫び、それから世の人々に向かって「イエス様のみもとに来てください」と叫ぶことでしよう。

3 みことばを変更することへの禁止

18節、19節には主のみことばを変更することへの禁止が厳しく書かれています。みことばには欠けている所も、余分なものもありません。神のみことばを勝手に変えると18節、19節にある通りさばかれます。自分の考えを差し挟むことは許されません。部分的に修正したり、削除したりすることも許されていません。

現代の神学、特に聖書を神のことばとして認めない現代神学やエホバの証人、統一教会などはみな、神のさばきを受けなければなりません。

いずれにしても、私たちは権威あるみことばに服従しなければなりません。謙遜にみことばに服従することと、聖い恐れをもって献身することがどうしても必要です。

この態度をとらない人は「いのちの木と、聖なる都からその人の受ける分を取り除かれる。」(19節)のです。

ここで大切なことは、神のことばを靈的に理解するかしないかではなく、「みことばを受け入れたい、そして永遠のいのちを持ちたいと思うか、思わないか」ということです。

「永遠のいのち」とは何でしょうか。

まず第一に、それは初めも終わりもない神のもので、すから「永遠」と呼ばれます。神のいのちは神である御子イエス・キリストを通して明らかにされました。

この方にいのちがあつた。このいのちは人の光であつた。

(ヨハネ 1・4)

それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださいました。

(ヨハネ 5・26)

初めからあつたもの、私たちが聞いたもの、目で見たもの、じつと見、また手でさわつたもの、すなわち、いのちのことばについて、——このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあつて、私たちに現わされた永遠のいのちです。——

(Iヨハネ 1・1、2)

御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。

(Iヨハネ 5・12)

しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださいましたことを知っ

ています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。
(Iヨハネ 5・20)

第二に、この神の永遠のいのちは主イエス様を受け入れるすべての人に与えられます。

主を自分の救い主として受け入れた人は、イエス様を通し、内住の聖霊を通して永遠のいのちをもっています。

第三に、主を信じる人が聖霊によって受ける永遠のいのちは、その人間を根本的に変えます。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。
(IIコリント 5・17)

割礼を受けているか受けていないかは、大事なことではありません。大事なのは新しい創造です。
(ガラテヤ 6・15)

第四に、信者のうちにある神の永遠のいのちは、永遠から永遠まで、主イエス様のうちにあるものですから、主イエス様とは切り離すことのできない、イエス様とまったく同じのちです。

そのことを主イエス様は「ぶどうの木と枝」のたとえ(ヨハネ15・1〜5)によって分かりやすく説明してくださいました。

また「頭とからだ」も同様に同じいのちを持っています。

ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はいち多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。

(一コリント 12・12～14)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2・20)

神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあつてどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。

(コロサイ 1・27)

そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を

持たない者はいのちを持っていません。

(Iヨハネ 5・11、12)

4 「しかり。わたしはすぐに来る。」

いよいよ聖書の最後の5行、黙示録22章20、21節に入ります。

主イエス様はここでもう一度、黙示録の内容は真実で、信じるに足るものであることを説明し、「しかり。わたしはすぐに来る。」と三回目のみことばを繰り返して語っておられます。これは御霊と花嫁なる教会の叫びに対する主の応答です。主イエス様は必ず、来てくださいます。主イエス様はご自分の花嫁をご自分のみもとに引き上げられるために来てくださいます。

「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」(ヨハネ 14・3)

「しかり」という主のみことばは「アーメン」という意味であり、この二つはすでに1章7節に並べて記されています。

見よ。彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。
(黙示 1・7)

主ご自身が「アーメンなる方」です。

主は必ず来てくださいます。これは主を愛する人々すべての確信です。彼らもまた「アーメン」。

主イエスよ、来てください。」と言うのです。本当に主のものとなつてゐる人はすべて「主にお会いしたい」という切なる願いを持つてゐます。しかもありのままの状態で、主と顔と顔をあわせ相まみえたいと願い、また主のおられるところにいたいと心から望んでいます。

最後の部分では、ヨハネは自分が「聖霊の器」としてこの本を書いたことを強調し、さらに自分の願いと御霊の願いとを付け加えています。

主イエスの恵みがすべてのものとともにあるように。アーメン。

(黙示 22・21)

私たちが必要としているのは主の恵みです。主が来られるまで、日々主の恵みを必要としています。主の恵みによつて私たちは救われ、主はご自身の恵みによつて私たちを人生の荒野を通して導いてくださり、恵みによつて私たちを栄光にまで導いてくださいます。今日、私たちは主の恵みを経験することを許されており、まもなく天の御国において主の栄光にあずかることをも許されています。私たちは主を見つめながら、主により頼み、徹頭徹尾主に従い、主の再臨を待ち望むことが許されています。

最後に、三つの問いにより、私たち自身に光をあててみましょう。

第一の問いは、主イエス様は完全な贖いを成就してくださいましたが、私たちは果たして救われた者なのでしょうか。そして、神の子として神の相続人、またキリストとの共同相続人だと言えるのでしょうか。

もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光とともに受け

るために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。

(ローマ 8・17)

第二の問いは、主イエス・キリストは必ず再臨なさるのですが、その主を私たちは本当に待ち望んでいるでしょうか。もし主がきょう来られるとしたら、私たちは喜ぶことができるでしょうか。第三に、主イエス様は真の完成をもたらしてくださいますが、私たちの人生は完成の方向に向かっているでしょうか。あるいはイエス様から離れた道を行っているのではないのでしょうか。

これまで黙示録全篇を通して主の御心を学んできましたが、今、心から「マラナタ（われらの主よ、来てください）」と心から叫ぶことができればまことに幸いです。

あとがき

ゴットホルド・ベック

今の時の苦しみ

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意思ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。（ローマ 8・18〜23）

ここに示されているみことばは、非常に現実的な問題です。文中に「苦しみ」、「虚無」、「滅びの束縛」、「産みの苦しみ」、「うめき」とありますが、それらは、私たちにとって身近な問題です。現代は、苦悩、不安、混乱、失望、暴力、破壊、無秩序、放縦の時代です。人々は、この世のこ

とだけに熱中しています。主なる神と、神の言葉である聖書については、まったく無関心です。

主によって救われた人々、聖書を知っている人々にとつては、これらの風潮は、別に驚くようなことではありません。すでに聖書が、それらを正確に預言しているからです。では、みことばにある「今の時のいろいろの苦しみ」について、私たちはどのような態度をとるべきでしょうか。まず、3つのことについてごいっしょに考えてみましょう。

- 1 主イエス様を知るようになった者は、何をいただいているのでしょうか。
- 2 イエス様を知るようになった者は、何を約束されているのでしょうか。
- 3 イエス様を知るようになった者は、何を期待しているのでしょうか。

1 主イエス様を知るようになった者は、何をいただいているのでしょうか。

冒頭に引用したローマ人への手紙8章23節には、イエス様を知るようになった者は、「御霊の初穂をいただいている」と書いてあります。私たちは、御霊を持つことによって、救われ、神の子どもとなったのです。

もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるのなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

(ローマ8・9)

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。
(イコリント3・16)

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもつて、主の栄光を現わしなさい。
(イコリント6・19、20)

主イエス様を知るようになる、とはどういうことでしょうか。洗礼を受けているとか、教会に属しているとか、聖書の知識をたくさん持っているとかが決定的に大事なものではありません。「主イエス様との出会いによる救いの体験」こそが大切です。イエス様と出会った人は、イエス様を知っている人です。そして、イエス様を知ることとは、「永遠のいのち」を持つていることです。主なる神の御霊を持っている人は、「神の子ども」です。御霊によって、人はイエス様のからだである教会、つまり神の大きな家族の一員となります。それは、自分自身の努力によってなるのではなく、神の御霊の創造的な働きによってそうなるのです。御霊がその人を支配すると、すべてが新しくなります。つまり、その人は、自分の過去、現在、将来に対して、まったく違った見方、生き方をするように変えられます。

イエス様の十字架のみわざによって、人間の罪は、完全に消し去られました。ですから、自分の「過去」は、自分にとつてもはや重荷ではなくなりました。なぜなら、イエス様の十字架の血潮によって、私たちは贖われたからです。

主イエス様との出会いによって、「現在」に対しても、人は全く新しい関係を持つようになり、よみがえられた主は、信者一人一人を導いてくださるので、安心してすべてをゆだねることができます。それは不安からの解放を意味します。

また、御霊が私たちの内に宿ってくださいることによって、「将来」に対しても、全く新しい関係を持つようになります。将来が不確実なものではなく、イエス様が再び来られて、新しい神の国が実現することを確信するようになります。

これらのことは、御霊を通して私たちに与えられます。そしてこれらは限りなく大きな宝です。しかし聖書は、これらのことはまだ「初穂」に過ぎない、と言っています。「初穂」だと言うことは、後に「もっと大きな収穫」があることを意味します。最も大切なことはこれから起こります。それは、「復活」によって新しいからだをいただくことと、再臨によって世界がまったく新しくなることです。私たちがいただいた新しいのちは、現代の不信仰な世とは、まったくあい容れま

せん。

御霊によって、私たちは将来のことを知っているので、喜ぶことができます。現代の多くの人々は、この世のことに熱中し、自分自身のことばかり考え、追求していますが、その結果は不幸と不満、そして滅びでしかありません。

これに対して、イエス様を知り、イエス様に頼る者は、自分たちの罪が赦され、主なる神との平和を持ち、永遠のいのちをいただいているから、いつも喜んでいきます。イエス様を知っている人々は、真に富んでいる人々です。彼らが持っているのは「永遠」であり、決して消え去ることのないものです。

2 主イエス様を知るようになった者は、何を約束されているのでしょうか。

冒頭の聖句で、パウロは言葉を飾らずに真理を語っています。それは、救われた信者といえどもうめき苦しむ者であり、待ち望む者である、ということなのです。すべての被造物とともに、私たちもまた虚無に服している、とあります。美しい花もしほみ、麗しい日々も過ぎ去り、人間は年老いて死んでいく。それが22、23節にある「うめき」です。パウロは、今のこの状態を、22節で「ともにもうめきともに産みの苦しみをしている」と記しています。イエス様を知らない人々は、自分はこの状態にない、と錯覚しているか、またはこの問題について、あえて考えようとしません。

しかし遅かれ早かれ、「イエス様なしでは、ほんとうの満足と平安は得られない」ということを認めざるをえなくなるのです。

現代は、いたるところで「約束」が横行しています。しかし、それらの「約束」が実際に果たされることはごくまれです。現代の特徴は、無責任、変化、無常、そして死、滅びです。その原因は、神から離れていることであり、神を知らず、認めようとしないことです。才能、健康、富、美貌、権力などに恵まれたこの世の成功者でも、実はその心の内は孤独であり、空虚であり、満たされてはいないのが実情です。

歴史を見ると、人間はいろいろな理想を求め、追求してきたことがわかります。ギリシャの理想は、高貴な性質と美しい肉体を持った人間でした。しかし、この理想は、今日に至っても達成できない幻想です。マルクスによる共産主義体制の理想も、階級のない平等な社会の実現という理想も、今日まで実現されたことはありませんでした。また、現代のヒューマニズム、人道主義は、完全な福祉国家を目標とし、戦争、悲劇、飢え、破滅のない平和で安全な社会を作ろうとしています。この目的も実現されえないのは、現実を見ればわかります。

第一次世界大戦で壊滅したドイツにおいて、アドルフ・ヒットラーは、自分に従えば、「ドイツ国民は一人残らず自分の家と車を持つようになり、夢のような生活をする事ができる」と約

束し、しかもそういう状態が「二千年間続く」と公約しました。支持を得たヒットラーは総統となり、13年間ドイツを支配しましたが、その公約をはたすどころか、無謀な戦争の末に廢墟のペルリンで自殺してしまつたのです。

なぜ、それらの理想は、幻想に過ぎなかつたのでしょうか。有名な科学者のアインシュタインは、「世界の唯一の問題は人間の心の問題だ」と言いました。多くの「理想」は、人を取り巻く「環境」を変えることを目標にしていますが、そこに住む人間の「心」が変わらなければ、「環境」は何の価値も持ちません。

現代はまた、「技術」の時代です。人間は新しい技術を開発し、驚くべきものを次々に作り出しますが、人間そのものは途方にくれていると言えましょう。何と多くの人々が、未来に対して不安を持っていることでしょうか。その不安の原因は、突き詰めれば一つの問題、虚しさ、虚無が解決されていないことにあります。

仏教徒は、「無常」、つまりすべては虚しく、過ぎ去ってゆくものだと言っています。しかし、イエス様を信じる私たちは、救いの確信を持っています。私たちが待ち望んでいるのは、無や滅びではなく、主なる神の子どもとして、主とともに永遠のいのちに生きる幸せです。

3 主イエス様を知るようになった者は、何を期待しているのでしょうか。

最初に引用したローマ人への手紙8章の18節と21節に、「栄光」とあります。「栄光」とは、たとえば死、罪、負い目、憎悪、欠乏、苦悩、悲哀など、人間の苦しみの源がまったく存在しない状態だと言えましょう。黙示録21、22章を読めば、栄光とは何であるかははっきり知ることができます。主なる神はイエス様を遣わすことによって、永遠に救われる道を開いてくださいました。十字架の上で主イエスは全人類のための救いのみわざを完成されたのです。

また、イエス様のよみがえりは、「死は終わりではない」ということの証明です。主を信じる神の子どもたちは、イエス様の力を体験しており、永遠のいのちに生き、イエス様の再臨によって主の大きいなる栄光が明らかにされるといふ事実を確信しています。

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいます。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意思ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。
(ローマ8・19、21)

このみことばは、私たちが被造物と一体であることを示しています。私たちだけが苦しんでいるのではなく、被造物全体も苦しんでいるのです。私たちは被造物の苦しみの一つを、生存競争の中に見ることができます。

人間の罪のために、被造物もまた、死と苦しみに服するようになったのです。しかしそれは永遠にとわくわけではありません。もしそうなら、それはあまりにひどい絶望の状態だからです。

私たちイエス様を知る者は、私たちのからだの救いを待ち望んでいるだけでなく、全被造物が滅びの束縛から解放されることをも望んでいます。

しかし、私たちには、筆舌に尽くしがたい栄光が待っています。戦争中の捕虜たちは、いつの日か故郷の家族と再会できることを期待して、苦しい重労働と欠乏に耐えました。これと同じように、イエス様を知るようになった者は、来るべき栄光を望み見ることによつて、今のときのあらゆる苦しみに耐える力が与えられるのです。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

(ローマ 8・18)

またパウロは、今の時の苦しみと、やがて信者たちに現わされる栄光とを比較して、今の苦しみなどはとるに足りない、と考えました。

彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれた

ことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。

(Ⅱコリント11・23～28)

パウロは、自分が体験した苦難をこのように書いていますが、それらの苦難でさえ、いつまでも続くのではなく、やがて私たちに現わされる栄光は、比べものにならないくらい大きく、すばらしく、しかも永遠のものである、と言っているのです。

イエス様を知るようになった人々は、この世が人間の努力によって完全なものになる、という幻想から完全に解放されています。人類がこの世を改善しようとするあらゆる試みの結果はどうなるでしょうか。それは、混乱と退廃に満ちた現代の状態を見れば明らかです。

ただイエス様の再臨だけが、これらの状態を根本的に一新することができます。イエス様が再び来られるとき、主の栄光は明らかにされ、すべてのものは作り変えられ、被造物は主なる神の

子どもとしての栄光にあずかるものになるのです。

イエス様を知っている人々は、喜びをもって生き、苦しみ、そして死ぬことができず。なぜなら、死や滅びから解放され、主イエスの栄光がすべてのものに満ちあふれる未来を確信し、主イエスとともに永遠に生きる喜びを持っているからです。

ヨハン・セバスチャン・バッハは、晩年には目が見えなくなっていました。死の直前に、突然目が見えるようになりました。彼の妻はバラをとり、彼の目の前に置いて、「見えませんか？」と尋ねました。するとバッハは、「見える」と言い、続いて、「私とお前がもうじき見るようになるバラに比べれば、このバラの色などとるに足りない。私とお前がもうじき聞くであろう音楽に比べれば、この世の音楽などとるに足りない。私は、この目で、私の主イエスご自身を見るのだ」と、確信に満ちて答えました。これこそ、いきいきとした望みに満ち、信仰の確信に満ちた告白です。

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。なお海外にもキリスト集会、よろこびの集いが広がっていますので、英語とドイツ語を入れました。ご活用ください。

1 みことばの大切さ

真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。

(ヨハネ 17・17)

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとつて楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。

(エレミヤ 15・16)

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

(Iヨハネ 5・13)

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。(Iペテロ 1・23)

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

(詩篇 119・105)

みことばのすべてはまことです。あなたの義のさばきはことごとく、とこしえに至りま
す。

(詩篇 119・160)

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。(詩篇 119・162)

2 悔い改めと信仰

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦

し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(Iヨハネ 1・9)

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

(箴言 28・13)

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。

私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のながめを赦されました。

(詩篇 32・1～5)

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。

悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいから。

(イザヤ 55・6、7)

「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」
(ヨハネ 6・37)

3 私たちの身代わりとなられたイエス

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によつて、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて行つた。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。
(イザヤ 53・4、6)

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。
(Ⅰペテロ 2・24)

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であつて、神の義となるためです。
(Ⅱコリント 5・21)

4 血潮の価値

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

(イザヤ 1・18)

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもつて見のがして来られたからです。(ローマ 3・24、25)

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(Iヨハネ 1・7)

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。
(エペソ 1・7)

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によつたのです。
(一ペテロ 1・18、19)

兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝つた。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかつた。
(黙示 12・11)

5 確信の根拠

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造つた方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖つたのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」
(イザヤ 43・1)

「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」
(イザヤ 43・25)

「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。」

(イザヤ 44・22)

そして女に、「あなたの罪は赦されています。」と言われた。

(ルカ 7・48)

「なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。」

(ヘブル 8・12)

「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」(ヘブル 10・17)

東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。

(詩篇 103・12)

金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」

そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れませんが、私に対して何ができません。」

(ヘブル 13・5、6)

また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。

(マタイ 13・22)

だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいていせつなもの、からだは着物よりたいていせつなものではありませんか。

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もつとすぐれたものではありませんか。

あなたがたのうちだが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができずか。

なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。

きょうあつても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。

こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。

(マタイ 6・25～32)

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

(ピリピ 4・6、7)

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

堅く信仰に立つて、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。

(Iペテロ 5・7、9)

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさない。

(詩篇 55・22)

7 試練の時

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

(ヤコブ 1・12)

ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。

神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。

(ヤコブ 4・7、8)

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさい

ません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。
(Iコリント 10・13)

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよ
うに、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたが
たの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあつてその永遠の栄光の
中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、
堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。
(Iペテロ 5・8〜10)

あなたがたは、信仰により、神の御力によつて守られており、終わりのときに現わされ
るように用意されている救いをいただくのです。

そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいきます。いまは、しばらくの間、さまざま
の試練の中で、悲しまなければならぬのですが、

信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであつて、イエ
ス・キリストの現われのときに称賛と光栄と榮譽に至るものであることがわかります。

(Iペテロ 1・5〜7)

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

(Ⅱコリント 12・9、10)

そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。

この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

(ローマ 5・3、5)

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

(ローマ 8・28)

疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかつて上ることができ、走つてもたゆまず、歩いても疲れない。

(イザヤ 40・29、31)

すぐに起こるはずのこと

ヨハネの黙示録

第4巻

定価 350 円
(本体 333 円)

2004年12月15日初版

著者 ゴットホルド・ベック

編集 酒井千尋 清水洋一 福留伸子
石塚優子 井野文雄・副子
清水まみ
装幀 飯守格太郎 上野文子 小林珠美
表紙写真 シュベスター・ハンナ・プラント
印刷 新生宣教団

発行所 キリスト集会

〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11

電話 0422-21-8450 (集会所)



価格 350円 (本体価格 330円)

「わたし(主)は雲の中に、わたしの虹を立てる。
それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。」 創世記 9・13

撮影 シュヴェスター・ハンナ・ブラント